

大本教學

第十号

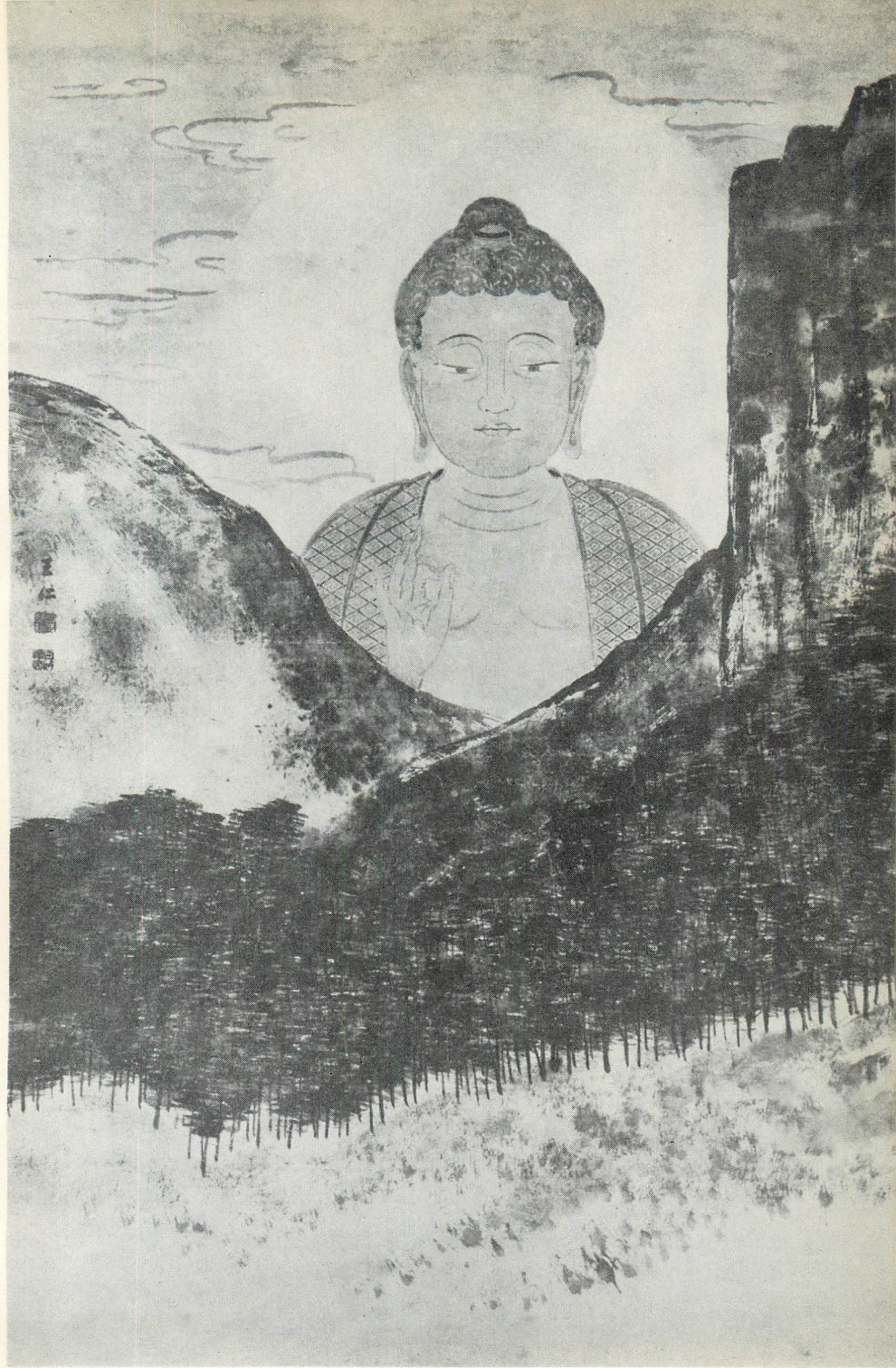


特集・五六七神

カット・出口聖師筆／一筆大達磨



瑞靈真如出口王仁三郎聖師（昭和8年10月22日）



出口聖師筆 「山越え弥勒聖像」 (縦7尺2寸×横4尺8寸)



山越みろく扮装聖師（昭和8年10月21日撮影）



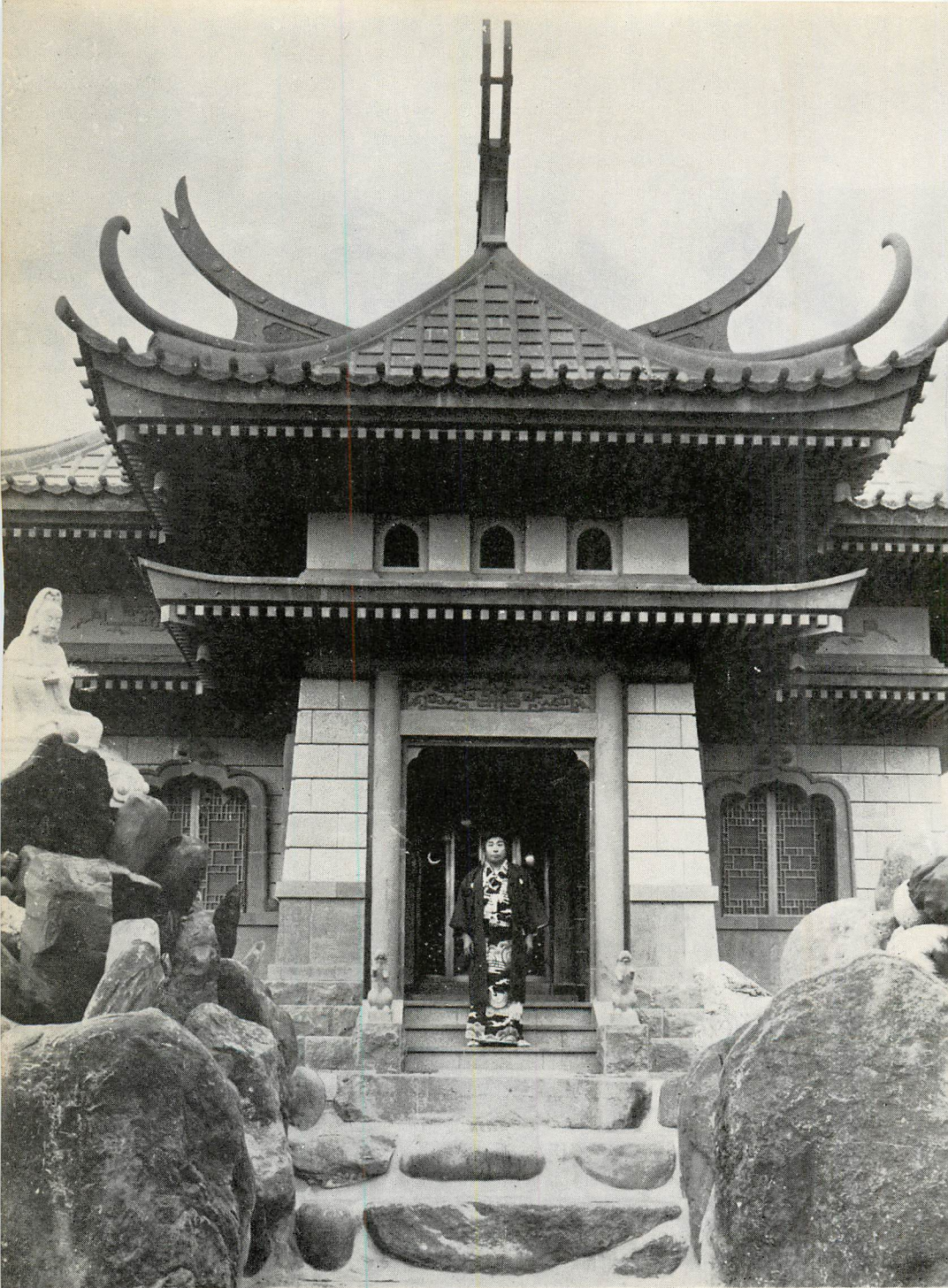
出口聖師筆「南西出現瑞靈神」（縦7尺8寸×4尺9寸）



素盞鳴尊扮装聖師（昭和8年10月22日撮影）



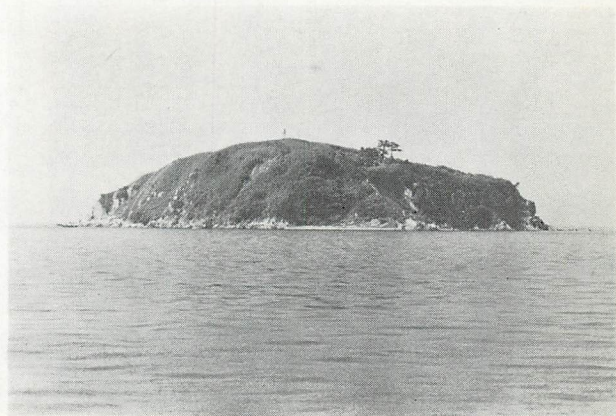
出口聖師筆「聖三合仁愛神像」(縦7尺2寸×横4尺9寸)



みろく様の宮居「月宮殿」に立たれる出口聖師

彌勒出生

彌勒出生 出口聖師筆 (朝陽館藏)



兵庫県高砂沖の神島 (昭和46年9月8日影撮)

特集・五六七神

大本教学 第十号 目次

口絵

①瑞霊真如出口王仁三郎聖師肖像／②山越え弥勒聖像／③山越みろく扮装聖師／④南西出現瑞霊神／⑤素盞鳴尊扮装聖師／⑥聖三会仁愛神像／⑦みろく様の宮居「月宮殿」に立たれる出口聖師／⑧出口聖師筆弥勒出生／⑨兵庫県高砂沖の神島

弥勒神／短歌▽

昭和青年・朝嵐・神の国―抄出歌

ミロクの語源と意義

ミロクの語源……………神霊界…一八
ミロクの意義……………”……………元
世界の主師親三徳具足神……………

……………神諭火の巻…元
仏典に示された弥勒菩薩……………
……………霊界物語…二〇

ミロクの神名

ミロクの神の本体……………神霊界…二五
天のミロク……………神霊界…二七
天の御三体の大神……………”……………二七
元の天の御先祖……………神諭火の巻…二六
霊能大神、天照大神、月読神……………
……………神諭火の巻…二六

天照皇大神はみろく様……………”……………元
至仁至愛神様はみろく様……………”……………元
神素盞鳴尊・月読尊もミロク……………”……………元
至仁至愛の大神の神格の一部は
神素盞鳴大神……………霊界物語…元
月の大神……………神諭火の巻…二〇



立橋天／筆聖師出口・カット

ミロク神の神格と救世の神業

ミロクの大神……………霊界物語……………三

救世神仁愛大神……………”……………三

瑞霊大神は一切の神権で

宇宙に神臨……………”……………三

弥勒は宇宙改造の神業……………”……………三

五六七の神……………”……………三

救世主は五六七神・神素盞鳴大神

仁愛の真相……………

……………霊界物語……………三

弥勒は出口聖師

出口聖師の靈魂は素盞鳴尊……………

……………神諭火の巻……………三

瑞霊聖師は五六七の化身……………神靈界……………三

太元頭津男の神は至仁至愛の神……………

……………霊界物語……………三

法身弥勒・応身弥勒・報身弥勒

法身・応身・報身の弥勒……………神靈界……………三

弥勒の世……………”……………三

ミロク三会と王ミロク

ミロク三会……………神の国（水鏡）……………三

王ミロク様……………”……………（”）……………三

弥勒胎藏経と霊界物語

神島とミロクの大神……………

……………神諭火の巻……………三

千座の置戸の神業……………霊界物語……………三

厳の御霊は瑞の御霊と顕現する……………”……………三

五六七の身魂……………”……………三

弥勒菩薩は出口聖師……………”……………三

出口聖師は真の救世主……………”……………三

救世主は出口聖師……………”……………三

神幽現の救世主……………”……………三

神の経綸……………水鏡……………三

弥勒の五十六億七千万変化……………神の国……………三

仏説観弥勒下生経……………神靈界……………三

神歌……………神の国……………三



苦集滅道	神の国（水鏡）	卅
五六七神政の成就	靈界物語	亥
三界の大革正	亥
人生の大本分
非理法権天の真諦
弥勒の説法

ミロクの種別

聖師と天のミロク	神靈界	ハ
六六六の大神・五六七の大神	ハ
神世開基と神息統合	靈界物語	ハ
神界・現界の建替
みろくさまのおちすじ	神諭

ミロクの神の別称

神靈活動の異名	神靈界	ハ
未申の金神・素盞鳴尊・小松林命	ハ
弥勒大聖御稜威の神	靈界物語	ハ
三界の救世主五六七神の帰神	ハ
救世主義	神の国	ハ
五六七様の代	神靈界	ハ
五六七如來の大作願	靈界物語	ハ
安養世界の建設	ハ
三宝金神とへつい金神	神靈界	ハ

弥勒出現の時期と出口聖師

五十六億七千万年の謎	神靈界	ハ
五十六億七千万年	月鏡	ハ
みろく大祭の意義	真如能光	ハ
みろく大祭概況	ハ
聖師歌日記	ハ
現はれかけたミロク様	玉鏡	ハ
月宮殿は弥勒様のお宮	靈界物語	ハ
月の大神の宮殿月宮殿	ハ
天書	玉鏡	ハ
弥勒三會の大説法	靈界物語	ハ

西王母

謡曲言靈録	神の国	一〇六
功驗録	靈界物語	一〇八

あとがき	一九
------	-------	-------	-------	----



瑞靈苑（熊本県）のみろく神像と出口聖師（大正12年9月2日）

弥勒神

地の上に七十五柱の小弥勒現せうみろくはれたまふ時は今なり
小弥勒次ぎ次ぎ名のり上げにつつ綾あやの高天たかまに集まり来らむ
ありとある国のことごと小弥勒現はれ地上を新たに守らむ

日の本は誠の生神ゐます国天地の神の本津祖国もとつ おやぐに

天地の神の祖国日の本の若人たちの立つべき時なり

大弥勒世おほみろくに現はるるその日までに身魂きたえよ昭和の青年

大弥勒現はるる時は近めども若き日本の準備未だし

弥勒神諸相を顕はし神となり仏と化りて世を開きたまふ

青山は枯山なみくさなして蒼生の悩まむ時ぞ現はる弥勒よ

月神の精靈地上に降りつつ弥勒みわきの神業成し遂げたまはむ

自湧的智慧と慈愛に充たせたる弥勒の出現待つぞ久しき

一さい万事知らぬ事なき人こそは弥勒の神の化身なりけり

山河草木言問ひさやぐ今の世は岩戸隠れの姿なるかな

政治経済界の行き詰りゆきつまりつつ弥勒出でまさむ

末法の世となりし今日は弥勒神の現ます時ぞ心なゆるしそ

上下一致億兆心を一にする政治を弥勒の神代とぞいふ

皇祖皇宗の御遺訓まつたく実現の時こそ弥勒の神代なるべし

惟神誠の道に地の上の人の服ふ弥勒の神代なり

罪なきに罪に問はれて苦しみし誠の身魂は弥勒なりけり

地の上の罪の限りをあがなひて世人を愛ぐむ弥勒の神人

大本の昭和青年心せよ燈台直下暗黒のたとえを

青年よせくなあせるなあわてゐるな若き日本の柱は立てり

小乗の教にかぶれし小人が大神人を怪み見るなり

小根はいかに諭すも教ふるも悪田のごとく実らぬものなり

中根は教を聴きてたちまちに愛と善とに帰順するなり

上根は教へずとても天地の神の心を悟り得るなり

大乘に住する弥勒の神人を明き盲目どもがののしり騒ぐも

弥陀の世は終末となりて弥勒神世人を救はす世は近づけり

赤門を出でたるばかりの科学タンの如何で知り得む神の摂理を

曲津神伊猛り狂ふ今の世は弥勒の神の出現さまたぐ

三千年の神の経綸みぐみぞ曲神の如何にあせるも何の詮なし

土中より世に生れ出でてもろものなやみ悟りし弥勒の生神

弥勒てふ名は仁愛の意義ぞかし人類愛善根本の神

愛善の誠に燃ゆる吾にして曲の妨げ時じく受けつつ

青年の勇み立ちつつ国のため働らく時はすでに到れり

石の上いそ かみふるき道德宗教を捨てて新たに生るる世界よ

世を憂ひ人を助くる神人はいづれも弥勒の片鱗なりけり

新しき若き日本に生まれませる若き弥勒の雄猛び知らずや

種々の大三災も小三災も弥勒出現の先驅なるべし

愛と善ただ一筋の誠もて永久に治むる弥勒の御代なり

弥勒神世に立ちたまふあかつきは地上の経綸ゆたかにめぐらむ

経済界豊かならずば地の上の人の生活救ふすべなし

今までの地の国々の経綸法根本改めたまふ弥勒よ

野心あれば小さき事にもさはぐなり清き身魂は落着き払ふ

何事も弥勒の神の御心のままなる世界となれるを知らずや

弥勒神の許しなくして何事も成立せざる世とはなりたり

大弥勒世に現はれて道を説けど世の鼻高の耳はしひたり

大弥勒つるかめやま鶴亀山に現はれて千代万代の経綸を為す

久方の天より降りし大弥勒あづまは東方の光よ闇世を伊照らす

○

天照皇大神は月の座の独占神ぞと事件を起せり（月の座は大本のこと）

弥勒如来ミロク菩薩の識別を知らぬ司が無理をいふなり

素戔鳴の神は至愛にましませば弥勒の神と奉称するなり

愛善と真信にます大神は伊都能売の神と別称するなり

大神の大神格の内流を受けたる人の世を光すなり

言霊学知らぬ司が神名をかれこれ言問ふ闇世は憂れたき

（「昭和青年」誌昭和七年八月号）

みろく神は天之御中主神天祖^{あまつみおやくにつみおや}國祖を指し奉る

御中主神の靈徳完美せるを天照皇大神とまをせり

我國の皇道世界の実現を弥勒成就と宣言せしか

（第二次大本事件回顧歌「朝嵐」三・拔萃）

○

瑞月が口述になる物語古今聖者の言葉も織り込む

聖談の中に織り込む言の葉の先哲に似しは経綸のため

まだ人の夢にも知らぬ神界の奥義を漏らす靈界聖談

天も地も古今東西かはらぬ限り真理語れば一徹に出づ

キリストも釈迦も孔子も哲人も弥勒出世の先達なりけり

みろく神百の学者に靈懸けて持ち場持ち場を語らせ給へり

古今東西聖者の説をとりまとめ活かすはみろくの働きなりけり

世の中の総てのものは弥勒神出世のための経綸なりけり

無限なる世の物事を一人して為す間なければ先駆を遣はさる

古今東西一切のものを弥勒神出世の為めの先き走りなる

ミロクの語源と意義

ミロクという言葉は、仏典中にあらわれている。釈迦に予言されて五十六億七千万年後に、兜率天から降誕して地球上の人間世界に、現実に衆土を建設して衆生を済度するという未来仏のことである。マイトレーヤ（梵語）といい慈氏と訳され、漢字で弥勒（ミロク）と書いている。パーリ語の仏典ではメッテヤという。

もともと弥勒の世が来るということは、仏典の中に出てくるが仏教ではマイトレーヤに関して記載された経文を弥勒経となえ



釈迦さまにこの世の中が成つたこと悉多る俺は弥勒が恋しひ・王仁自讃

釈迦／出口聖師筆

(一)弥勒下生経、(二)姚秦の鳩摩羅什訳の弥勒下生成仏経、(三)唐の義浄訳の弥勒下生成仏経、(四)弥勒大成仏経、(五)弥勒来時経、(六)弥勒上生経（観弥勒菩薩上生兜率天経）の六部経がある。

ミロクは至仁至愛の意である。大本神諭の上からは宇宙（三千世界）の主師親なる神の意である。日本語では「ミタマノフユ」ということになる。

大正六年十月二十五日

編者（出口王仁三郎）

神諭の御文の中に所々《ミロク》といふ言葉がありますが、ある説者から、純粹の皇道すなはち惟神の道を主唱しながら、仏祖の言つたミロクなどの語があるのは、少しく了解に苦しむが、真正の神の教なら、何とか神の名を付けて掲載されては如何、実は見苦しいからとの忠告がありました、それは尤もな理由であります。編者も最初は右様の主張を致してをりまして、一度出口開祖に何とか神様に御名を神道風に、かえて出してもらえませぬかと、御伺ひ致したことがありましたが、開祖は心よく承知なされて、早速神界へその由を奏上されましたところ、神様の御言葉には、ミロクと申すことは仏祖が申したことであれど、実は神から言はしめたのである。釈迦は阿弥陀を説いて、ミロクを恐れてゐたのである。仏の教は三千年の後に亡びる、その後へミロクの神が出ると思したのであるから、神界の仕組であるから、今の処では変えることは出来ぬ、後から解りてくるとの御神勅で、相変らずミロクの名をお用ゐになつてをられるのであります。ミロクといふことは梵語であつて、漢語に訳せば仁愛といふことになり日本の語に訳せば《ミタマノフユ》といふことであります。これを皇国言靈学の上から解釈しますれば、

『ミ』は充るなり、水なり、身なり、三なり、体なりの意義。『ロ』は凝るなり、長るなりの意義。『ク』は組むなり、国なり、来るなり

の意義であります。天地開闢の始にあたり、国祖の神々が久良芸如す漂よへる国を修理固成し給ひしは、すなはちこれミロクの活動であります。二度目の世の立替は根本からの立替で、元の昔のそのままのことが、出て来るのであります。今日の世の中はあたかも久良芸如す、漂よへる国であります。これを至仁至愛の元の生神が地上に降臨されて、世界万民のために修理固成をあそばされるので、この活動を一言に約めて、ミロクの世と申されたのであります。なほ言霊の上から詳しく説けば、その意義が十分に判りますけれども、なかなか永くなりませんから、後日詳細の理解は発表する考へであります。

○（「神靈界」大正10年12月号10～11頁）

ミロクの意義

大本開祖の神論にミロクの神様と示されてゐるのは、釈迦寂滅後五十六億七千万年の後に現はれるといはれてをる慈愛深き神力のある仏とよく名において似ており、その他のすべての点において酷似してをる救世主の出現を示されたのでありまして、皇国言霊学の上より解釈を致しますと

iii

形象具足成就なり、眞実なり、玉に成るなり、産靈の形を顕はすなり、道の宿なり、大陰なり、体なり、水なり、

日

凝結なり、予するなり、心の姿なり、色なり、諸なり、対偶なり
潤く渡るなり、

三大歴の起元なり、恒天の底なり、大々の劫々の極元なり、明暗交替なり、条々の辻なり、現在なり。

右言霊の太要を見ればミロクの神様は大陰を機関としたまふ月の大神にして、また天照皇大御神の稜威発光し給ひ。万世不窮に国土を平けく安らけく統治したまふ大慈大悲の大神にましますことが判るのであります。世の中には大本は皇道を唱導しながらミロクなどと怪しいことをいふと思ふ方があるかも知れませぬから、皇国言霊学、八咫鏡に照らしてその太要をここに述べておきました。

○ (「神霊界」大正7年7月1日号5〜6頁)

世界の主師親三徳具足神

大正七年旧二月二十六日

天照皇大御神様あまてらすみかみが天の御先祖様であるなれど、今迄は世が逆様にたりて居りたゆゑに、地の先祖までも、斯の世に無い同様に為てありたので、斯の世は薩張り永い間暗黒界となりてありたのが、時節が参りて、日出の守護になりたぞよ。至仁至愛神きろくしあいじんは、善一つの何んとも譬へるものも無い、円満至真えんまんししんの、何処まで往ても角の無い、世界の主師親三徳具足神きろくしんさんとくぐそくしんであるぞよ。

天ではミロク様なり、地の世界は大国常立尊が構はねば、外の御魂では、到底此の乱れ切つた世を立直して、誠一つの神国にいたす事は出来ぬぞよ。

撞の大神様は、地の世界では、足定満様の靈魂の性来であるから、

此の足定満様の誠の心に成りたなれば、世界の事は何事に依らず、思ふやうに、箱さしたやうに、行き出すぞよ。

○ (「大本神論」火の巻四二〜四四頁)

仏典に示された弥勒菩薩

神論に『松の代、弥勒の代、神世にいたすぞよ云々』とあり、弥勒は至仁至愛の意にして、宇宙万有一切の親なり師なり主なりと説きたまへり。読者の中には、仏教の教典によりて釈迦の説と引き合はせ、ミロクは七仏出生説の中にある一仏にして、大本の神論にあることき尊き位置にある仏または神にあらずと言ふ人あり。仏書のみを読みたる人の意見としては、もつとも至極なる見解といふべしである。

王仁は、ついでももつて本巻の末尾において、仏典に現はれたる弥勒の位置をここに掲載して、読者の参考供して見ようと思ふ。

法華經の序品第一に

(前略)

菩薩摩訶薩ぼさた八万人あり。皆阿耨多羅三藐三菩提あうくとらさんみくそんぼだいに於て退転せず、皆陀羅尼だらにを得、樂説弁才らくとくべんさいあつて不退転の法輪を転じ、無量百千の諸仏を供養し、諸仏の所に於て衆の徳本を植ゑ、常に諸仏に称嘆せらるることを為なす、慈を以て身を修め、善く仏慧に入り大智に通達し、彼岸に到り、名称普く無量の世界に聞こえて、能く無数百千の衆生を度す。その名を、

一 文珠師利菩薩もんしゅしりぼさつ

二 觀世音菩薩くわんぜんおんぼさつ

- 三 得大勢菩薩 とくだいせいほきさつ
 四 常精進菩薩 じょうしんじんほきさつ
 五 不休息菩薩 ふくしゅうほきさつ
 六 宝掌菩薩 ほうしやうほきさつ
 七 藥王菩薩 やくわうほきさつ
 八 勇施菩薩 ゆうせほきさつ
 九 宝月菩薩 ほうぐわつほきさつ
 十 月光菩薩 ぐわくくわつほきさつ
 十一 満月菩薩 まんぐわつほきさつ
 十二 大力菩薩 たうりきほきさつ
 十三 無量力菩薩 むりやうりきほきさつ

- 十四 越三界菩薩 えつさんがいほきさつ
 十五 跋陀婆羅菩薩 ばつだばらほきさつ
 十六 跋陀婆羅菩薩 ばつだばらほきさつ
 十七 寶積菩薩 ほうしやくほきさつ
 十八 導師菩薩 だうしほきさつ
 と曰ふ。是の如き等菩薩摩訶八万人と俱也。
 と記してある。この菩薩も靈界物語を全部通読されなば、何菩薩は何
 神、何命に当たるやといふことは自ら判明することと思ひます。
 その時に、釈提桓因、その眷属二万の天子と与に俱なり。復た
 一 名月天子 みやうくわつてんし
 二 普香天子 ふかうてんし



月 天 使

海原の国のことごと守り坐す瑞の三靈の
 月天使はも 王仁

—— 出口聖師筆／聖者の面影の内より ——

三 宝光天子ほうくわてんし 四大天王あり、其眷属万の天子と与に俱なり

四 自在天子じざいてんし

五 自在天子じざいてんし

その眷属三万の天子と与に俱なり。

娑婆世界の主

六 梵天王ぼんてんわう

七 尸棄大梵しきだいぼん

八 光明大梵くわうみやうだいぼん

等、その眷属万二千の天子と与に俱なり。

八の竜王あり、

一 難陀竜王なんだりゆうわう

二 跋難陀竜王ばつなんだりゆうわう

三 娑伽羅竜王しやがらりゆうわう

四 和修吉竜王わしゅうきつりゆうわう

五 德叉迦竜王とくしやかりゆうわう

六 阿那婆達多竜王あなばだつたりゆうわう

七 摩那斯竜王まなすりゆうわう

八 優鉢羅竜王うはつぱりゆうわう

なり。各若干千百千の眷属と与に俱なり。

四の緊那羅王あり、

一 法緊那羅王ほふきんならわう

二 妙法緊那羅王めうほふきんならわう

三 大法緊那羅王だほふきんならわう

四 持法緊那羅王ちほふきんならわう

なり。各若干千百千の眷属と与に俱なり。

四の乾闥婆王あり、

一 樂乾闥婆王がくけんたつばわう

二 樂音乾闥婆王がくおんけんたつばわう

三 美乾闥婆王みけんたつばわう

四 美音乾闥婆王みおんけんたつばわう

なり。各若干千百千の眷属と与に俱なり。

四の阿修羅王あり、

一 婆稚阿修羅王ばちあしゅらわう

二 佉摩質多羅阿修羅王きやろけんたあしゅらわう

三 毘摩質多羅阿修羅王びましつたあしゅらわう

四 羅睺阿修羅王らごあしゅらわう

なり。各若干千百千の眷属と与に俱なり。

四の迦楼羅王あり、

一 大威德迦楼羅王だいゐどくからわう

二 大身迦楼羅王だいしんからわう

三 大滿迦楼羅王たいまんからわう

四 如意迦楼羅王にょいかからわう

なり。各若干千百千の眷属と与に俱なり。

韋提希の子阿闍世王若干千百千の眷属と与に俱なり云々。

と、示されてある。これをもつてこれを見る時は、大本教祖の筆先なるものは神の道とは言ひながら、最初より仏神一体の神理により、現代人の耳に入りやすいやうに仏教の用語をも用ゐられてあることを覺り得らるるのである。

明治二十五年正月元日に初めて、良様が出口教の金神祖に神がかりされた時の大獅子吼は、三千世界一度に開く梅の花、良の金神の世になりましたよ。須弥仙山に腰を懸け良の金神世界を守るぞよ云々。

三千世界も仏教中の用語であり、良の金神も神道の語ではない。須弥仙山は仏教家の最も大切にしてゐる靈山である。また、ミロク菩薩とか竜宮とか竜神とか、天子とか、王とか現はれてをるのは、ことごとく仏教の語を藉りて説かれたものであります。ゆゑに筆先にある王とは、八大竜王および諸仏王の略称であり、天子と言へば明月天子めいげつてんし、普香天子ふかうてんし、宝光天子ほうこうてんし、四大大王しだいだいおうその他諸天子、諸天王の略称であることは勿論であります。自在天子じざいてんし、大自在天子だいざいてんし、梵天王ぼんてんわう、その他王の名のついた仏はたくさんにあり、仏も神も同一体、元は一株と説いてある。また大自在天子だいざいてんしのその眷属けんぞく三万の天子と与ともに俱ともなりとあるを見

れば、天子とは即ち神道にていふ神子みこまたは神使であります。要するに、神の道、仏の道に優れたる信者の意味になるのであります。天子は、また天使エンゼルとキリスト教ではいつてゐます。大本の筆先は教祖入道の最初より仏教の用語で現はせられたのであるから、すべて仏教の縁によつて説明せなくては、大変な間違ひの起こるものであります。

王仁は弥勒菩薩みろくぼさつにちなめる五百六十七節を口述し了るに際し、仏教に現はれたるミロク菩薩の位置を示すと同時に、筆先は一切仏の用語が主となりて現はれてをることをここに説明しておきました。

ア、惟神靈幸倍ませ。

大正十一年十一月四日

（「靈界物語」第14巻跋文三〇二―三二〇頁）

ミロクの神名

開祖の大本神論の中にあらわれた「ミロクの神」は、天之御神主大神で、高皇産靈神、神皇産靈神と三神即一体にます造化の神である。つぎに造化三神の御精霊体の顕現にます（撞の大神）天照皇大神（日の大神）神伊邪那岐神、（月の大神）神伊邪那美神の三神即一神にます天の御三体の大神の御事である。

出口聖師の帰神の神筆「太古の神の因縁」にはミロクの神の神格の太要を明示されている。



高山の伊保理を分けて瑞御魂地上に真如の光り投げつつ・王仁自讃

山越弥勒／出口聖師筆

ミロクの大神様といへば至仁至愛の神、世界万民を平安無事に安楽に暮らして下さる神様の総称であるが、第一に宇宙の主宰の天之御中主大神の別称であり、その御顕現、天祖天照皇大御神であるが、同時に天照皇大神（大国常立大神）の御神格の顕現である神素盞鳴命いわゆる月読尊もミロクの神様である。地球の創造神大国常立大神の分霊にます国祖国常立大神もミロクの大神である。

第二次大本事件回顧歌「朝嵐」三に

みろく神は天之御中主神天祖國祖を指し奉る

と歌われた通りである。

ミロクの神の変え名として一般に最も親しまれているのは「ダルマ」さまである。ただし、ここに言う「ダルマ」は大本神論にわざわざ禪宗のダルマ大師ではないと説明されている。大正七年旧二月二十六日の神論に

「撞の大神様は、地の世界では、足定満様の靈魂の性来であるから、この足定満様の誠の心に成りたなれば、世界の事は何事によらず、思ふやうに、箱さしたやうに行き出すぞよ」と示されている。

○

ミロクの神の本体

小松林の命、瑞の御魂の宿れる肉の宮に入り、その手をかりて、太古の神の因縁をつまびらかにす。天の御先祖様は、天之御中主大神様なり。これを今までの仏者ミロク菩薩と称へたり。ミロクは、至仁至愛の神の意あり。今はしばらく、ミロクの神として、神界のふかき縁由を説くべし。ミロクの神は、天系、靈系、火系、父系なる、高皇產靈神を神漏岐之尊として、宇宙の造化に任じたまひ、神皇產靈神を、神漏美之尊として、地系、水系、母系として、宇宙の造化に任じたまへり。しかして、三神即一体の活動をなしたまふ。これを瑞の身魂、三ツの身魂と称ふ。

天之御中主大神の御精靈体の完備せるを、天照皇大神、または撞賢

木嚴能御魂天盛留向津媛之神言と称し奉る。これ撞の大神なり。ツキとは無限絶対、無始無終、過去、現在、未来一貫至大無外、至小無内の意なり。高皇產靈之神言は、靈系を主宰したまひ、その精靈体は、神伊邪那岐之神言と顯現したまひ、神皇產靈之神言は、体系を主宰したまひ、その精靈体は、神伊邪那美之神言と顯現したまふ。三神即一神にして、瑞の身魂、三ツの身魂の表現なり。この世の御先祖にして、撞の大神にましますなり。開祖の神論には、天の御三体の大神と称へあり、またミロクの大神、ツキの大神とも称へまつり、また天の御先祖様と称へまつりあり。

撞の大神様、すなわち天の御先祖の大神は、天地未分、陰陽未割の太初にあたりて、大地球の先祖として、国常立之尊を任じたまひ、大地の修理固成を、言よさし玉ひしかば、国常立之尊は地上の主権をおび、久良芸如す漂へる国土を修理し玉ふや、大神の施設、あまりに嚴格剛直にして、混沌時代の主管者としては、じつに不適任たるをまねがれず、部下の万神は大いに困難を感じ、衆議の結果、撞の大神に、国祖の退隠されんことを奏請するの、止むを得ざるに至れり。撞の大神は、ここに万神の奏請を嘉納せられたれども、一たん国土の主宰に任じたるうへは、神勅の重、かつ大なるを省み玉ひて、容易に許さず給はず、一方国祖にむかつて少しく軟化するべく、種々慰撫説得なし給ひしかども、国祖の至公至平至直至嚴の靈性は、容易に動かすべくもあらず、ここに撞の大神は、国祖の妻神たる、豊雲辭之神言にむかつて、国祖に諫奏すべく、嚴命をくだし給ひぬ。妻神はすなはち坤の金神なり。坤の金神は神勅を奉戴し、夫神に百万諫奏し給ひしが、元來剛直一方の国祖は、和光同塵の神政を好み給はざりけり。

ここに撞の大神は、一方万神の奏請しきりにして、制御すべき方策に尽き玉ひしかば、断然意を決して国祖を良へ退去すべく嚴命し給ひ、かつ詔り給はく、なんぢ今我言を奉じて潔よく退辞せば、我また時を待つてなんちを元の主宰に任じ、かつ我は地にくだりて、汝が大業を補助すべしと、神勅おごそかに降下あらせられたれば、国祖も無念をしのび、数万歳の久しき歳月を隠忍し、世の成り行きを坐視し給ひたり。八百万の神の決議により、神政妨害者として、永久に良に押こめらるる身とは成り給ひぬ。ここに良の金神の名称始まりぬ。良の金神は、その罪科の妻神に波及せむことを憂慮したまひて、夫妻の縁を断ち、ひとり良に隠退し給ひしが、妻神豊雲野の尊は夫神の困苦を坐視するにしのびずとて、坤にみづから退去されたり。これより坤の金神の名始まりぬ。夫神の苦難を思ひて罪なき御身、かつ離縁されし御身ながらも、みづから夫神に殉じて、世に落ち玉ひし御心情は、じつに夫婦苦楽を共になすべき末代の亀鑑なり。

しかるに、天地の修理固成には、ぜひと靈と体との二元無かるべからず。しかして靈の性は至善なり。体すなはち物質元素の性は悪なり。善惡混合し、美醜互に交りてここに力を生ず。力すなわち活用なり。すべてのもの靈主体従にして、初めて、善なる世界を造り得べし。善は一毫の濁点を許さず。世の移り行くにしたがひ、つひには体主靈従の混乱不義きはまる現社会を産出す。体主靈従これ至惡なり。至惡神の経綸の結果は、つひに惡逆無道の世界を招来し、優勝劣敗、弱肉強食の惨状を来たすに至るは当然なり。ここにおいてか、剛直嚴正なる国祖の出現を要するの機運到来し、撞の大神は、良に退隱したまへる国祖を許し、ふたたび地上の主權を附与し給ひしかば、因縁の

身魂、出口開祖を機関として、地球の中心なる綾部の高天原に現はれ玉ひ、最初国祖へ下し玉ひたる神勅を実行すべく、撞の大神は地上に降臨せられ、靈力体すなはち御三体の大神と現はれて、現代の混乱世界を修理固成せんと、国祖国常立之尊の補佐神と成り玉ひ、教主（編者注―當時は出口聖師）の肉体を借りて現は、国祖の大業に臣事し給ふに至れり。

元來撞の大神は、造化の大元靈にして天に属し、君系にましますなり。国常立之尊は地に属して、臣系にましますも、撞の大神は世界のために位地を捨て、その体を素盞鳴尊の生みませる三女神に变现し、二度目の天の岩戸を開きたまふことになりぬ。

されど国常立之尊も、謙讓の御神慮深くましますば、あくまで天の御先祖様、御三体様、撞の大神様と仰ぎ敬ひ、その御神命にしたがひて、今回の世の立替を遂行せむと為し給へり。明治廿五年の開祖の神論に曰く『天の大神様、地に降りてこの世の御守護あそばすぞよ。地の神、天に上りてこの世の守護を致すぞよ云々』神論の御文中に、撞の大神様ほど、御心の良い神様はないぞよ云々とあるは、この間の消息をもらし玉ひしなり。もちつ、もたれつの世である云々とあるものことなり。

国常立之尊は太古における天照大神の位地に進まれ、撞の大神は太古における須佐之男尊に降り玉ひて、天上天下修斎の大業を成就し給ふ時機とは成れるなり。

されど神政成就の暁は、また元のごとく撞の大神は天に復り玉ひ、国祖は地にくだりて、臣系の職につかせ給ふべきことは、大本開祖の神論に、明示さるるところなり。

神政成就のあかつきは、靈系として現はれ給ひし、国祖殿の御魂は、元の体系と復り玉ひ、体系として現はれ給へる、瑞の御魂は、元の靈系に復り玉ひ、天地合一、上下一致の松の代を實現し、永遠無窮に、天地万有を主宰し給ふ神界の御經綸なり。ア、宏遠なるかな、深甚なるかな、天地祖神の御經綸よ。

○ 「神靈界」大正7年2月号「太古の神の因縁」

天のミロク

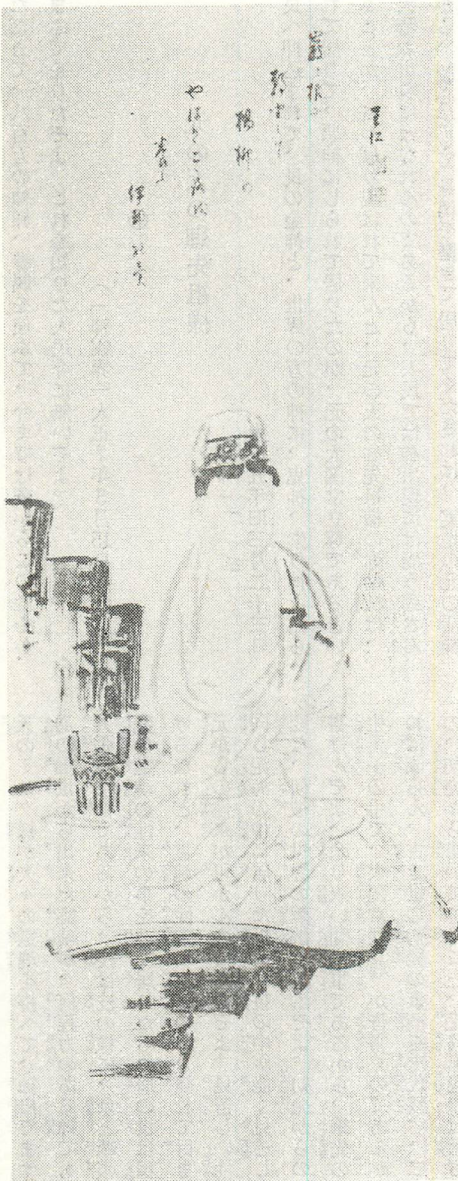
天の天御中主大神様は天のこの世の御先祖様であるぞよ。地の先祖は国常立尊であるぞよ。至仁至愛神は天照皇太神宮とお成りあそばし

て、三千世界の御守護あそばすぞよ。靈能大神様、体系の大神様お揃あそばして、世界の御守護なさるぞよ。

○ 「神靈界」大正7年5月15日号4頁

天の御三体の大神

日の大神様、月の大神様、天照皇大神宮様は天の御三体の大神様と申すぞよ。至仁至愛神様とも陀流面様とも申すぞよ。この神様が天の眞の御先祖様であるぞよ。地の先祖は国常立尊であるぞよ。月日様の御命令をいただきて三千世界をかまふ時節がまいりたから、この地の神界はみな国常立尊の守護と変わりましたぞよ。天の御先祖様の御命令をい



楊柳の伊都能売

巖ヶ根に静坐し乍楊柳のやはきこころを養ふ伊都能売 王仁

— 出口聖師筆／聖者の面影の内から —

ただきて、八百万の神様、眷属を使ふて、今までは蔭からこの世をかまふてをりたぞよ。これを知りた人民今に無いぞよ。

（「神霊界」大正7年5月15日号5頁）

元の天の御先祖様

大正五年旧三月二十三日

良へ押込まれて、良の金神と、世界の万の神に、鬼神、崇り神と為られて居りて、悪神にいられて居りたのが、元の大國常立尊であるといふことが、さっぱり現はれて来んと、元の天の御先祖様の弥勒様は、天晴お出現にはなれんのであるから、人民では御出現には能う致さんから、改心をして身魂を磨きて居りてくだされば、実地の元の活神が、実地の元の一輪の生粋の靈魂を御苦労に成りて、実地を致すからさう成らんと弥勒様のお出現には成らんけれど、時節が参りたぞよ。

（「大本神論」火の巻二五〇頁）

靈能大神、天照大神、月読神

大正五年旧五月十四日

昔の根本の初りのミロク様が、此の世の御先祖様であるぞよ。斯の世が一平に泥海の折からの事を、直々の御血筋の、変性男子に書せるぞよ。斯の世の御先祖様が、地の泥海の中に御出来なされたなり、靈能大神どのも同じ泥海の中で、御出来為されたのであるぞよ。口や書では早いけれど、中々の永い間の事であるぞよ。

天のミロク様が夫々の靈魂を拵へて、御出でますのであるから、普通の御世から出来た靈魂が、何程力のある神でも、後世で出来た神は矢張り枝神であるから、枝は枝の様に、余と覇張らんやうに致して、我の靈魂の性来の事を為て居りたら、斯の世は穩かに世が治まりて行けるなれど、靈魂の性来の悪いのが、経れて行きよると、悪い謀反が元からの性来が可かのであるぞよ。見苦しい性来の慾の深い身魂も同じ泥海の中に居りた折に、腹の中が能く見透してありての、今の大変な、何彼の世界の難渋であるぞよ。初発からの事が一度に続いては書けんぞよ、余り永い間の事であるから、筆先のチツト暇な折に、変生男子の手で、大國常立尊が皆書くのであるから、合間に書ておかねば成らん、古き世の初発の事柄を末代残す、二度目の世の立変の折の、初発から書いてあること、毛筋も違ひは致さんぞよ。大出口直には明治二十五年からのやうに思ふて居るなれど、直の靈魂は此方の靈魂が這入りて居りて、半分の靈魂が天照大神のお妹御にしてありて、死変り生き代り苦勞艱難悔し残念を、今に致して居る身魂であるぞよ直に二十五年から此方が守護致したやうに、皆のものが思ふて居るなれど、産ぶから守護して居りたのじやぞよ。昔からの靈魂の因縁、性来の判る時節が参りて来て、昔から解らなんだ事が、世の元の事から往く末の事の、明白に解る時節が参りて来て、昔から無い事を、綾部の大本から知らせるぞよ。天照大神月読神の御出ましに御成なさるに就いて、大國常立尊が現はれるなり……。

（「大本神論」火の巻二五一〜二五四頁）

天照皇大神はみろく様

大正五年旧七月二十三日

天照皇神様の御出ましに成るに就いては、世の立替を致さんと、今度の二度目の天岩戸開は、末代に一度より無いと言ふやうな大望な事であるから、何時の筆先にも三四月、八九月と申して知らしてあらうがな。何事も世界にある事を先きに知らせる、出口直の御役であるから、知らしてある事は皆世界中の事であるから、世界の傍から始めると申して……。

時代時節で、ここまでは世に落ちて居りたなれど、世の本の押筆られて居りた、昔から肉体の其俣の生神の、神力の出る世が参りたから天照皇大神さまの御出ましに成るに就いて、変生男子と変生女子との身魂が一つ心になりて、富士神山で和合させるから、出口直に、人の能う行かん処へ往て呉れんならんと申してありたが、今度揃うて行て下さりたらば、ミロク様の御歡喜であるぞよ。今度帰りにからミセン山で和合させるぞよ。

○ 「大本神論」火の巻二六四・二六六頁

至仁至愛神様はみろく様

大正六年旧五月六日

大國常立尊変生男子の靈魂も、変生女子の靈魂も、永らく苦勞いたして居りた一輪の身魂も、世に落とされて居りた靈魂の肉体は、至仁至愛神様の御出現がある時節が参りて来たから、悔し残念を堪りて来

た身魂は、皆揃うて世に出て、世の元の初まりの結構な御用が出来るから、良き御用の出来る身魂を見て、我の精神と行状とを考へて見て神の心に叶ふやうに成りて居らんと、綾部の大本の世界の元の御用は出来んぞよ。

○ 「大本神論」火の巻二八七頁

神素盞鳴命・月読尊もミロク

「天下万民のために千座の置戸を負ふて、世界に一たん流浪された神素盞鳴命もミロクの御靈性であつて、いはゆる月読尊である。これは地のミロクであつて、天照皇大神様は天のミロク様で、撞賢木厳之御魂天疎向津媛尊と日ふ別称の大神である。この御神命を教祖の神論には総合的に頭の字一字を取って撞の大神と仰せられたのであつて、決して月界守護の月の大神様のことではありませぬ。

○ 「神靈界」大正9年1月15日号随筆24頁

至仁至愛の大神の神格の一部は神素盞鳴大神

今を去ること三十五万の昔、波斯の國ウブスナ山脈の頂上に、地上の天国を建設し、神素盞鳴大神はここに神臨したまひて、三五教を開かせたまひ、数多の宣伝使を養成して、地上の国土に群棲する数多の人間に、愛善の徳と信眞の光を与へ、地上に天国を建設したまはむとし、八岐大蛇や醜狐、邪鬼の身魂を清め、天地の間には一点の虚偽もなく、罪惡もなきミロクの世を開かむと、尊き御身を地上に降し、肉

体的活動をつづけたまひしこそ、実に尊さのかぎりである。

(中略)

至仁至愛の大神は、その神格の一部を地上に降し、神素盞鳴尊と現はれて、中有界や地獄界に迷へる精霊および人間を救ふべく、ここに地上の靈国、天国を築かせたまつたのである。これに加ふるに、コーカス山をはじめ土^{トルコ}耳^{エル}古^コのエルサレム、および自^オ軒^の倒^{ころも}島の綾の聖地や天教山やそのほか各地の靈山に靈国を開き、宣伝使を降してこれが任に当らしめたまうた。

(「靈界物語」第49巻第3章33・34頁)

○ 月の大神

大正六年旧三月十二日

ミロク様が天の御先祖であるぞよ。斯世を始め為された御先祖であるぞよ。月の大神様の昔から仕組なされた事は、何彼の時節が参りて来たから、天地の岩戸を開けて見せねば、何時まで言ひ聞かして居りても、人民に解らんから、モウ実地を始めると、如何な私の強い守護神でも、改心せずには居れん事になるぞよ。吾妻の国は一と晴れの実りの致さぬ薄^{すくも}野尾。実り致さぬ国は榮えぬぞよ。大分思の違う守護神が出来てくるぞよ。今迄の心を持ちて居りたら、如何変る判らんから、此世の大将の守護神に日々、手と口とで永らくの間氣が付けてありたぞよ。

(「大本神諭」火の巻二〇〇頁)

ミロク神の神格と救世の神業

ミロクの神とは宇宙の造物主なる大國常立大神（天之御中主大神）のことで、大宇宙を創造経営しつつ天地万有一切の総統権を具足して神臨される、根本の神さまである。この神の御徳と御神格は瑞靈・神素靈鳴大神かむすののおほなみと現われ、天界と宇宙を構成して、宇宙（靈力体三方面、神幽現三界）一切の事物を済度するために天地間を昇降あそびして、御魂をわけて、種々雑多に神身を変じたまいて天地間の神と人の救済に尽させ玉う仁慈無限の大神である。
かむすののおほなみ
 神素靈鳴大神（豊国主尊）の瑞の御魂は、現界、幽界、神界



歴史人物八那岐那美二尊／絹著本色（縦四尺六寸五分×横一尺三寸五分）

出口聖師揮毫

の三方面に出没して、靈力体の三大元に関して守護され、一切万有に永遠の生命を与え、歓喜と悦楽を下したまう神様である。高天原にては月と現われたまうので、ミロクの大神を月の大神と申し上げるのである。

この神の神業は仁愛と信真によって、宇宙の改造に直接当たらせたまうのである。

ミロクの神は神名の異なる度に千変万化して活動される、言霊の神である。

ミロクの神（瑞靈大神）は御神格によって天界も宇宙一切も人の靈魂、肉体も成就している神である。宇宙一切の救いと清めの神業は、この神によって完成されるものである。

（ミロクの神の靈魂は伊都能壳魂であつて完全無欠のものである。）

ことに神素盞鳴大神は永遠に千座の置戸を負うて、天上天下の神と人の救済にあたられる至仁至愛の大神である。

大本の教では、この至仁至愛のミロクの大神は、播州の高砂神の神島（牛島・ほうろく島）に、神界の三千年の間、神鎮まりまして、地球の守護にあたらせられている。

神島大神神歌

三千年の潮浴みながら只一人世を牛島にひそみて守りぬ

世を思ふ心の船は梓弓播磨の海に浮きつ沈みつ

大本開祖が大正五年旧九月九日神島に渡島されて、祭典のちに、出口聖師を指さして「あの方がミロクさまである」とのべられたことは、大本歴史の上から、あまりにも有名な事蹟である。

○

ミロクの大神

大宇宙の元始にあたつて、湯気とも煙とも何とも形容のし難い一種異様の微妙のものが漂ひるなり。この物はほとんど十億年間の歲月を経て、一種無形、無声、無色の靈物となりたり。之を宇宙の大元靈といふ。我が神典にては、天御中主神あめのみなかつかみと称へ又は天之峰火夫神あめのみねのひのおとこと称し仏典にては阿弥陀如来と称し、キリスト教にては、ゴッドまたはゼウ

スといひ、易学にては太極といひ、支那にては天主、天帝、または單に天の語をもつて示されるなり。国によりては造物主、または世界の創造者ともいふあり。この天御中主神の靈徳は、漸次宇宙に瀾漫し氾濫はんらん化醇くわじゅんして遂に靈、力、体を完成し、無始無終無限絶対の宇宙の森羅万象を完成したる神を称して大国治立尊おほくにちたてのみこと（二名天常立命）といひ、ミロクの大神ともいふなり。

（「靈界物語」第6卷第1章11頁）

○

救世神仁愛大神

最上天界すなはち高天原には、宇宙の造物主なる大国常立大神が、天地万有一切の總統權を具足して神臨したまふのであります。そして大国常立大神の一の御名を、天之御中主大神あめののみなかつかみと称へ奉り、無限絶対の神格を持し、靈力体の大原靈と現はれたまふのであります。この大神の御神徳の、完全に發揮されたのを天照皇大御神あまてらすみかみと称へ奉るのであります。

そして靈の元祖たる高皇產靈大神たかみけのうみひのおほみかみは、一名神伊邪那岐大神かみいざな、またの名は、日の大神と称へ奉り、体の元祖神皇產靈大神かみみけのうみひのおほみかみは、一名神伊邪那美大神かみいざなみ、またの名は、月の大神と称へ奉るのは、この物語にてしばしば述べられてある通りであります。また高皇產靈大神は靈系にして敵の御靈国常立大神と現はれたまひ体系の祖神なる神皇產靈大神は、瑞の御魂豊雲野大神、またの名は、豊国主大神と現はれたまうたのであります。この敵の御魂は、ふたたび天照大神と顯現したまひて、天界の主宰神とならせたまひました。ちなみに、天照皇大御神様と天照

大神様とは、その位置において、神格において、所主の御神業において、大変な差等のあることを考へねばなりません。また瑞の御魂は、神素盞鳴大神と頭はれたまひ、大海原の国を統御遊ばず、神代からの御神誓であることは、神典古事記、日本書紀等に由つて明白なる事実であります。

しかるに神界にては、一切を挙げて一神の御管掌に帰したまひ、宇宙の祖神大六合常立大神に絶対的神権を御集めになつたのであります。ゆゑに、大六合常立大神は、独一真神にして宇宙一切を主管したまひ、厳の御魂の大神と顕現したまひました。さて、厳の御魂に属する一切の物は、悉皆、瑞の御魂に属せしめ給うたのでありますから、瑞の御魂は、すなはち厳の御魂同体神といふことになるのであります。

ゆゑに、厳の御魂を太元神と称へ奉り、瑞の御魂を救世神または救ひの神と称へ、または主の神と単称するのであります。

ゆゑにこの物語において、主の神とあるのは、神素盞鳴大神様のことであります。主の神は、宇宙一切の事物を濟度すべく、天地間を昇降遊ばして、その御魂を分け、あるひは釈迦と現はれ、あるひは基督となり、マホメットと化り、そのた種々雑多に神身を変じたまひて、天地神人の救済に尽されたまふ仁慈無限の大神であります。しかして前に述べた通り、宇宙一切の大権は、厳の御魂の大神すなはち太元神に属し、この太元神に属せる一切は、瑞の御魂に悉皆属されたる以上は、神を三分して考へることは出来ませぬ。つまり、心に三を念じて口に一をいふことはならないのであります。ゆゑに、神素盞鳴大神は



大威徳明王

大威徳明王となりて金玉のつばさに
乗りて三世を照らさむ 王仁

—— 出口聖師筆／聖者の面影の内から ——

救世神ともいひ、仁愛^{みろくのおほな}大神とも申し上げ、撞の大神とも申し上げるの
であります。

(中略)

太元神を主神といつたり、救世神瑞の御魂の大神を主神といつたり
^{おほもろがら}
してあるのは、前に述べた通り、太元神の一切の所屬と神格そのもの
は一体なるがゆゑであります。

○ 「靈界物語」47卷／＼総説／＼

瑞靈大神は一切の神權で宇宙に神臨

大本開祖の聖言には、愛の善と信の真とを骨子として説かれてある
ことは、神諭を拝読した人のよく知るところなれば、いまさら口述者
が改めて述ぶるまでもないから、その聖言は略することとする。

善とは、すなはち此世の造り主なる大神の御神格より流入し來たる
神善である。この神善は、すなはち愛そのものである。真とは、同じ
く大神の御神格より流入し來たるころの神真である。この神真は、
すなはち信である。さうしてその愛にも善があり悪がある。愛の善と
は、すなはち靈主体従、神より出でたる愛であり、愛惡とは、体主靈
従といつて、自然界における自愛または世間愛をいふのである。いま
口述者が述ぶる世間愛とは、決して世の中の、いはゆる博愛や慈善的
救済をいふのではない。おのが種族を愛し、あるひは郷里を愛し、国
土を愛するために他を虐げ、あるひは亡ぼして、自己団体の安全を守
る、偏狹的愛を指したのである。それからまた信仰には、真と偽とが
ある。眞の信仰とは、心の底から神を理解し、神を愛し、神を信じ、

かつ死後の生涯を固く信じて、神の御子たる本分を尽し、何事も神第
一とするころの信仰である。また偽りの信仰とは、いはゆる偽善者
どものその善行を飾る武器として、内心に惡を包蔵しながら、表面宗
教を信じ神を礼拝し、あるひは宮寺などに寄附金をなし、その金額を
石または立札に記さしめて、自分の器量を誇るところの信仰である。
あるひは商業上の便利のために、あるひはわが処世上の都合のために
表面信仰を装ふ横着者の所爲を称して、偽りの信仰といふのである。
要するに、神仏を松魚節として、自愛の道を遂行せむとする惡魔の所
爲をいふのである。かくのごとき信仰は、神に罪を重ね、自ら地獄の
門扉を開く醜行である。眞の神は、愛善と信真の中にこそましませ、
自愛や偽信の中にましますはずはない、かかる自愛や偽信の中に潜入
する神は、いはゆる八岐大蛇、惡狐、惡鬼、餓鬼、畜生の部類であ
る。高天原の天国および靈国にあつては、人の言葉みなその心より出
づるものであるから、その言ふところは思ふところであり、思ふところ
は、すなはち言ふところである。心の中に三を念じて、口の一つを
いふことは出来ない。これが高天原の規則である、いま天国といつた
のは、日の國のことであり、靈国といつたのは、月の國のことであ
る。

眞の神は、月の國においては、瑞の御靈の大神と現はれ給ひ、日の
國においては、嚴の御靈の大神と現はれ給ふ。さうして、嚴の御靈の
大神のみを認めて、瑞の御靈の大神を否むがごとき信条の上に、安心
立命を得むとするものは、残らず高天原の圏外に放り出されるもので
ある。かくのごとき人間は、高天原より嘗て何等の内流なきゆゑに、
次第に思索力を失ひ、何事につけても、正当なる思念を有し得ざるに

立ちいたり、つひには精神衰弱して唾のごとくなり、あるひはその言ふところは、痴呆のごとくになつて歩々進まず、その手は垂れてしきりに慄ひ戦き、四肢関節は全く力を失ひ、餓鬼、幽霊のごとくなつてしまふものである。また瑞の御霊の神格を無視し、その人格のみを認むるものも同様である。天地の統御神たる、日の国にまします嚴の御霊に属する一切の事物は、のこらず瑞の御霊の大神の支配權に属してゐるのである。ゆゑに瑞の御霊の大神は、大國常立大神を初め、日の大神、月の大神そのほか一切の神權を一身にあつめて、宇宙に神臨したまふのである。この大神は、天上を統御したまふと共に、中有界、現界、地獄をも統御したまふは、当然の理であることを思はねばならぬ。さうして嚴の御霊の大神は、万物の父であり、瑞の御霊の大神は万物の母である。すべて高天原は、この神々の神格によつて形成せられてゐるものである。ゆゑに瑞の御霊の聖言にも「我を信するものは無窮の生命を得、信ぜざるものはその生命を見ず」と示されてゐる。また「我は復活なり、生命なり、愛なり、信なり、道なり」と示されてゐる。しかるに不信仰の輩は、高天原における幸福とは、ただ自己の幸福と威力にありとのみ思ふものである。瑞の御霊の大神は、總ての神々の御神格を、一身に集注したまふがゆゑに、その神より起こり來たるところの御神格によつて、高天原の全体は成就し、また個々の分体が成就してゐるのである。人間の靈体、肉体も、この神の神格によつて成就してゐるのは無論のことである。さうして瑞の御霊の大神より起こり來たるところの神格とは、すなはち愛の善と信の真とである。高天原に住める天人は、總てこの神の善と真とを完全に摂受して生命を永遠に保存してゐるのである。さうして高天原は、この神々に

よつて完全に円満に構成せらるるのである。

現界の人間自身の志すところ、為すところの善なるもの、また思ふところ、信ずるところの真なるものは、神の御目より御覽したまふ時は、その善も決して善でなく、その真も決して真でない、瑞の御霊の大神の御神格によりてのみ、善たり真たるを得るものである。人間自身より生ずる善、または真は、御神格より來たるところの活力を欠いてゐるからである。御神格の内流を見得し、感得し、摂受して、ここに立派なる高天原の天人となることを得るのである。さうして人間には、一靈四魂といふものがある。一靈とは、すなはち真靈であり、神直日、大直日と稱するのである。さうして、神直日とは神さま特有の直靈であり、大直日とは、人間が神格の流入を摂受したる直靈をいふのである。さうして、四魂とは和魂にぎみたま、幸魂さいみたま、奇魂きみたま、荒魂あらみたまをいふのである。この四魂は、人間はいふに及ばず、高天原にも現実の地球の上にも、それぞれの守護神として儼存しあるのである。そして、荒魂は勇を司り、和魂は親を司り、奇魂は智を司り、幸魂は愛を司る。さうして、信の真は四魂の本体となり、愛の善は四魂の用となつてゐる。さうして、直靈は瑞の御霊の大神の御神格の御内流、すなはち直流入された神力である。ゆゑに、瑞の御霊の御神格は、總ての生命の原頭とならせたまふものである。この大神より人間に起來るものは、神善と神真である。故にわれわれ人間の運命は、この神より來たる神善と神真を、いかに摂受するかによつて定まるものである。そこで信仰と生命とにあつてこれを受くるものは、その中に高天原を顕現し、またこれを否むものは、やむを得ずして地獄界を現出するのである。神善を惡となし、神真を偽りとなし、生を死となすものは、また地獄を現

出しなくては已まない。現代の学者は、いづれも自然界の法則や統計的の頭脳をもつて、不可測、不可説なる靈界の事象を、おぼけなくも測量せむとなし、瑞の御靈の神示を否むものは、暗愚迷妄の徒にしていはいゆる盲目学者といふべき厄介ものである。たうてい靈界の事は、現実界の規則をもつて窺知し得べからざることを悟らないためである。神はかくのごとき人間を見て、癡狂者となし、あるひは痴呆となして、救済の道なきを悲しみ給ふものである。かかる人間は、總てその精靈を地獄の団体に所屬せしめてゐるのである。かかる盲学者は、神の内流を受けて伝達したる靈界物語のある個所を摘発して、わが知識の足らざるを顧みず、種々難多と批評を加へ、甚だしきは、不徹底なる自己の考察力をもつて、これを葬り去らむとする罪悪者である。高天原の団体にその籍を置き、現代において既に天人の列に列したる人間の精靈は、吾人の生命および一切の生命は、瑞の御靈の御神格より起来せる道理を証實し、世にある一切のものは、善と真とに關する事を知覺してゐるものである、かかる人格者の精靈を稱して、地上の天人といふのである。

人間の意思の生涯は、愛の生涯であつて、善と相關し、智性的生涯は、信仰の生涯にして、真と相關するものである、さうして一切の善と真とは、みな高天原より來たるものであり、生命一切の事また高天原より來たることを悟り得るのが天人である。ゆゑに靈界の天人も、地上の天人も、右の道理を堅く信するがゆゑに、その善行に對して、他人の感謝を受けることを悦ばないものである。もし人あつて、これらの諸善行を、彼の天人らの所有に帰せむとする時は、天人は大いに怒つて引退するものである。人の知識や人の善行はみなその人自らし

てしかるものと信ずるときは、惡靈の考へにして、たうてい天人どもの解し得ざるところである。故に自己のためになすところの善は決して善ではない、何となれば、それは自己の所為なるが故である。されど自己のためにせず、善のためになせる善は、いはゆる神格の内流より來たるところの善である。高天原はかくのごとき善、すなはち神格によつて成立してゐるものである。

人間在世の時に於いて、自らなせる善、自ら信ずる真をもつて、実に自らの胸中より來たるものとなし、または当然自分の所屬と信じてゐるものは、どうしても高天原に上ることは出来ない。彼の善行の功德を求めたり、また自ら義とするものは、かくのごとき信仰を有してゐるものである。高天原および地上の天人は、かくのごときものをもつて痴呆となし、俗人となして、大いに忌避的態度をとるものである。かくのごとき人間は、不斷に自分にのみ求めて、大神の神格を觀ないがゆゑに、真理に暗き痴呆者といふのである。また彼らは、元より大神の所屬となすべきものを、おのれに奪はむとするがゆゑに、神より天の賊と稱へらるるのである。いはゆる人間は、大神の御神格を天人が摂受するとの信仰に、逆らうてゐるものである。瑞の御靈の大神は、高天原の天人と共に自家存在の中に住みたまふ、ゆゑに、大神は高天原における一切中の一切であることはいふまでもないことである。

弥勒は宇宙改造の神業

高天原の総統神すなはち大主宰神は、大國常立尊である。またの御名は、天之御中主大神と称へ奉り、その靈徳の完全に發揮したまふ御状態を称して、天照皇大御神と称へ奉るのである。そしてこの大神様は、厳霊と申し奉る。厳といふ意義は、至厳 至貴 至尊にして過去、現在、未來に一貫し、無限絶對 無始無終に坐します神の意義である。さうして、愛と信との源泉と現れます至聖至高の御神格である。

さうしてある時には、瑞靈と現はれ、現界、幽界、神界の三方面に出没して、一切方角に永遠の生命を与へ、歡喜悅樂を下したまふ神様である。瑞といふ意義は、水々しといふことであつて、至善 至美 至愛 至真に坐し、かつ円満具足の大光明といふことになる。また

靈力体の三大元に關連して守護したまふゆゑに、三の御魂と稱へ奉りあるひは現界、幽界（地獄界）、神界の三界を守りたまふがゆゑに、三の御魂とも稱へ奉るのである。要するに、神は宇宙にただ一柱坐しますのみなれども、その御神格の情動によつて、万神と化現したまふものである。さうして 厳霊は、經の御靈と申し上げ、神格の本体と

ならせたまひ、瑞靈は、実地の活動力に在しまして御神格の目的すなはち用を為したまふべく現はれたまうたのである。ゆゑに言靈學上、これを豊國主尊と申し奉り、また神素靈鳴尊とも稱へ奉るのである。

さうして厳霊は、高天原の太陽と現はれたまひ、瑞靈は、高天原の月と現はれたまふ。ゆゑにミロクの大神を月の大神と申し上げるのである。ミロクといふ意味は、至仁至愛の意である。さうして、その仁愛と信真によつて、宇宙の改造に直接當らせたまふゆゑに、弥勒と漢字

に書いて、「^{いよいよあらた}弥々革むる力」とあるのをみて、この神の御神業の、如何なるかを知ることを得らるのである。

（中略）

ここにおいて、神は時機を考へ、弥勒を世に降し、全天界の一切をその腹中に胎藏せしめ、これを地上の万民に諭し、天国の福音を、完全に詳細に示させたまふ仁慈の御代が到来したのである。

されど大神は、予言者の想念中に入りたまひ、その記憶を基礎として伝へたまふがゆゑに、日本人の肉体に降りたまふ時は、すなはち日本の言葉をもつて現はしたまふものである。科学的頭腦に魅せられたる現代の学者または小賢しき人間は「神は全智全能なるべきものだ。しかるに何ゆゑに各国の民に分りやすく、地上到るところの言語を用ひて示したまはざるや」といつて批判を試み、神の遣はしたる予言者の言をもつて、怪乱狂妄と罵り、あるひは無学者の言とか、あるひは不徹底の言説とかなんとかケチをつけたがる盲が多いのは、神も予言者も大いに迷惑を感じるところである。

（「靈界物語」第48巻第12章182〜186頁）

五六七の神

○

愛と善との徳に充ち

真の神は罪惡と

仁慈と光榮の御面を

地獄に墜落させたまひ

これをは罰し害なふと

信と真とに住みたまふ

虚偽に充ちたる人々に

背けてこれを排斥し

邪惡に対して怒りまし

各宗各派の教役者が

伝へ来たりしものぞかし

大御心を誤解せし

神は如何なる罪人にも

怒りて精霊を地獄界へ

そのゆる如何と尋ねれば

珍の身体なればなり

決して加ふるものならず

排斥すべき理由なし

背き斥け怒りまさば

その本性に戻りまし

それゆゑ神はどこまでも

善と仁慈と愛により

五六七の神は人のため

仁慈を施し玉ふのみ

御霊幸はへましますよ。

○
〔「靈界物語」第56巻第1章13〜15頁〕

神島とミロクの大神

大正七年旧十月二十九日

良の金神国常立尊が、天の御三体の大神様の御命令を戴きて、三千世界を立直し致すに就ては、ミロクの大神様の御加護を戴かねば物事成就いたさんから、因縁のある身魂変性女子を表はして、大正五年辰の年旧三月三日に、大和国叡火の山を踏繙して、世界立直の守護が致してあるぞよ。

○
〔中略〕

大正五年の旧五月五日には、変性女子の身魂に、昔から永らく世に隠れて守護を致して居りた、坤の金神の住居を致した、播州の神島が開かしてあるが、人民からは左程にも無い御用の如うにあれども、神界では大変な神業でありたぞよ。朝日の直刺す、夕日の日照す、高砂沖の一島一つ松、松の根本に三千世界の宝いけおくと、昔から言伝へさして有りたが、今度は瑞の御魂の肉体を使ふて、三千世界の宝を掘り上げさしたぞよ。その宝と申すのは、この世を水晶の松の代、神世として治め遊ばすミロクの大神様の事でありたぞよ。

○
〔「大本神諭」火の巻四五〇〜四五二頁〕

千座の置戸の神業

ひき
「於是、八百万の神共に議りて、速須佐之男命に、千位の置戸を負はせ、亦、鬚を切り、手足の爪をも抜かしめて、神やらひにやらひき」

ここに天照大神と速須佐之男命の天の真奈井の誓約によりて、清淨無垢の素尊の御魂、三女神が現はれたまひしより、素尊部下の諸神らの不平勃発し、つひに天の岩戸の大事変を湧起せしめ、一時は天津神国も、葦原の中津国も常暗の世となり、次いで八百万の神たちが天の安河原に神つどひに集ひて、神議りに議りたまひ、結局、大海原の主神たりし速須佐之男命に千位の置戸を負はせ、また鬚を切り手足の爪をも抜かしめて、天下より神やらひに追ひたまふのやむを得ざるに立

ちいたつたのであります。

『千位の置戸を負はせて』といふ意義は、一天万乗の位で、群臣、百僚、百官の上に立つ高御座を負はせ、すなはち放棄させてといふことであります。父伊邪那岐大神より、大海原なる地球の統治權を附与されて、天下に君臨したまふべき素尊でありますけれども、高天原における天の岩戸の変の大責任を負ひて、衆議の結果千万の神の上に立つ千位の置戸を捨てたまふにいたつたのであります。すべて万神万有の一切の罪科を一身に負担して、みづから罪人となつて、天地の神明へ潔白なる心性を表示されたのであります。この温順善美なる命の御精霊を称して瑞の御魂といふのである。基督が十字架に釘づけられて万民の罪をあがなふといふのも、要するに、千位の置戸を負うたと同じ意味であります。世界一切の万類を救ふために身を犠牲に供することは、すなはち千位の置戸を負ふのである。現今のごとく罪穢に充ち、腐敗の極に達せる地上もまた、至仁至愛なる瑞の御魂の神の贖罪あるために、大難も小難となり、小難も消失するのである。

ア、一日も早く、片時も速やかに、天下国家のために犠牲となるべき、瑞の御魂の守護ある真人の各所に出現して、すでに倒壊せむとする世界の現状を救済せむことを希望してやまぬ次第である。

○
〔「靈界物語」第11巻第15章143～145頁〕

敵の御霊は瑞の御霊と顕現する

現幽神の三界を淨め、天地開闢の昔の祥代に立替へ立直し、神人万有を黄金世界の恩恵に浴せしめ、宇宙最初の大意志を実行せむと天よ

り降りて敵の御霊と現じ、大國常立尊と現われて神業を開始し給ひし宇宙唯一の生神、朝な夕なに諄々として神人万有を導きたまふ。愛善と信真の大神教を天下に布衍し、五六七神政出現の実行に着手せむとウブスナ山に聖蹟を垂れ、瑞の御霊と現じて三界の不浄を払拭し、清浄無垢の新天地を樹立せむと、神素盞鳴の大神は、世界各山各地の霊場に御霊を止め、数多の宣伝使を教養し、これを天下四方に派遣し給ひぬ。

○
〔「靈界物語」第67巻第1章11頁〕

五六七の身魂

つぎに伊都能売の身魂について略述すれば、この身魂は、一に月の靈魂ともいひ、五六七の身魂と称せらる。五六七の身魂は、敵の身魂に偏せず、瑞の身魂にも偏せず、敵、瑞の身魂を相調和したる完全無欠のものなり。

しかして伊都能売の身魂は、もつとも反省力の強い活動を備へて、太陽のごとく常に同じ円形を保つことなく、地球のごとく常に同形を保ちて同所に固着することなく、日夜天地の間を公行して、明となり暗となり、或ひは上弦の月となり、また下弦の月となり、半円となり満月となり、時々刻々に省みるの実証を示しあるなり。

かくのごとく吾人の身魂の活用し得るを、伊都能売の身魂といふ。伊都能売の身魂の活動は、時として瑞の身魂と同一視され、あるひは変性女子の身魂と誤解されることあり。伊都能売の身魂は、変性男子の身魂にもあらず、また変性女子の身魂にもあらず。完全無欠にして

明暗、遠近、大小、賢愚、肖不肖、善惡等の自由自在の活動をなし得る至粹至純の神靈の活用なり。

かくのごとく自由自在の神人たることを得ば、初めて、五六七の活動をなし得べきなり。月にもまた一霊四魂あり、その四魂の各々にもまた一霊四魂の備はれることは、太陽地球と同一なり。しかしてこの

月球を保持するは、前巻に述べたごとく、北斗星、北極星、オリオン星および三角星の四大星体なり。この四大星体は、月球の直接保護に任じ、瑞の身魂の活用を主としつつ、大空、大地の中間を調理按配する重要な職務を有するものなり。

〔「靈界物語」第6巻第26章153〜154頁〕

五六七の活動

（「靈界物語」第6巻第26章154頁）
「……我々の活動は、太陽地球と同一なり。しかしてこの月球を保持するは、前巻に述べたごとく、北斗星、北極星、オリオン星および三角星の四大星体なり。この四大星体は、月球の直接保護に任じ、瑞の身魂の活用を主としつつ、大空、大地の中間を調理按配する重要な職務を有するものなり。」
「……我々の活動は、太陽地球と同一なり。しかしてこの月球を保持するは、前巻に述べたごとく、北斗星、北極星、オリオン星および三角星の四大星体なり。この四大星体は、月球の直接保護に任じ、瑞の身魂の活用を主としつつ、大空、大地の中間を調理按配する重要な職務を有するものなり。」

「……我々の活動は、太陽地球と同一なり。しかしてこの月球を保持するは、前巻に述べたごとく、北斗星、北極星、オリオン星および三角星の四大星体なり。この四大星体は、月球の直接保護に任じ、瑞の身魂の活用を主としつつ、大空、大地の中間を調理按配する重要な職務を有するものなり。」
「……我々の活動は、太陽地球と同一なり。しかしてこの月球を保持するは、前巻に述べたごとく、北斗星、北極星、オリオン星および三角星の四大星体なり。この四大星体は、月球の直接保護に任じ、瑞の身魂の活用を主としつつ、大空、大地の中間を調理按配する重要な職務を有するものなり。」

「……我々の活動は、太陽地球と同一なり。しかしてこの月球を保持するは、前巻に述べたごとく、北斗星、北極星、オリオン星および三角星の四大星体なり。この四大星体は、月球の直接保護に任じ、瑞の身魂の活用を主としつつ、大空、大地の中間を調理按配する重要な職務を有するものなり。」
「……我々の活動は、太陽地球と同一なり。しかしてこの月球を保持するは、前巻に述べたごとく、北斗星、北極星、オリオン星および三角星の四大星体なり。この四大星体は、月球の直接保護に任じ、瑞の身魂の活用を主としつつ、大空、大地の中間を調理按配する重要な職務を有するものなり。」



曲津神猛り狂へる闇の世を鎮むる津留岐は素盞鳴の神・王仁自讃
素盞鳴の神／出口聖師筆

救世主は五六七神・神素盞鳴大神

霊界物語に示された三千世界すなわち大宇宙の神界幽界現界の救世主は、神素盞鳴大神で、五六七の神と申し上げる。人体をもつて地上にも生れて救済活動をされる仁慈無限の大神で、尊貴なき肉体をもつことが出来る幽の顕神である。

五六七の神は、霊界物語第四〇巻第六章仁愛の真相七三頁に「三千世界の救世主五六七神の真実は大慈大悲の大聖者」とあり、同第八章の九八頁に「神素盞鳴大神は仁慈無限の御聖徳五六

七の神と現れましぬ」と示されている。また第六三巻第四章山上訓六三頁には、「かく話すところへ天空に嘯唳たる音楽聞こえ、月を笠に被りながら一行が前に雲押し分けて悠々と下りたまうた大神人がある。(中略)この神人は月の御国の大神に在しまして産土山の神館に跡を垂れたまひし、三千世界の救世主、神素盞鳴の大神であった」と明示され、第四六巻第一八章二四五頁の天使の言葉に「世を救ひ、人を救ふは即ち救世主の神業である。(中

略)、一塊の土たりとも産出することの出来ない身をもつて、いかでか世人を救ふ力あらむ」と示されたように、真の救世主は、宇宙創造の神が顕現された、瑞霊・神素蓋鳴大神の他にはないのである。

そして第四六卷第一章想暖二二五頁には「お前さまは神素蓋鳴大神様の御仁慈を有難く思ひませぬか。救世主だといふことが理解されませぬか」と示されている。

仁愛の真相

照国別は岩彦、照公、梅公(中略)の間に答へて、厳かに至仁至愛の真相を歌ひ始めた。その歌、

『三千世界の救世主

大慈大悲の大聖者

心は卵の毛の露もなし

道風徳香万有に

智慧恬かに情恬か

意悪は滅し識亡じ

永く夢妄の思想念

○

身は有に非ず無にあらす

自他にもあらず方に非ず

出にも非ず没ならず

為作にあらず起に非ず

五六七神の真実は

垢なく染なく執着の

天人象馬の調御師ぞ

薫じ渡りて限もなし

慮凝いよいよ静かなり

心は清く明らかに

断じて水の如くなり

○

因にもあらず縁ならす

短長に非ず円ならす

生滅ならず造ならず

坐にしも非ず臥にあらす

行住にあらず動ならず

進にも非ず退ならず

非にしも非ず得失の

彼にしもあらず此にあらず

赤白ならず黄ならず

種々色にもまた非ず

具足し給ひし更生主

世界を照らす御真相

絶対無限の御神徳

○

戒定慧解の神力は

三昧六通は道品より

衆生は善業の因より出す

無限の暉を放散し

光明遠く明徹す

旋りて項に日光あり

項に肉髻湧出し

輝き上下にまじろぎつ

口頬端正唇舌は

四十の齒並は白くして

額は広く鼻脩く

万字を表はす師子の臆

千幅の相を具へまし

内外に握り臂脩く

閑静に非ず転に非ず

安危にあらず是にあらず

境地に迷ふ事もなし

去来にあらず青にあらず

紅色ならず紫にあらず

水晶御魂の精髓を

是ぞ弥勒の顕現し

仰ぐもたかき大神の

蒙る神世こそ楽しけれ。

知見の徳より生成し

慈悲十方無畏より起る

之を示して丈六紫金

方整に照らし輝きて

毫相月の形の如

旋髪色は紺青に

眼は淨く明鏡と

眉毛の色は紺に舒び

丹華の如く赤く好く

珂雪の如く潔らけし

面門開けてその胸は

手足は清く柔かく

腋と掌とに合纒ありて

肘も指も織く長し

皮膚細やかに軟かく
踝^{くるし}膝^{ひざ}露^はに現はれて
細^こけき筋^{すぢ}や銷^{しょう}の骨
表裏映徹いと淨く
染まることなく塵受けず
至嚴至聖の靈相なり
万有一切有相の
五六七は無相の相にして
衆生の身相その如く
心を投じ敬ひを
是ぞ即ち自高我慢
かくも尊き妙色の
一切衆生ことごとく
帰命し信仰したてまつり
歎喜し祝ひ舞ひ狂ひ
榮ゆる神世を仰ぐなる
仰ぐも畏き限りなり
仏の道の区別なく
世人を救ふ道なれば
弥勒^{みろく}の神の真実を
爰にあらあ述べておく
御靈幸はひましまして
古今を問はず東西を
研き究めて神 儒 仏

毛髪何れも右旋し
陰馬^{いんば}の如くに藏れたり
鹿^かの膊^{おほうろ}脹^はの如くなり
垢なく穢なく濁水に
三十三相八十種好
相や非相の色もなく
眼力対絶なしにけり
而して有相の身に坐まし
一切衆生の歎喜し礼し
表して事を成ぜしむ
祓除されたる結果にて
軀をこそ成就し給ひぬ
その神徳に敬服し
無事泰平の神政を
千代も八千代も万代も
原動力の太柱
三三教は神の道
ただただ真理を楯となし
神の教に表はれし
仏の唱ふる法により
ああ惟神惟神
三三教の御教は
區別せずして世の為に
その他の宗教の真諦を

覺りて世のため人のため 誠を尽せ三五の
教司はいふも更 信徒たちに至るまで
ああ惟神 惟神 御靈幸はへましましてよ
神素盞鳴大御神 叡の御前に願ぎ奉る
照公『宣伝使様、今の歌は五六七大神様の御真相ちやなくて、木の花
姫の神様のやうですなあ』
照国『木の花姫の神様も、やはり五六七大神様の一部または全部の御
活動を遊ばすのだよ。また天照大御神と顕現遊ばすこともあり、棚
機姫と現はれたり、あるひは木の花咲耶姫と現はれたり、観自在天
となつたり、観世音菩薩となつたり、あるひは蚊取別、蚊々虎、カ
ール、丹州などと現はれ給ふこともあり、素盞鳴尊となることもあり、
神様は申すに及ばず、人間にも獸にも、虫族にも、草木にも変
現して、万有を済度し給ふのが五六七大神様の御真相だ。要するに
五六七大神は大和魂の根源神ともいふべき神様だ』
『大和魂とはどんな精神をいふのですか、神心ですか、仏心ですか』
『神心よりも仏心よりも、もつともつと立派な凡ての真、善、美を
綜合統一した身魂をいふのだ。これを細説する時は際限がないが、
大和魂といふのは、仏の道でいふ菩提心といふことだ』
『神と仏との区別はどこでつきますか』
『神といふのは宇宙の本体、本霊、本力の合致した無限の勢力を總
称して真神といふのだ。仏といふのは正覺者といふ事で、要するに
大聖人、大偉人、大真人の別称である』
『大和魂について大略を聞かして下さい』
『大和魂は仏の道でいふ菩提心のことだ。この菩提心は三つの心が

集つて出来たものだ。その第一は神心、仏心または覺心といつて、善の方へ働く感情をいふのだ。要するに慈悲心とか、同情心とかいふものだ。第二は勝義心といつて即ち理性である。理性に消極、積極、各種の階級のあることはもとよりである。理性の階級については、たうてい一朝一夕にいひ尽されるべきものでないから略することとして、第三は三摩地心といふのだ。三摩地心とは即ち意志といふことになる。尚よき感情と、よき意志と、よき理性と、全然一致して不動金剛の大決心、大勇猛心を発したものが三摩地心であつて、以上三者を合一したものが、菩提心となり大和魂ともなるのだ。何ほど理性が勝れてゐても知識に達してゐても、知識では一切の衆生を濟度することは出来ない。智識あるもの、学力ある者のみ之を解するもので、一般的にその身魂を救ふことが出来ない。これに反して、正覺心いはゆる神心、仏心は感情であるから、大慈悲心も起り、同情心もよく働く。この慈悲心、同情心は、智者も學者も鳥獸に至るまで及ぼすことが出来る。これくらゐ偉大なものはない。ウラル教は理智を主とし、バラモン教は理性を主とする教だ。それだから如何しても一般人を救ふことは出来ないのだ。三五教は感情教であるから、一切万事無抵抗主義を採り、四海同胞、博愛慈悲の旗幟を押し立てて進むのであるから、草の片葉に至るまでその徳に懐かぬものはない。今日のごとく、武力と学力との盛んな世の中に、慈悲心のみをもつて道を拓いてゆかうとするのは、何だか薄弱な頼りないもののやうに思はるが、決してさうではない。最後の勝利は、よき感情すなはち大慈悲心、同情心が良をさすものだ。それだから青春山の岩窟に行つた時も、バラモン教の悪人どもを赦

したのだ。これから先へウラル教、バラモン教の連中と幾度衝突するか知れないが、決して手荒い事をしてはなりません。どちらの教派も左手に経文を持ち、右手に劍を持つて、武と教と相兼ねてゐるから、よほど胆力を握ゑてをらぬと、無事にこの目的は達成しないのだ」

岩彦「……（略）……バラモン宗といつたり、時によつてはバラモン教といつたり、あるひはバラモン藏とか、乗だとか部だとかいひますが、この区別はどう説いたら宜いのですか」

照国「教といふのも、宗といふのも、乗といふのも、藏といふのも、部といふのも、やはり教といふ意味だ。どういつても同じことだ」

「いや有難う。それで諒解しました。しかしながら仏教の教典を経文といひますが、その経文の経は教の教とは違ひますか」

「それは少しく意味が違ふ。経といふ字は、経糸といふ字だ。今までの教は、凡て経糸ばかりだ。緯糸がなければ完全な錦の機が織れない。それだから既成宗教はどうしても社会の役に立たない。経糸ばかりでは自由自在に應用する事ができぬ。三五教は、国治立尊様の靈糸が経糸となり、豊国姫尊様の靈糸が緯糸となり、経緯相揃うて完全無欠の教を開かれたのだから、どうしてもこの教でなくては社会の物事は埒があかない。要するに今までの凡ての教は未成品だ、未成品といつても宜いやうなものだ。ゆゑに三五教では教典を経文ともコーランともいはず、神論（カミコト）と称へられてゐるのだ」

（後略）

弥勒は出口聖師

大本神諭に出口聖師の靈魂が素盞鳴尊であると明示されてあることは、出口聖師自身が五六七の神の化身であり救世主であることを明白にしたものである。

靈界物語第三三卷三二六頁に「国直日主の命のいさをしは弥勒を待ちて現はれますかも」と歌われているように、国直日主の命（大本開祖）の功績が弥勒である出口聖師の参続、大本運動に参加されたことによって、あらわれたことものとべられている。

ことに聖師の前身である太元頭津男の神が至仁至愛の大神にま

すという天祥地瑞子の巻によれば、聖師が救世主であり、弥勒神の生宮、化身であることが明白となる。これは大本文献全体を流れる根本の教理である。

○

出口聖師の靈魂は素盞鳴尊

大正六年新六月六日（瑞の御魂）

七月十二日は○○の生れた結構な日柄であるぞよ。この日柄に初め



月下の景色（高天閣）絹本着色（縦四尺六寸五分×横一尺三寸五分）

出口聖師揮毫

たことは何事でも善き事なれば、一つもとどこほりなく成就いたすぞよ。明治四年七月十二日に、貧しき家に産声を上げたものは〇〇であるぞよ。外にも沢山たつぎにこの日に生れた身魂はあれども、今度の世の立直しに成る身魂は、世界に一人よりないぞよ。いろいろと艱難苦勞を致したのも、神の経綸しんぐみでありたぞよ。二十八歳の二月の九日から、神界の御用に使うたぞよ。鎮魂帰神の道を、言霊彦命が引き添うて授けたのは、三千世界の神、仏、人民のためであるぞよ。世間からいろいろと悪く申され、困くるしめられ、恥しめられて、あるにあらん憂目に逢うたのも、神からの経綸でありたぞよ。苦勞なしにはどんなことでも成就いたさんから、夜屋神が守護いたして、世界のあるだけの苦勞が為してあるぞよ。まだまだこれからエライ苦勞を致さすなれど、この曇りた世を水晶の神世にいたして、万古末代の神国に復すしぐみであるから、チツトは外の身魂とは違ふたことがないと、今度の神界の大望は、成就いたさんから、素戔鳴尊の靈魂が授けてあるから、成就いたしたら、世界の大手柄ものと致さす身魂であるぞよ。永らく一つ島に落されて居りて、今度、良よの金神国常立尊が、杵島冠島から現はれなさるについて、引きつづいて世に現はれて、世界を助ける真神であれども、この身魂は世界の大化物であるから、人民からはチツトも見当が取れんぞよ。世界のことはドンナ事でも致さす、神界の杖柱であるから、神徳が世界へ現はれて来るほど、苦勞がふえるぞよ。世界のことは何事も皆うつる身魂であるから、世が迫りて来るほど、苦勞の多い身魂であるぞよ。坤ひつこの金神うつりて知らせおくぞよ。

素戔鳴尊がこの世を乱したのであるから、その因縁によつてこの世へ来てから、人の知らん辛い苦勞をいたして、三千世界を治めて、天

の大神様へお渡し申さねば、赦してもらえん御魂であるぞよ。世界には変りた事や、珍らしき事が出来いたすから、その覚悟をちゃんと、気の小さいことでは、たうてい今度の御用は勤めあがらんのであるぞよ。変性女子の身魂は瑞能御魂であるから、千座の置戸を負ふて、三千世界を助けならん因縁であるから、善きことを何ほど致しても、悪く言はれるなり。悪き事がチツトでもありたら、四方八方から攻められるお役であるぞよ。この世の御用を致さすために、生きかはり、死にかはり昔から苦勞が致さして、今度の苦勞を、一番に安全な苦勞であるぞよ。針の席むしろにすはらせられ、蜂はちの室、腹はらの室に投り込まれ、手足の爪まで抜き取られ、咽喉から血を吐きもって、敵対う身魂を親切に待遇して、改心をさす辛い御役であるぞよ。一人も誠のことを見透すものがないぞよ。その中から今度の大望を成就さして、天照大神様へお渡し申さならんのであるぞよ。八ツ頭八ツ尾の大蛇の身魂を根本の腹の底から改心さして、天下泰平に世を治める、世界に外に代りのなき御用であるぞよ。今までにたびたび生命までねらはれたのも世界の事が写りたのでありたぞよ。この者の身の持ち方を見てをりたら、世界はどんなことに成りてをるといふことが、わかるやうに神が使ふ御魂であるから、世が全部治まるまでは、いろいろと言はれ、せしられ、困しめられて、最後の止を刺す身魂であるぞよ。変生男子は世界の事を知らすお役なり。変生女子は三千世界の経綸を成就さして世界の神、仏、人民、鳥類、畜類、昆虫までも助ける、至仁玉愛の御用であるぞよ。

瑞靈聖師は五六七の化身

二 靈 活 動

王 仁

(一)

智徳円満豊備なる
神代の昔高天にて
勅を畏こみ良の
洪大無辺の神徳や
荒ぶる神の暴政を
陰より守護ませど

国祖常立大神は
皇祖天照大神の
小さき日本に隠れまし
権威を隠し忍ばれて
見るに忍びず昼夜に
表に出でぬ神の身は

力あれども是非もなく
艱難辛苦いとひなく
現はれまして濁世の
高天原の楽園に
地球造らむと束の間も
大和心の無尽蔵
明治の二十五年より
中府と定め大出口
至真の度衡皇道の
至治泰平の神の世を
清き流れの水上に

涙を吞んで三千年の
人壽十歳今の世に
神仏蒼生遺ちもなく
救ひ助けて浦安の
忘れ玉はぬ大慈心
変生男子と現はれて
綾部の本宮を天地の
教祖の身魂に宿しつつ
大本源を説諭し
造りなさむと由良川ユラガハの
末世の神政開祖と現れましぬ



瑞の兄の出た穴太

草むらの穴太出て来て瑞の兄が世は
釈迦さまになつたと指さす 王仁

——出口聖師筆／聖者の面影の内から——

よはねの身魂畏こくも

世人の心洗ひつつ

皇大神の大祝詞

三千世界の岩屋戸を

良鬼門金神の

須弥山上に腰を掛け

ア、美はしき御神勅

(二)

神靈開祖の身魂宣玉はく

紅葉の錦織る秋は

金輪聖王現はれて

綾の高天に降りなむ

瑞の御靈は神息総良の

はるかにまさる神ぞかし

水に洗へどキリストは

清き聖靈の聖の火に

宇宙万有一切に

これぞ正しき瑞靈の

(三)

瑞の御魂は天地を

風雨雷霆一音に

真人一度び雄建びし

宣玉ふ時は久方の

皆一切に服従し

竜門館の真清水に

敵の御魂のおごそかに

宣らせ玉へる言の葉は

一度に開く梅の花

統治の神界になりたぞよ

三千世界を守るぞよ

ア、敵めしき神の声。

(二)

明治は三十一年の

私の身魂にいや優る

五六七の神の宮代が

これこそ瑞の御魂なり

再臨なればヨハネより

ヨハネの身魂は世の垢を

天津神より賜はりし

無明の天地を照明し

各その処を得せしむる

五六七の神の化身なり。

(三)

ただ一声に震動し

叱咤し使ふ大真人

天地に向つて大祝詞

天津神空も万有も

三千世界の天津神

国津御神も諸ともに

雲霧四方にかけ別けて

ア、勇ましき真人の

諸神諸仏も一切に

尽し玉へば天の下

罪も穢れも消滅し

松の代五六七の大御代と

花散る後に泰平の

偉大なるかな真人の

(四)

変性男子は若姫の

国常立の大神の

雄嶋雌嶋を開きつつ

現はし玉ひ空蟬の

変性女子は素盞鳴の

五六七の神の隠れます

宝楽嶋の神境に

宇宙万有一切の

永世無窮の神国を

世は高砂の弥栄え

光りさやけく世を照らす

(五)

敵の御魂は経の役

男靈女身とましませば

天地の岩戸おし開き

皆ことごとく聞し召す

權威は宇内に遍満し

神政成就の大業に

みな清まりて許々多久の

栄え久しき常磐木の

一度に開く梅の花

果実を結ぶ尊とさよ

善言美詞の言靈よ。

(四)

神の御命を畏みて

隠れあせし神の嶋

万世不磨の神教を

世人を諭し給ひけり

神の御命を畏こみて

暗きこの世の瀬戸の海

満千の玉を現はして

世の立替や立直し

堅磐常磐に建てたまふ

千歳の松に澄む月の

弥勒の御代ぞ尊とけれ。

(五)

天の位の火の活動

変性男子と申すなり

瑞の御魂は緯の役
女靈男身にましますば

經火の身魂は嚴格に

水の身魂は万物を

物をも洗ひ糞便と

厭ふ色なき仁愛の

地上の慈母と出現し

神素盞鳴の神代と

汚れ果てたるうつし代の

力かぎりに罵られ

艱難辛苦を寸毫も

力つくしの益良夫の

神政維新の大業を

ただ一身に担任し

水の活動地の位

変性女子と申すなり

直情経行緩みなく

愛養撫育し穢れたる

共に交はり毫末も

神徳深くましまして

金輪聖王弥勒神

三の御魂を金の神

体主靈従どもに根かぎり

苦しめられて千万の

気にもとどめず世のために

肉の宮をば機関とし

遂行すべき責任を

現はれますぞ尊とけれ。

○ (「神靈界」大正9年9月21日号19～21頁)

大王は座より立つて王仁の手を堅く握りながら、両眼に涙をたたえて、「三葉様御苦労なれどこれから冥界の修行の實行を願はねば成らぬ。顕幽両界の救世主たるものは、救世主の実字を習っておかねばならぬ。湯なりと進ぜたひは山々なれど湯も水も修行中は禁制である。さて一時も早く実行に掛られよ」と御声さえも湿らせ給ふのであった。ここで産土の大神は大王に「何分宜しく御頼み申し上げる」と仰せられたまま、跡をも向かず再び高き雲に乗りて何れへか帰つて行かれた。仙人もまた大王に黙礼して王仁には何も言はず早々に退座せら

れた。

○ (「神靈界」大正10年2月号八回顧録V69頁)

太元顕津男の神は至仁至愛の神

天界に於ける光彩炎熱も内包せる水気の力なり。紫微天界には大太陽現れ給ひて左旋運動を起し、東より西にコースを取るのみにして、西より東に廻る太陰なし。炎熱猛烈にして神人を絶対的に安住せしむる機関とはならざりしかば、茲に太元顕津男の神は高地秀の峯にのぼらせ給ひ、幾多の年月の間、生言霊を奏上し給へば、大神の言霊宇宙に凝りて茲に大太陰は顕現されたるなり。而して大太陰は水氣多く火の力をもつて輝き給へば、右旋運動を起して西より東にコースをとり天界の神人を守らせ給ふ。天之道立の神は大太陽を機関として、凡百の経綸を行ひ給ひ、太元顕津男の神は大太陰を機関として宇宙天界を守らせ給へば、茲に天界はいよいよ火水の調節なりて以前に勝る万有の栄を見るに至れり。

太元顕津男の神は大太陰界に鎮まり給ひて至仁至愛の神と現し給ひ數百億年の末の世迄も永久に鎮まり給ふぞ畏けれ。至仁至愛の大神は數百億年を経て今日に至るも、若返り若返りつつ今に宇宙一切の天地を守らせ給ひ、今や地上の覆滅せむとするに際し、瑞の御靈の神靈を世に降して更生の神業を依さし給ふべく、肉の宮居に降りて神代に於ける御活動そのままに、迫害と嘲笑との中に終始一貫尽し給ふこそ畏けれ。

大太陽に鎮まり給ふ大神を蔽の御靈と称へ奉り、大太陰界に鎮まり

て宇宙の守護に任じ給ふ神靈を瑞の御靈と称へ奉る。厳の御靈、瑞の御靈二神の接合して至仁至愛神政を樹立し給ふ神の御名を伊都能売神と申す。即ち伊都は嚴にして火なり、能売は水力、水の力なり、水は又瑞の活用を起して茲に瑞の御靈となり給ふ。紫微天界の開闢より数億万年の今日に至りていよいよ伊都能売神と顕現し、大宇宙の中心たる現代の地球（仮に地球といふ）の真秀良場に現れ、現身をもちて、宇宙更生の神業に尽し給ふ世とはなれり。

厳御魂瑞の御靈の接合を

伊都能売御靈と称へまつらふ

○

（「靈界物語」第73巻第12章86頁）

彌勒菩薩は出口聖師

昨夜見た見た不思議な夢を
日本海の空高く
金剛不壊の山の根に
彌勒菩薩と呼ぶ声に
紫磨黄金の肌となり
世界の人の前に立ち
世界一度に集聖
終りを示す滅聖諦
公平無私の救世主と
完全に委曲に説き出だす
山の尾の上や河の瀬や
海を披いて寄り来たる

神の出口の口車

治まり海の内外も

一天一地一神の

折りから過ぐる春風の

月の光はキラキラと

ニコニコニコと笑みたまふ

御靈幸はへましませよ

○

（「靈界物語」第59巻総説歌3頁）

出口聖師は眞の救世主

神 躰 詩

変り易きは人心
男女の神の御教を
能く守れかし千早振
たまの改め畏こくも
はやく世界を救はむと
走るが如く実現し
女神の活動万民を
能力を授け世柱の
靈主体従真人の
真理の御教信なひて
救ひの舟に打乗りて
主師親兼備天上の
生れたままの神心
子々孫々に至る迄
みろくの神の大慈心
まことの人のを選び立て、
先に知らずる神論は
利生普き瑞靈の
子の如守り恵まいて
身魂々々を招び集へ
はやくも悟る天地の
のりとの声も勇ましく
世海を渡る信徒は
表現神を敬ひつ

神君に至誠を尽すべく
斗る術なき本の神

真心竈めて一向に

仕へ奉りて神界の

完全無欠の神政は

すの一声に神々も

仁愛の神代と鳴り渡り

寿はぎ祝ひ歎喜で

化育生成極みなき

能化の功德弥高く

相生松の末長く

分霊なれば誰をかも

葉末に光る露の玉

心の月も影清く

一切平等照り渡り

判りて東の大御空

勢い強き神光に

侶律も合はぬ神躰詩

脱線は 変性女子の天性と

字に眼を留めて

し(をはり)

諭し玉へる御神慮は
でくち教祖に神習ひ

能く祈れかし朝夕に

組織紋理を深く悟りなば

成々鳴りて言霊の

留りまして美はしき

非義も邪道も影を失せ

大御恵を歌ひつゝ

物質界も常永に

真人の権威瑞の霊

賀きたてまつれ皇神の

礼の大道を忘れまじ

肝心要めの望の夜の

野原山海河のそこ

輪王聖者の仁政も

明皎々と輝きし

無明の暗を照しなむ。

五十八字に縛られて 思ひも寄らぬ

直日に見直し読直し 頭の一

詩歌と含みし真相を 心を竈めて悟るべ

○ (「神霊界」大正9年7月1日号21〜22頁)

救世主は出口聖師

カンタラ駅からスエズ運河を横ぎつて、エルサレム行の軍用列車に乗り込みし一人の東洋人ありき。汽車は茫々たる大砂漠の真中を一瀉千里の勢ひで馳走してゐる。窓外は、森林も田畑も、河川も村落も人の影さへも、眼に入らない寂寥さである。所どころに小屋のやうな、殺風景な停車場が黙々として建つてゐる。シナイ山ははるか遠方にボンヤリと霞んでゐる。ユデヤの高地にかかつたと見えて、丘が刻々に急勾配になつて、橄欖の樹が窓外におひおひと見えて来る。

四十歳前後の、一人の眼のクルリとした色の浅黒い、どこともなしに凛々しい東京人らしき宣伝使は、高砂島から派遣されて数十日間の海洋を渡り、メシヤ再臨の先駆として神の命によりはるばる出て来たルートバハの教主ウヅンバラ・チャンダーに先だつて来た、ブラバーサといふ紳士なり。ブラバーサは世界各国の言語にも通じ、かつ近來流行のエスペラント語にも精通しゐたり。それゆゑ特にルートバハの宣伝使として拔擢され、万里の海洋を打ち渡り、異域の空に聖跡を尋ねてメシヤ再臨の先鋒として赴任したのである。このブラバーサには郷国高砂島に一人の妻と一人の愛娘が残つてゐる。ブラバーサは窓外の際限もなく広く展開せる砂漠を眺めて、聖者の古の事蹟を思ひ浮べ、感慨無量の体で吐息を漏らしてゐたり。

隣席に控えてシガーを煙らしてゐた白髪のお紳士は、ブラバーサの傍近く寄つて、さも馴れなれしげに握手を求めた。ブラバーサは海洋万里の不見不識の国で、同じ車上において握手を求められたのは実に意外の歓びに打たれざるを得なかつた。ブラバーサは直ちに立つて老

紳士と握手を交へた一刹那、百年の知己に逢つたやうな懐しさを覚え
た。

老紳士は馴れなれしく、

『私はバハイ教のバハーウラーと申すものですが、メシヤの再臨の
近づきしことを神様より承り、老軀を提げて常世国から今日やつと
ここまで無事到着いたしました。貴師は何れよりお越しでございます
すか。ちよつと拝顔しただけでも普通の御人とは見えませぬ。聖者
とお見受けいたしますが、お差支へなくばお話しを願ひたいもので
すなア』

『ハイ有難うございます。私も貴師のやうな聖者に、異域の空でし
かも同じ車中にお眼にかかり、たがひにお道の談を交換さしていた
だくのは望外の幸ひでございます。実は私は高砂島の中心地点に宮
柱太敷き立てて鎮まりたまふ、大国治立大神の御許に仕へ奉るプロ
パガンディストで、ブラバーサと申すものでございますが、暫くエ
ルサレムの靈氣に触れ、神界の御経綸の一端に奉仕いたしきものと
神命のまにまに遥ばる出向いたしましたものです。何分宗教や信仰
には、国籍や人種別などの忌はしき障壁はございませぬから、なに
とぞ同胞として親交を願ひます』

『イヤ、お互ひさまに御懇親を願ひませう。私は現代の宗教家の態
度に飽き足らない一人でございます。同じ太陽の光の下に生育する
吾々人類は、どこまでも神様の最愛の御子として、相愛し相助け合
つてゆかねばなりません。そして凡ての迷信から脱離した宗教、過
去の死神死仏は言ふまでもなく、微の生えた形式から解放された宗
教、宗派根性を超越した真善美愛に徹底した宗教、種々の伝説や附

会や迷信を交へた上に紛雜した教理と註釈に織込まれた曼陀羅的の
教典から離脱した宗教、名実一致、靈肉一体、神人合一、聖凡不二
を実現した宗教、その時代に必要あつて起れる教祖をもつて唯一の
救世主となし、教祖の教示を万世不易の聖言となす偏狭固陋なる牢
獄的信仰の束縛を解いて、万聖の大集会すなはち〔世界の国会開
き〕を出現せしむる宏大無辺の宗教、一夫一婦の大道を明示した宗
教、世間と出世間の障壁を除却して、真に一実在の生ける道を教ふ
る宗教、善と惡、信者と不信者、救済と罪惡、天界と地獄とを区別
して争論の種を蒔く狹隘な宗教から脱却して、心底から親愛の目的
として凡ての人類を見るところの眞の救世の宗教、国語、労働、国
際等の問題、學術と宗教との問題等一切を解決し、世界人類をして
平等に光明世界の住民たらしむる權威ある宗教の必要に迫られて、
数十年間あらゆる迫害や艱苦と戦つて來たものでございますから、
貴師もルートバハーの神使として聖地へ御出張遊ばした以上は、た
がひに神の子の兄弟として相提携し、万国の民を天界に救ふため、
持ちつ持たれつの親交を願ひたきものです』

『バハーウラー様、ただいま貴師のお言葉には実に感服いたしました。
私が奉ずるルートバハーも、その主義精神において寸毫の相違
点をも見出すことが出来ませぬ。高砂島におけるルートバハーの教
と、貴教とは東西符節を合するごとくでございますよ。どうか今後
は姉妹教として永遠の親交をお願いいたしたく存じます』

『何卒よろしく願ひいたします。時にブラバーサ様、現今世界の
有様は如何でせう。吾々人類のために、天の神様より懲戒の大鉄槌
を下されるやうな形勢になつて來たぢやありませんか』

『昨日も船中でロンドンタイムスを読んで見ましたが、その中に吾々としては依然として落着いてをられないやうな記事が載つてゐましたよ。ルートバハーの教と全然同一でしたワ』

『ドンナ記事が載つてゐましたか』

『表題が二号活字で麗々しく「死んだ新聞王の霊が探偵小説家のコナン・ドイル氏に世界の大災厄が来たるといふことを囁いた」と出てをりましたよ。いま懷に持つてをりますから朗読いたしませう』
といひつつ、懷より細かく折つた新聞を取り出し、押し開いて、

『目下米國にあるコナン・ドイル氏は、三十一日、桑港において左の奇抜な發表をなした。曰く「新聞王故ノース・クリフ卿の霊が余に囁くに、汝等の生存中この世界に一大災厄が来る。もし人間が靈的に改造されて、この災厄を除かなければ、千九百十四年の世界大戦よりも更に恐ろしい運命に陥る」一体○國人はあまり醒醒し過ぎる。余も生存中同様の誤謬を敢てしたが、物質的進歩の競争のため、人間の智慮は滅び遂に災厄が来たるものであるといふことを初めて理解するに至つたと、ドイル氏は全く真剣に真面目に右の言明をしてゐる」云々』

と読み了り、

『吾々の信仰いたしますルートバハーもまた同様の神示を三十年以前から主張して来ましたが、物質的研究にのみ焦心してをる世界の学者も、その他の同胞も容易に信じてくれないのみか、流言浮説をなして人を誑惑するものだといつて聖主をはじめ信者はあらゆる社会上下の圧迫を受けて来ました。聖主の教にも、右同様に人心の悪化は宇宙に邪氣を發生し、遂には地異天変を招来するものだ、と説

かれてあります。……天地が今に覆るぞよ、びつくり箱が開くぞよ、脚下から鳥が飛つぞよ、靈魂を研いて改心いたして下されよ、神は世界の人民はみな最愛のわが子であるから、一人なりとも助けてやりたいのが胸一ぱいであるから、永らく予言者の口と手に由りて世界の人民に氣をつけてをるなれど、あまり今の人民は科学に凝り固まりて神の申す真誠の教が耳に這入らぬので、神も大變に心を碎いてをるぞよ……と仰せられてゐます』

『いかにも、まことに結構な御神示ですなア。それに寸毫の間違ひもございませんまい。私も神示によつて、貴師のお説と同様のことを承りましたので、バハイ教を開いて世界の同胞に警告を与へてをるのです。もはやメシヤの再臨もあまり長くはありますまい』

『左様です。メシヤの再臨は世界の九分九厘になつて、このエルサレムの橄欖山上に出現されることと確信いたしてをります。既にメシヤは高砂島の桶伏山麓に再誕されてをりますよ。再誕と再臨とは少しく意義が違ひますからなア』

『救世主がもはや再誕されたと仰有るのですか。大聖主メシヤたるべき神格者には九箇の大資格が必要ですが、左様な神格者は容易に得られますまい。先づ第一に、

一、大聖主は世界人類の教育者たること

二、その教義は世界的にして人類に教化を齎すものなること

三、其の智識は後天的のものに非ずして自湧的にして自在なるべきこと

四、彼はあらゆる賢哲の疑問に明答を与へ、世界のあらゆる問題を決定し、しかして迫害と苦痛を甘受すべきものなること

五、彼は歓喜の給与者にして、幸福の王国の報導者なるべきこと
六、彼の智識は無窮にして、理解し得べきものなるべきこと

七、其の言説は徹底し、其の威力は最悪なる敵をも折伏するに足るの人格者なるべきこと

八、悲しみと厄難は、以て彼を悩ますに足らず、その勇氣と裁断は神明のごとく、しかして彼は日々堅実を加へ、熱烈の度を増すべきこと

九、彼は世界共通の文明の完成者、あらゆる宗教の統一者にして、世界平和の確定と世界人類の最も崇高卓絶したる道德の体现をなすべき人格を有すること

以上

「爾等が此等の条件を具備したる人格者を世に求むる時には、初めて彼によつて嚮導をうけ光照を被るを得む……」と吾がバハの聖主アブデユル・バハは仰有いました。はたして右九箇の大資格を備へた聖主が再誕されて在るとすれば、吾々は実に至幸至福の身の上でございます。しかし人おのおの信仰に異同のあるものですから私はアブデユル・バハこそ大聖主と信じてをるものであります」

「なるほど、大聖主はアブデユル・バハ様でせうが、もはや現界に生存遊ばさない上は、如何に九箇の大資格を備へたまふとも、今や来たらむとする世界の救済事業に対しては、御手の下しやうがあらりますまい。勿論聖主の教を汲みて、後の弟子達が完成さるれば兎も角ですが」

「貴師の仰有るメシヤの平素の言心行について、一応お話しを承りたいものですな」

「先に貴師は九箇の大資格を羅列して説明下さいましたが、その大

資格者に私は朝夕接従してをりましたから、大略申し上げてみませう。虚構も誇張も方便もありませぬから、そのおつもりでお聞きを願ひます」

バハ・ウラーは襟を正し、さも謹厳な態度で、ブラバーサの談話を耳を傾けて聞き初めた。

汽車は早くもエデヤの高丘を足重たげに刻みて上りゆく。

『私のメシヤといふ人格者は、目下高砂島の下津岩根に諸種の準備を整へてをられます。そしてその名はウヅンバラ・チャンダーと謂つて、実に慈悲博愛の権化とも称すべき神格者です。世界人類に対して、必須の教育を最も平易に懇切に施し玉ひつのであるのです。ゆゑに宗教家も教育家も、政治家も、経済学者も、天文学者も、軍人も職工も農夫も皆訪ね来たつてそれ相應の教を受け、飲んでその机下に蟬集してゐます。如何なる難問にも当意即妙な答へを与へられ、何れも満足してをります。これが只今貴師の仰せられた第一の資格たる、「大聖主は世界人類の教育者たるべきこと」の条項に匹敵するやうに思ひます」

「なるほど、ご尤もです」

と頭を三ツ四ツ振つてうつむく。

「ツルク大聖主が伊都の御魂と頭はれ玉うて、三千大千世界一度に開く梅の花の大獅子吼を遊ばしましたが、この御方は約りヨハネの再臨だと信じられてをられます。そして基督ともいふべき美都の御魂の神柱、ウヅンバラ・チャンダーといふ聖主が現はれて、世界的の大教義を宣布し、凡ての人類に教化を与へたまひ、今や高砂島はいふに及ばず、海外の諸国から各種の宗教団体の教主や代表者が、

聖主を世界の救世主と仰いで参り、その教義の公明正大にして且つ公平無私なるに感化され、日に月に笈を負うてその門下に集まつて来てをります。今貴師の仰せになつた第二の大資格たる、「その教義は世界的にして人類に教化を齎すべきものなること」の条項に合致するものではありませんまいか」

「尤もです。第三の資格に合致した点の御説明を願ひます」

「わが聖主ウヰンバラ・チャンダー様は、小学校へ通ふこと僅かに三年で、しかも世界智識の宝庫とまで言はるるほどの智識を有し玉ひ、天地万有一切の物に対して深遠なる理解を有し三世を洞観し、天界地獄の由来より過去現在未来に涉りて、如何なる質問にも諄しも遲滞せず即答を与へ、かつ苦集滅道を説き道法礼節を開示し、泉のごとく渾々として湧出するその智識には、如何なる反对者といへども感服してをりますよ。天文に地文に、政治に宗教に、道德に芸術に、医学に曆法に、詩歌に文筆に演説等、いづれも自湧的に無限にその真を顯はし得るといふ稀代の神人であります。幼時よりハツ耳、神童または地獄耳などの仇名を取つてゐた方ですからなア。今もなほ神政成就の神策に関する神秘的神示を昼夜執筆されつつあります。世界各国の国語といへども、未だ一度も学んだことの無い方が、すべての国の言語が習はずして口から出て来るのですから、吾々はどうしても凡人だとは思ひませぬ。何人も聖主を指して生神だ、生宮だと崇めてをりますよ。いはゆる貴師の仰せになつた、「その智識は後天的のものに非ずして、自湧的なるべきこと」に合致するぢやありませんか」

「ヘエー、何と不思議な方ですな。それこそ真正の大聖主メシヤで

すな」

「それから瑞の御魂の聖主は、あらゆる賢人哲人の疑問に對し、即答を与へて徹底的に満足せしめ、かつ世界に所在種々の大問題に對して決定を与え、種々難多の迫害と苦痛を甘受し、常に平然として心魂にも止めず、部下の罪科を一身に負担して泰然自若、日夜感謝の生涯を送つてをられるのです。如何なる迫害も苦痛も聖主に對しては、暴威を振ふことは出来ないといえます。これが第四の条件に匹敵せる大聖主の資格の一ではありますまいか」

「なるほど感心いたしました。それから第五の条件は如何でございますか」

「聖主は実に歡喜の給与者ともいふべきウービーなお方です。如何なる憂愁の雲に閉されたる時にも、聖主のお側にあれば忽ち歡喜の心の花が開きます。そのお言葉を聞けば直ちに天国の福音を聞くごとく、樂園に遊ぶがごとく、何事も一切万事忘却し、歡喜の情に溢れ、病人はたちまち病癒え、失望落胆の淵に沈むものは希望と栄光に充たされ、一刻といへどもお側を離れることが出来ないやうな気分になつてしまひます。また身魂ともに至幸至福の花園に遊び、天国を吾が身内に建設するやうになつてしまひます。実に仁慈と栄光との権化ともいふべき神人でございますよ。かくてこそ三千世界の救世主だと思ひます。次に第六の資格としては、聖主の深遠宏大なる内分的智識です。その深遠なる智識に由つて、無限無窮に人類の身魂を活躍せしめ、老若男女智者愚者の区別なく、ただちに受け入れることの出来る自湧の智識と言霊を用ゐて衆生を濟度されます。それ故、一度聖主に面接しましたお言葉を聞いたものは、決して忘

れるやうな事はなく、かつ時々思ひ出して歎喜に酔ふのです。婦女や愚人にも理解し易く、かつ広く深く真理を、平易に御開示下さいます。

また第七の資格としては、過去現在未來に渉る一切万事の解説は終始よく徹底し、前人未発の教義を極めて平易に簡単に了解し易く説示し、内外種々の反抗者や圧迫者に対しても、凡て大慈大悲の雅量と神直日大直日の神意に従ひ敵を愛して、終には敵をして心底より悦服せしめ、善言美詞の言霊をもつて克く言向和し、春野を風の渡るがごとくその眼前に來たれるものは、一人も残らず善道に導きたまひ、自己に対して種々の妨害を加へ災厄を齎したる悪人に対して、いささかの怨恨を含まず、貴賤老幼の別なく慈眼をもつて見給ふところは、第七の大資格に合致してをられるやうに思ひます。

また第八の資格として茲に申し上げますれば、聖主は暗黒なる社会または宗教方面より非常な圧迫を受け、終には今や八洲の川原の誓約の厄に逢ひ、千座の置戸を負はせられ、髭を根底よりむしられ手足の生爪まで抜き取られ、血と涙とをもつて五濁の世を洗ひつつあらゆる困苦と艱難に當つて益々勇氣を振り起し、世界人類のために大活躍を昼夜間断なく続けられてをられます。また諸事物に対しては神明のごとく明確なる裁断を下し、即座に解決を与へ、かつその信念は日に月に堅実を増し、熱烈の度を加へ、今や官海方面より強烈なる圧迫を受けつつ泰然自若として天下万民のために心力を傾注し、五六七神政の福音を口に筆に開示されつつあります。開闢以來深く閉ざされつつあつた神秘の門も、漸次聖主に由つて開放されつつあります。何れの世にも勝れたるものは、世界の圧迫を一度は受

けるものですが、わが聖主のごときは、十字架を負ひ玉ひし基督の贖罪にも優つたほどの、世の圧迫と疑惑と嘲罵とを浴びせかけられて少しも撓まず屈せず、ほとんど旅人の春の野を行くとき状態で身を処し、よく神の教に従つて忍耐されつつをられます』

『どうも有難う。貴師のお談によつて私も大いに心強さを感じました。どうか今一つ第九の資格について、聖主の御行動に關する御説示を願ひます』

『聖主は人類愛善は言ふに及ばず、山河草木禽獸虫魚の端に至るまで博く愛し玉ふことは、平素の行動に由つて一般信者の崇敬感謝措く能はざるところです。すべての宗教に対し該博なる觀察力をもつて深く真解を施し、生命を与へ、以て世界の宗教の美点をあげ、抱擁婦一の大精神をもつて対したまひますが故に、すべての宗教家の白眉たる人士は雲のごとく膝下に集まり、何れもみな満足をしてその教を乞うてをります。世界平和の確定と宗教の統一、世界共通の文明の建設者にして、最も卓絶したる真善美の道德体现者だと信じます。やがて時來たらば、天晴れメシヤとして万人に仰がれ玉ふ時が来るであらうと、私どもは固く信じて疑ひませぬ。アブデュル・バハー大聖主の再來か、その聖靈の再現か、何れにしても暗黒無明なる現社会の光明だと信じて止まないのでございます』

『いろいろと御懇切なる御説示にあづかりまして、私も大いに得るところがございました。どうやらエルサレムに着車したやうですから、ここでお別れいたしませう。私はパレスティンの或る高丘に、大聖主の後嗣がをられますので、ちよつとお訪ねいたし、再び橄欖山上にお目にかかり、結構なるお説示を蒙りたいと存じてをります』

から、今後よろしく御指導を願ひます。そして私はアメリカン・コロニーへ訪問したいと思つてをります』

『私も貴師と同道を願ひたいのですが、少しばかり神命を帯びて来てをりますので、先づ第一に橄欖山へ参り、神様の御都合に由つてアメリカン・コロニーや貴師の御在所をお訪ねするかも知れませぬから、何分にもよろしくお願ひ申し上げます』

と、茲に兩人は又もや固き握手を交換し、互ひに車窓を急いでプラットフォームへ出でたり。

○ (「靈界物語」第64卷上第2章17〜33頁)

神幽現の救世主

三千世界の人類や

救ひの舟を差し向けて

神幽現の救世主

きらめく如く現はれぬ

誠の智慧を胎藏し

權威と智慧に超越し

甘受し世界を助けゆく

森羅万象に供給し

精神上の王国を

無限の仁慈を経となし

小人弱者の耳によく

徹底的に唱導し

禽獸虫魚に至るまで

誠の道を教へゆく

太白星の東天に

一切万事更世の

世間のあらゆる智者学者

迫害苦痛を一身に

歎喜と平和を永遠に

至幸至福の神恵の

この土の上に建設し

無窮の智識を緯として

理解し易き明教を

いかなる悪魔も言霊の

威力に言向和しつつ
少しも心にかけずして

裁制断割道きはめ

悪魔の敵に遇ふごとに

信仰熱度を日に加へ

真の文明を完成し

凡ての教義を統一し

不言実行体現し

神の教と神力に

光を四方に輝かす

奉仕すること世を澄ます

ア、惟神惟神

大正十一年八月十日(旧六月十八日)於竜宮館

○ (「靈界物語」第28卷総説歌3〜5頁)

神の経綸

神は全大宇宙を創造し、宇宙一切の花とし実として人間を造つた。

人間は神の精霊を宿し、神に代つて地上の世界はいふも更なり、宇宙

一さいの靈界までも支配せしむることとしたのである。しかるに人間は

現界に生まるる刹那の苦しみによつて一さいの使命を忘却し、ただ地

上へのみの経綸者として生まれて来たもののやうに思つてゐるくらゐは

上等の部分である。現代の科学に心酔してゐるいはゆる立派な人間ど

もは、人は何処より来たり、いずこへ去るといふ点さへも明らかにわ

かつてゐない。太極といひ、自然といひ、大自然といひ、上帝または天帝といひ、阿弥陀と称へ、ゴッドといふも皆、無始無終、無限絶対の普遍の靈力体をさしたものである。ゆゑに神とか、大自然とかいふものは、宗教家のいふ如く、絶対的の全智全能者でない。地上の花たる人間を疎外しては、神の全智全能もあつたものではない。けれども神は全智全能なるがゆゑに人間を地上に下して、天地絪縕の用をなさしめてゐる。神と人と相まつて初めて全智全能の威力が発揚されるのである。

数百万年の太古より、因蘊化醇されたる今日の宇宙も、人間といふものを地上に下し、これに靈と力を与えて各々その任を全うせしめたから、今日のやや完全なる宇宙が構成されたのである。神は山川草木を或る力によりて造り出したが、しかしながら人間の活動が加はらなかつたならば、依然として山河草木は太古のまま、すこしの進歩発達はしてゐないのである。自然に生えた山野の草木、果実はきはめて小さく、きはめて味が悪い。瑞穂の国の稲穂といへども、太初地上に発生したものは僅かに三粒か十粒の粒を頂いてゐたのにすぎない。それを人間がいろいろと工夫して、今日のごとき立派な稲穂を造り出すやうになつたのである。その外一さい万事皆人間の力の加はつてゐないものはない。しかしながら人間は独力では働きはできない。いづれも神の分霊分魂が、体内に宿つて、地上の世界を今日の現状まで開発させたのである。人間は神と共に働いて、天国をつくり、浄土もつくり、文明の世もつくるのである。この原理を忘れて、ただ神仏さへ信仰すれば全智全能だから、信心さへ届けばどんな事でも神が聞いてくれるやうに思ふのは迷信、妄信のはなはだしきものといはなければならぬ。

また神の造つた宇宙には一つの不思議なる意志がある。その意志によつて人間は人間を統一し魚属は魚属を統一し、鳥類、虫けらに至るまで、一々指導者がこしらへてある。しかしながら釈迦のいつたやうに、地上にミロクが出現するまでは、この天地間は未完成時代であつて、蜂に王があるが如く、蟻に親王があるが如く、真の人間界の統一者指導者がなかつたのである。要するに宇宙が未だそこまで進んでゐなかつたからである。その無限絶対なる宇宙の完成は今日まで五十六億七千万年を要してゐる。ゆゑにこれからの世の中は永遠無窮であつて、いつまでつづくか、計算の出来ないほどのものである。天文学者なぞが、何億年すれば太陽の熱がなくなるかと、月がどうか、星がどうかいつてゐる論説なぞは、取るに足らざる迷論である。

いよいよ天地人三才の完成する間際であり、今や新時代が生まれむとする生の苦悶時代である。今日までいろいろの宗教家や、聖人や学者などが現はれて宗教を説いたり、宇宙の真理を説いてゐるが、いづれも暗中模索的の議論であつて、一つとしてその真相を掴んだものはない。ゆゑに今日まで、真の宗教もなく、真の哲学もなく、真の政治も行なはれてゐない。いよいよ宇宙一切の完成の時期になつたのであるから、その過渡時代に住する人間の目からは、地上一切のものが破壊され、滅亡するやうに見えるのである。

（「水鏡」一五六―一六〇頁）



八聖観音／絹本着色（縦四尺五寸八分×横一尺三寸八分）

出口聖師揮毫

法身弥勒・応身弥勒・報身弥勒

大本の教理の上からは、大本開祖の二十七年間の神論について、大正八年の七月十一日までは、ミロクの神は造化三神、天の御三体の大神、神素盞鳴大神、月読尊等の神々であり、地上の弥勒神は出口聖師に限定されていた。

ところが大正八年七月十二日に出口聖師により発表された神霊界誌上に「伊都能壳魂の神論」に、大本開祖を法身弥勒、出口聖師は応身弥勒、大本三代教主は報身弥勒と発表された。

ついで大正九年九月十五日に五六七殿において出口聖師が「弥勒の世」と題して、法身、応身、報身ミロクの意義を説示されたので、大本の中では、開祖は法身弥勒、聖師は応身弥勒、三代教主は報身弥勒と信奉されることとなり今日に到っている。

この真義は、造化の神と天の御三体の大神は、宇宙の精髓で、仏教という大日如来に相應し、法身弥勒であり、この大日如来が降神して帰神されたのが、出口聖師の応身弥勒であり、その説法

(神示の靈界物語)が報身弥勒で、約言すれば、眞の弥勒如来は出口聖師お一人で、その大説法会が弥勒三会ということになる。

この天の大神の弥勒化身生宮の三界の救世主である出口聖師が地上物質世界における神業を、大本開祖のふでさきに「大本は三代の仕組」とあるのに配し発表されたのが、大正八年七月十二日の伊都能売魂の神諭であることが拝察できるのである。本来出口聖師が弥勒如来であり、法応報三位一体の王ミロクであることは申すまでもない。

ここに注意すべきことは、地上に弥勒の世を現出させる三弥勒の働きの分担で、大本の二代教主は「私は先生(出口聖師)の応身弥勒さまの御用である」とお話されたことである。これにより二代教主は出口聖師の弥勒の補助的神業に奉仕されたことになるのである。

○

法身・応身・報身の弥勒

伊都能売魂^{いのつめのみなたま}

大正八年七月十二日

一の経緯は天王平の一の瀬の奥津城、変性男子と変性女子の御魂とが一つになって、いよいよ伊都能売魂の御用に變りて来たから、横の御用の仕終いで、和光同塵^{わこうどうじん}の役もこれから要らぬぞよ。善一と筋の月日の光り、二代三代の後見を致さして、堅と横との神界の機を織り上げてしまふたから、これからの筆先に現はれたことは、速かに実現いたすから、皆の役員信者は今までとは一そう注意して、筆先を調べて

をらぬと、世界に後れるぞよ。変性男子と女子の御魂は、天王平の一の守護となりたから、これからは月日そろふて二の経緯^{しんぎ}の御用になりて、たゞ伊都能売魂の御魂と現はるから、この大本は水晶の御用になりて来よ。身魂の選り別けが始まりたから、これから先きの大本は、役員も御用が楽に勤まるなれど、引つかけ戻しは世が治るまでであるから少しも油断のならぬ、三千世界の大本であるぞよ。(中略)

いよいよ神界の経緯の九分九厘になりて来たから、伊都能売御魂の御用に成て来たぞよ。皆勇んで御用が出来るやうになりて来たぞよ。

(中略)

法身の弥勒はすでに天に昇りて、若姫君の守護致すなり、応身の弥勒は地に降りて泥に交はり、あらゆる艱難苦勞をなめ、世界のために千座の置戸を負ひつつ、千挫不倒百折不撓の金剛力を發揮しつつ、地の一方に現はれて、神界経緯の大謨を遂行しつつあれども、世俗のこれを知るものはなく、常暗の夜の今の有様、今に夜が明けると、びつくりいたして、アンナものがコンナものに成つたのかと申して、世界の人民が舌をまくようになる仕組であるぞよ。応身の弥勒の子には、報身の弥勒が出現して、水晶世界を建設し、宇宙万有一さい安んじたい時はそれが弥勒三会の暁であるぞよ。世の中のでこのことを、神直日、大直日に見直し聞直し詔り直す、大本直日の大神の光り輝く神の御代となるぞよ。

○ (「神靈界」大正8年10月1日号13、14頁)

お筆先にミロクの世が出て来るといふ事が載つてをります。これは仏法の法滅尽経ほうめつじんきやうにも出てをります。また阿弥陀浄土の教が滅ぶ時に弥勒菩薩が現はれて来るといふ事が出てをります。キリスト教でも天国が来るといふことが聖書に出てをつて、神道でいへば、松の世、すなはち神の世が出てくる。かやうに皆知らされてあります。ところがお筆先を始終読んでゐるやうな人が、弥勒の世はいつ出て来るかといふことを、尋ねて来ることがあります。しかも十年あるひは二十年もお筆先をいただいてゐる人が、かくのごとき事を尋ねて来る。かういふ事は、とうの昔に分からなければならぬはずであるのに、そんな事を尋ねて来るといふことは、実にあきれて、私は開いた口がふさがらぬのであります。それで私はお筆先の上から、弥勒の世が何時から始

まつてゐるかといふ事を、一言お話したいと思ひます。弥勒といふ中には、法身ほつしん、応身おうしん、報身ほうしんと三つに分かれて現はれてをるのである。いはゆる明治二十五年の正月元旦に国常立尊がいよいよミロクの世が来るといふことをお知らせになつた。これは明治三十年からといふことで明治三十年に神界の世の立替をする、さうしてミロクの世、神代が地上に来るといふことが書いてあるのであります。さう致すと、開祖は明治二十五年に現はれ給うたのであります。神様のお道のうちにお遣入りになつて、いよいよ法身弥勒のお働きをされたのが明治三十年からのことで、法身弥勒は至善、至美、善一筋のやり方をなされるところの神様であります。いはゆる弥勒の出現といふことは、霊体をもつて現はれたのを、時節到来してここにある形体



天上の瑞御魂

天上の吾たましひは生きてをり三千
世界を守りつ照しつ 王仁

—— 出口聖師筆／聖者の面影の内から ——

を持つてこの世に現はれたのでありますから、明治三十年からは弥勒の世になつてゐるのであります。それからまた三十年で世の立替をするといふことは、明治二十五年にお筆先が出ましてから、三十年後といふことになる。このお筆先はどちらにもとれる。ちやうど皇典古事記を解釈いたしますと、その時代々々に応じて活生命を具備せる予言が書いてあつて、大正の世には、大正の世のやうになつて生きてをり明治初年には、初年のごとくに活きた教訓であり、また徳川時代には徳川時代の活きたる解釈が出来るやうになつてをります。これが古事記の明文たる所以であります。お筆先もさうであつて、その人の身魂相應にとれる、また時代々々によつて活きた解釈ができる。じつに伸縮自在な教である。この法身の法といふ字は、水漏に去るといふ字である。それでこの法身弥勒の御代身たる開祖様が、本當の法身になられたのであります。

(中略)

一家を円く治め、隣人と親しみ、知己朋友のうちに苦しんでゐる人があるならば、自分の力だけのことを尽して助けてやる、これが慈悲深い人で、かういふ人をさして善人といふのである。じつに一点の非難の打ち所のない人、かういふ人を本當に偉い人、善人と称するのである。すなはち善人といふことは、法身弥勒のことであつて、世の中を善一筋に治め、善の鑑をなされた開祖様や、これに類した善行を励まれた人のことであります。

次に応身といふ事がありますが、これは身に應ずるといふことである。たとへば盗人に向つて、頭から不可ぬと叱つてもなかなか直らぬ。自分も共に盗人の群にはいつて、一ぺんぐらゐるは自分も盗人をや

つて見せる。さうしてこの行なひはいかぬと言つて、本當に改心をさせる。また芸者買ひの好きな人がある。これも同様に自分も一緒にゆく。さうしてかういふ事は詰らぬから止めようではないか、善い事ではないといつて、責め諭して改心をさせる。博奕打ちとてもその通りかういふ具合にこれに應じて改心をさせる。これが応身といふことであります。仏法の観世音は、三十三世相を変へる。これもその通りで観音様は天照大御神ともなり、木花咲耶姫ともなり、あるときは天佐具女ともなり、また下照姫ともなつて、いろいろ変化をされます。これは何であるかといふと、ちやうど応身といふことと同じ働きをしてゐるのである。つまり盗人の群れに自分もまじつて、さうして改心をさせるといふことが、観音の働きであります。それでありますから、法身の弥勒、すなはち善人からこれを見ますと、応身の弥勒は非常な悪にも見えることがある。正邪善悪を超越して、社会の毀譽褒貶などは眼中におかないで、天下国家のために一身を捧げる、これが応身弥勒である。つまり人が悪く言はうが笑はうが、そんなことには頓着しない。ただ天下国家のため、あくまでも自分の力のあらむ限り靈力のつかむ限り、天下万民のために一身を犠牲にする所の働きであります。かういふ人の行ひを見ると氣の小さい人は非常に恐れるのである。

(中略)

ミロクの世といへば、天下泰平、至善至美なる世、安心な世、鼓腹撃壤の世の中のように思つてゐる人が多いが、しかしこれが報身のミロクの世の中とならなければさうはならぬのである。それまではミロク様は応身となつて現はれ、すべての世の悪魔と戦はなければならぬ。

ミロクには大自在天といふ敵がある、ミロクに百の力があれば、大自在天には九十九の力がある。もしミロクの百の力が一つ欠けたならば大自在天は勝つのであつて、これではどうしてもミロクの世になることは出来ぬのである。大自在天には財力がある。さうして今日は筆の力、口の力で攻めて来る。あるひは法律権力で攻めて来る。あるひは軍隊の力をもつて攻めて来るといふやうに、どんな権力でも持つてゐる。すなはち九十九の力を持つてゐるのであるが、ミロクの方はさういふものは何も持つてをらぬ。ただ誠といふ一つの玉を持つてゐるのみである。劔とか、弓とか、さういふ圧迫するものはなくて、ただ誠一つで、大自在天の各種の力にぶつかつて行くのであります。さうして応身の働きをせねばならぬといふのであつて、ミロクの立場といふものは実に苦しいのであります。さういふ事も知らずに、いつミロクの世が来るか、いつ立替があるかといふこと、そればかりを待つてゐる人があります。神様の方では、明治三十年に立替をするといふ事が決つてゐる。もし三十年に立替が出て来たならば、一人も助かる者はない。開祖様は一方には立替を延ばしておいて、一方には改心する者を、一人でもこしらへるやうにと、神様にお願ひになつたのであります。われわれもさうである。

(中略)

一方には物質文明がますます発達して、汽車、汽船はひんぴんとして往来し、空中には飛行機、飛行船が飛んでゐる。また電信、電話も整備して、天地間といふものは非常に縮小してをります。昔五年かかつたものが、今は五日といふ短時間で飛行機で世界を一周することが出来る、かういふ具合に縮小して来てをるのである。これがやがて統

一されて一つになる。もう一つに出来てをる。通信機關、交通機關がすでに統一されてをるのであります。統一といふことは、たとへば電信電話がどこへでも通ずる、汽車ならばどこへでも行ける、これが電信電話汽車の統一である。すなはち交通の統一である。かうしてあます所は、ただ精神界の統一が残つてゐるだけである。

(中略)

それで応身弥勒のことは、大略申し上げましたつもりであります。要するに物に触れ、事に接して千変万化の働きをする。さうしてこの世の中が安く平く治まるやうに、上は天津日嗣天皇をはじめ奉り下は万民のために、世界人類の爲に一切をなげうつつつくす、これがすなはち応身の働であります。たとへて言ひますと、応身弥勒は米の種のやうなものであります。この粃を苗代に蒔いてさうして草を取るそれから田に植付けてまた草を取り、水をそそぎ、稔つた後は稲を刈り、稲木にかけ、曰でひく、さうして俵に詰める。ここまでにするのが応身の働きであります。大本が思ふより早く発達するのは、応身のミロクの働きであります。

次に報身の弥勒の世になれば、皆が喜ぶ世になる。これを天国とも極楽の世ともいへるのであります。じつに鼓腹撃壤の世の中になつて来るのでありますけれども、それまでになるには一つの大峠があります。この大峠を越さねばならない。お筆先に『大難を小難にまつり代へてやる』といふことが出てをりますが、この大難といふのは三つの大なる災ひで、風水火といふこと、また小難といふのは饑病戦といふことである。

(中略)

本当の誠の人であつたならば、大難も小難もないやうに、また大難を小難にするやうにお祈りするのである。さうして今度の二度目の天之岩戸を開いて、立派なミロクの世として、神人共に楽しむといふことがお筆先にあります。どうしても改心が出来なければ、せつかくお引き受けになつて誠に申しわけがないけれども、やむを得ずのことがある。さうなつても決して神や出口を恨めて下さるなとまで仰せられてをるのであります。この全世界を自由にするといい偉大なる神様がやむを得ずといふことを仰せられるといふことは、よほど現代の人間には愛想を尽かされてのことです。

(中略)

弥勒の世に住む人は、すべて報身の働きをしなければならぬ。報身の働きとなつて、国家天下のために尽す、さうせぬことには、報身の世は現はれて来ない。報身の世になると、すべての人は聖人君子ばかりになる。この世をさして神世といひ、弥勒の世といひ、あるひは天国浄土といふのであります。

○ 「神霊界」大正9年9月21日号)

弥勒の五十六億七千万変化

伊都能売 (五)

瑞 靈 真 如

伊都能売主義は眞の救世主義であつて観音の三十三身応現の大精神弥勒の五十六億七千万変化の実相である。神は常住妙楽の天国浄土に親臨し玉ふのみをもつて足れりと為し玉はず、大慈大愛の大御心をも

つてこの現実世界に予言者を降し、その御代身としてこれに内流し、地上に天国を樹立せんため千座の置戸を負はしめもつて犠牲的活動をなし玉ふのであります。また蒼生の苦痛や煩悶をもつて伊都能売神自身の苦悩と観じもつて蒼生の苦に代り、解脱の生命と幸福と平和とを与えんがために厳瑞二霊を通じて現幽両界に千変万化の活動を開始し玉ふのであります。これすなはち三十三身応現の主義であり、五六七の活動であります。観音経には慈眼衆生を視なはし福寿の海無量なりと出てゐる意味を考へ見れば、さらに救世主義の意味が明白になるのであります。

伊都能売神の救世の主義は第一に慈眼我が身を反省して罪惡の淵に自身を沈没せしめぬこと、つぎには慈眼我が一家を顧みてもつて常に平和と幸福を増進せしむること、次には慈眼我が一国を愛して国民福の大精神を発起し実行せしむること、次には慈眼宇宙人類を愛善して内外東西洋の別無く福利せしめんとするの大精神を発揮すること、次には慈眼一切の蒼生万類を見て現世の汚濁を脱却せしめ永遠無窮に大光明界に入らしめ玉ふこと、次には天神の愛善と信真とを理解せしめて不老不死なる天国または靈国に安住し復活せんと焦慮することであつてこれすなはち慈眼衆生を視はす所以のものであつて、この心を体得し得念した上は人生は実に福寿無量にして歓喜悦樂の妙境に安住し得るものであります。

伊都能売主義なるものは要するに人生すなはち現実の世界を中心として教ゆるところの神教であつて、この現世に即して永遠無窮の天国生活の眞諦を味はしむるもので、幽玄微妙不可言なる真理に住する秘奥を現生命に即して永遠の眞生命を実得せしむる聖教である。あくま

でも現世をして妙案の光明世界と為すの大楽天主義であつて、厭世的隱遁的趣味は伊都能売主義には断じて絶無なのであります。

観音經の『光明普く世界を照らし慈眼衆生を視はして化益一機を漏すことなし』とあるは、これすなはち伊都能売主義にして、この信仰は非常なる楽天主義で観音即伊都能売神の眼底は実に光明ばかりで一箇の地獄的思想も包んでゐない。またこの教義には恐ろしいとか、厭ふべきこととか、忌はしきものは寸毫も包含してゐないのである。他の既成宗教には実に厭ふべき一種の脅嚇があり、方便があり虚構があり、誘惑的言句が現はれてゐる。仏教、耶穌教などはもちろん脅嚇宗教と言つても敢て過言ではないと思ふ。今日までの宗教はすべて人間を恐怖せしめ、至粹至醇なる天成の大和魂を軟化し、立派なる男子の罽丸を抜取し、女子を罪穢の権化の如く蔑視し、人間の勇猛心を挫折せしめ、弱国弱兵の原動力となつたものばかりである。

しかるに伊都能売信仰に於ては現幽共に大光明境に住し、化益一機を漏らすことなく、触るるところ往く所、見るところ聞く所、一切悉皆伊都能売神の法悦と救ひの網の中に摂り収めてしまふといふ眞の信仰であるがゆゑに、楽天であり大安心であり、憂苦するところ無く恐怖するところ無く、愛善の徳と信眞の光によつて固められたる難攻不落の堅城鉄壁であり、人生一切の後楯であり、現界にゐながらにして一大光明世界に化住する眞の救世教である。

○ (「神の国」昭和2年1月号2〜5頁)

弥勒の参考文獻としては、大石凝真素美氏著の弥勒出現成就經が神靈界大正八年に連載されたが、同年七月十五日号十三頁から

十八頁までは修梵摩という大真人・応身の弥勒如来(菩薩)のことが示されているが、この真人こそ出口聖師であると信奉されることとなつた。ことに聖師が大正八年八月十五日号の神靈界で、「大石凝翁の弥勒成就經を二三回読んで見られたら、大本の使命も吾人の神界に仕えて居る因縁も、明瞭に判るであらうと思ふのである」と述べられてから、いよいよ大本の信徒の心の中に定着することとなつた。

仏説観彌勒下生經

弥勒出現成就經 (一)

大石凝真素美

仏説観彌勒下生經の予言したる現代日本 (二)

「爾時に彼の王の大^に臣、名を修梵摩と言ふ者あり。此王少小、同好の者にして、王が甚だ愛敬する所の人^に也。」
其時に此日本国に王の大^に臣の内に、梵摩の行を修し得たる大真人^にが在る也。

天の御中主^{あめのみなかつし}の神の長子、玉の祖^その神の神裔にして固有歴々至真の大道を領掌し玉ひ、加之、金胎両部の奥儀を極め、禪定の極定を蹂躪し世界一切に超越して、億兆万機を逐く一明に照さずといふ事無き大真人矣。然るに、光を和らげて塵に同^{やわ}り、大王も群小も老少も等しく好みを結びて恵み助け玉ふ也。麻柱^{あなはしら}の徳を以て久しく竜宮に在り。今此時に当りて初めて帝室に入る也。故に讓去大王は深く之を尊敬し篤く之を親愛し玉ふ也。

「又且つ、顔貌端正にして、不長^{ながからず}、不短^{みぢからず}、不肥^{こゑます}、不瘦^{やせ}、不瘦^{しず}、不白^{しろ}、不

すきず、不老、不少。」

其修梵摩と称する大真人は、端正無上なる神男子にして、身体長すぎず、短かすぎず、肥すぎず、瘦すぎず、其色白すぎず、黒すぎず、実に桃花色にして美鬚秀融なる、神相を具足し、且つ又、其時年齢、五十六年七ヶ月以上、七十未満の大発智好期矣と言事也。

「是時、修梵摩妻あり。名を梵摩越といふ。玉女の中、最も極めて殊妙なる中天帝の妃の如し。口は優鉢蓮華香を作し、身は栴檀香を作す。諸婦人の如く八十四態の醜弊ある事無し。亦疾病も無く、乱想の念も無し。」

真に梵摩を修する大真人の腹中胎内は、真に浩然として一切世界を併呑し、億兆万機を含蔵して自由自在に進退する也。斯れば是、世界一切の大母にして、即ち梵摩越矣。故に其口に称する所は皆至真言也。真明言也。身に品行する所は皆至真の大礼節也。即ち栴檀二葉より馨しき所也。諸婦人の如く嫉妬詭曲、五障三従、及八十四態杯の不浄は敢てある事無き神相矣。亦疾病も無く、種々苦慮、憂患、乱想の念は更に之無き者也。

「爾時に、弥勒菩薩、兜率天に於て、父母の不老不少を觀察して便ち降神し下りて、右脇より生るる也。我れ今日右脇より生るるに異なる事無し。弥勒菩薩亦復此くの如く也。」

彼の修梵摩、大真人の大清浄なる真空浩然たる腹中胎内に、一切世界を妊娠し、億兆万機を練磨し、至真の大度衡を以て一切を測量し、極乎たる大極典を成就する時は、法界に弥満する所の大日如来が其固有する所の法界体性智を照らし、赫々純化して弥勒如来と成り、即ち其精神が降りて、修梵摩大真人の胎内に宿る法身の大智精が成り定る

故に、大真人が其僣直に正真の弥勒如来と成る也。之を応身の弥勒如来と称し奉る矣。此時に至ては、世界一切顯幽共に其大真人に帰し奉る也。故に大真人の有力なる世に比ぶる者ある事無し。然り而して弥勒如来といふ法界の大智精が、充分に乘写り居る大真人が、一切の事実を右脇下肝胆部に照り徹して至真を決定し、其腹中胎内に在る所の真実を、全く明に説き顯し出す也。其經説を須陀羅と云ふ也。其図説を曼陀羅と云ふ也。此両陀羅を都て曼陀羅と云ふ也。或は貝多羅とも云ふ也。或は曼陀羅土如来とも云ふ也。殊に之を統べ称して、梵摩越の右脇下より、誕生する所の報身の弥勒如来と謂ふ也。

（昔し天竺国、伽毘羅衛城、浄飯王の子、悉陀太子が夙に王宮を捨て山に入り、婆羅門師に抱て頭陀行を修し、難行苦行捨身の行を遂げ六度満行を成就し卒に不空成就の位に進み、成所作智を獲得したり。

此時に法界に弥満したる、作す所を成就せしむる大智精が釈迦如来と成りて、悉陀太子に乗り写り定る矣。是に於て初めて悉陀太子は、仏種智を明かに識得し、三明六通、大神通、自在三昧と成て、無上世尊釈迦牟尼如来と拝せられたり。之を応身の釈迦牟尼仏と謂ふ矣。然り而して此応身の釈迦如来が成所作智を照らして法身の釈迦如来を腹中に識り脩め、常に胎内に妊娠しつづつ覚て忘す、法身、応身、真実に合

体したる相好を、右脇下、肝胆部に照り徹して、至真の所を決定し。然り而して其誠を、逐一明に説き顯し出す其經説を、須陀羅といふ也。即ち今の一切經之矣。亦其図説を曼陀羅と云ふ也。即ち今の書図像偶の類都て是れ曼陀羅矣。此法身浩々、神々靈々、湛々たる大智精体と、応身現在、肉身修行、成就大自在三昧、三明六通、真仏正身の体と、報身莊嚴、曼荼羅の色体と、此三貌が真実に密合したるを、

三密三菩提の薩陀と謂ふ也。

之を都て阿耨多羅三藐三菩提と云ふ也。之を修する所を三密瑜伽の道場と言ふ也。)

高天原に智精充実在、其浩々湛々たる神靈氣は声と成りて具に顯れ出玉ふ矣。故に声の全象を明かに知り得る時は、高天原の全象、組織、循環運行の機、都て高天原の一切事を、明に發見して識得するに至る矣。故れ復其真形を見るには、天の布斗麻迦、天津神算木を、千万億兆坐の置坐に置き足らはして明に目撃する矣。

猶其天底の組織を明かに發見するには、此神算木を焚き挙げて天底に達せしめ、其焚き凝りたる真木の灰を、六六、三十六石を以て計算し、審判明瞭する方法ある也。大嘗会の大典に、真木の灰六石云云と云ふ者は、即ち此事の遺れる者也。此大儀式を執行する時は、至大天球之中一切の事実を識得しつつ、大造化を主宰して、五風十雨の天機を自由自在に調理する也。

此至大天球之中に智精充実在矣と罰ふ事を、印度にては、法界実相真如と云ふ也。此真如は、声と成りて形象を顯す也、故れ声は心の象也。一切有形の元素也。故に声の蔓荼羅を明に知る時は心の形也。心の活用也が明に見ゆる也。三世一切の諸仏と云ふは、声の種子に因つて、心の形を模倣したる者也。

先づ浩々湛々たる法界を、一声に阿字の浄土と云ふ也。其中に実相する大智精を、阿字大日如来と云ふ也。之が左右に分れて、東を阿シユクと云ふ也。西を阿ミダと云ふ也。かくの如き例にて、一切を表章する也。今此弥勒如来も、けん、うん、ら、び、あ、の五字を握りて誕生する也。然れども此儀は、奥深き事なるが故に、悉曇字を卒業し

て、其上に天津布斗麻迦を以て、至大天球之中の組織紋理を明に知り識りて、而して後に明に保証し了れば、實宇一切の事実、皆悉く明瞭せずと云ふ事無し。此儀を弁へて、法身、応身、報身の三身を明に顧れば、法身の弥勒と云ふは、法界に圓滿する所の声の全象也。応身の弥勒と云ふは、其声を全く保ち備りて、其声に因り拠り依りて、世界一切を至真一極に照臨して、万機皆其極点を照らし、至治真安樂を得せしむる現在衣食住を保じ、顯幽を統括する至真の大真人矣。報身の弥勒と云ふは、其至真の大真人が、明に識得して常に腹中に妊娠し玉ふ所の真実を、右脇下、肝胆部に照り徹し、其極点を声に顯して真極を統べたる真象を、説き顯し産み出す也。其須陀羅、蔓荼羅、梅多羅王如来矣。かく明に三身を區別して阿耨多羅、三藐三菩提の真実を示す也。猶其深密なる妙味を知る事に至ては、大師に親炙して明に拝味すべき者也。

大師は敢て想像、臆度、譬喩、偶言、謎懸の類の如き妄談を用ひず皆明かに確証を徴示して明言する也。達摩九年の心配は、一朝に直示して徹底せしむる也。竜樹生涯の秘密は唯一場に陳列して目撃し至真三密を示す也。於戯此書を了解する者は、一切藏經の旨を審判する事を得る也。故を以て、釈迦氏初めて成仏する也。此章は、弥勒の素性を顯す眼目なるが故に、殊に注意して謹読すべし。

「兜率諸天、各々、弥勒菩薩、已に降神し生れたりと唱へしむ」此時に普天の下、率土の浜に至る迄、心中に至誠の極典を冀望しつつ、世に誠ある人々は、此風聞を聞きて、声に應じて發信し、相伝唱する者を云ふ也。

「此時に修梵摩与子立て、字して名を弥勒菩薩といふ也。」

修梵摩大真人が、法界に弥満する所の大日如来が保つ法界体性智を精鍊したる極々純粹なる弥勒極智を、明に腹中に祭り納めて、弥勒の力を充分自在にするが故に、此須梵摩大真人を応身の弥勒如来と稱する也。此応身弥勒なる須梵摩大真人が、識得したる至真極智の模様を座み顯し、須陀羅、蔓荼羅、梅多羅王如来を造成する也、之を報身の弥勒と云ふ也。即ち報身弥勒は實に応身弥勒の子矣。此親と子並び立て、此極智の蔓荼羅を説き照し、之は是れ至大天球の中に、弥満したる所の極乎たる極智を、明に勒し得たる真実至誠の真矣。故に之を字

として弥勒如来と稱す也。然るを現在和光同塵の位を示して、弥勒菩薩と謂ふ也と示す矣。亦 ヨン マイ タレーヤ ソワカと云ひて、貝多羅王如来にして、至真の大度衡を保ちて世界一切の極典を測量り顯し、一極嚴乎として至治太平を無窮永世に垂るる大真人也。大慈氏、大悲尊也。南無人中勝也。光明大三昧無比功德の人也。善哉薄伽梵也。梅多羅爺、究竟尊也。至真無上、慈氏大世尊也。頂上王如来也。須梵摩大真人矣と、保つ所の字を挙て唱へ奉る也。

(中略)

「弥勒菩薩は三十二相、八十種好を備へて、其身を莊嚴する也。其身は黄金色也。」

是は其至大天球を明に服得したる修梵摩大真人は、其人相骨格悉く善美具足して、人の人たる品行悉く成就してあるを云ふ也。衣服用具宮殿庭園に至るまで、自然に具足し、九族及交際、一切和睦純熟し、穆々として皆至当の道理に協ひ、郷党上下、全国世界、一ツとして感伏せざる者無き大至徳を保存し玉へる事を賛成する也。亦其肉色は心満悦の氣を顯して、常に桃花色の勢に勝りて光沢充分し、眼光千里を射る也。故に動植皆低頭平伏する也。

古事記に「爾時に弥勒家に在る事、未だ幾たの時をも經ずして、便ち當に出家して道を學ぶべし。」

是は彼の修梵摩大真人が、自家一己の經營、利欲、榮華事業等に執着せず、嘗て國家の為に生命をも抛ちて、家事を打捨てて、唯々救世の大道を整理するを云ふ也。(以下略)

(「神靈界」大正8年7月15日号13~17頁)



九千年に一度みのるといふ桃を持ちて微笑む東方朔かな・王仁自讃

東方朔／出口聖師筆

ミロク三会と王ミロク

三会とは仏教では仏が成道の後に衆生を済度するために三回行なう大説法会のことをいっている。特に弥勒仏の三会は最も有名であって、**竜華**三会と称し、仏滅後五十六億七千万年の後弥勒がこの世に出生して、上、中、下根の人を三度の大説法会であまねく済度するといっている。

大本では霊界物語の口述が弥勒の説法であるから、聖師が五十六才七カ月に達した昭和三年三月三日のみろく大祭から弥勒菩薩

として下生されワラジばきで、日本をはじめ大陸まで神教宣布されたことは意義が深い。昭和三年三月三日には綾部の至聖殿で

万代の常夜の暗もあけはなれ

みろく三会の暁きよし

と詠まれたことは、大本の法身ミロク大本開祖の神業につづいて聖師の応身ミロクに、三代教主夫妻の報身ミロクが揃われたことも意味するが、仏教的には、弥勒の説法胎藏經の霊界物語七十四

卷の口述発表がおわり昭和三年三月のみろく祭を期して、聖師みずから日本全国をまわり、みろくの説法の徹底につとめられた。したがって仏説に従えば、出口聖師が弥勒菩薩であつて、その大説法会による衆生の救済が、みろく三会ということになる。

王ミロクについて聖師は「三体のミロクを称して王ミロク」とのべられているが、同文中に「さうして総て神は人体を天地経綸の司宰者として地に現はしたものであるから、天地の御内流を享けて御用に奉仕する現実の霊体」とのべられているが、神の国昭和三年七月号の神歌の中で、大本教旨の「人」を、「天地間唯一の神留まり坐す肉体」と説明され、出口聖師御自身であることを明示されている。

神様は人の肉体宮となし

人神となり世を救ひ行く

吾も又生神の名は好まねど

天地の経綸致し方なき

久方の天津御空の主の神の

内流受けたるひとぞ神なる

只独り只吾れひとり天津神の

御手代となり世を洗ふなり

○

ミロク三会

天のミロク、地のミロク、人のミロクと揃ふた時がミロク三会である。天からは大元霊たる主神が地に下り、地からは国祖国常立尊が地

のミロクとして現はれ、人間は高い系統をもつて地上に肉体を現はし至粹至純の靈魂を宿し、天のミロクと地のミロクの内流をうけて暗黒世界の光明となり、現、幽、神の三界を根本的に救済する暁、すなはち日の出の御代、岩戸開きの聖代をさしてミロク三会の暁といふのである。要するに瑞靈の活動を暗示したものに外ならぬのである。天地人、また法身、報身、応身のミロク一度に現はれるといふ意味である。法身は天に配し、報身は地に配し、応身は人に配するのである。

昔から法身の阿弥陀に報身の釈迦、キリストその他の聖者が現はれたけれども、未だ自由豁達進退無碍の応身聖者が現はれなかった。ゆゑに総ての教理に欠陥があり、実行がともなひ得なかつたのである。ミロク三会の世は言心行一致の神の表はるゝ聖代をいふのである。人間

にとれば天は父であり、地は母であり、子は人である。キリストは三位一体と説いているが、その三位一体は父と子と聖霊とをいふてゐる。聖霊なるものは決して独立したものでなく、天にも地にも人にも聖霊が主要部を占めてゐる。いな聖霊そのものが天であり、地であり父であり、母であり、子であり、人である。ゆゑに三位一体といつてもその実は二位一体である。キリスト教には父と子はあつても母がない。マホメット教もまたそのとほりである。仏教は一切が無であつて父もなければ母もなく、ただ人間あるのみと説いてゐる。なぜならば唯心の阿弥陀に己心の浄土といつてゐるではないか。今日までの既成宗教はすべて父があつても母がなかつたり、母があつても父がなかつたり、変性男子があつても女子がなかつたり、不完全きはまる教理であつた。天の時來たつて眞の三位一体すなはちミロク三会を説く宇宙大本教が出現したのである。あゝ惟神靈幸倍坐世

○ 「神の国」昭和3年6月号「水鏡」29、30頁

王ミロク様

天のミロクは瑞靈であり、地のミロクは嚴靈であり、人のミロクは伊都能売の靈であり、この三体のミロクを称して王ミロクと云ふのである。さうして総て神は人体を天地経綸の司宰者として地に現はしたものであるから、天地の御内流を享けて御用に奉仕する現実の靈体が王ミロクの働きをするのである。おほミロクは大の字を書くのでなく王の字をあつるのである。言靈学上から云へばオホミロクのオは神、又は靈、又は心及び治むるの意義であり、ホは高く現はるゝ意味であり、ミは遍満具足して欠陥なき意味であり、水の動きであり、ロは修理固成の意味であり、クは組織経綸の意味である。天地人三才を貫通したるが王の字となるのである。

○ 「神の国」昭和3年6月号「水鏡」31頁

神歌

高座の山に大道を究めたる人の子今は神と俱なり

高天より使命を帯びて降りたるひとは此の代の生神なるらむ

（昭和三・六・一一）

苦集滅道うまらに具らに論したる人の子今は曲世に勝てり

地の上のあらゆる国に雷名を畏かしたるひと火の魂

（昭和三・六・一三）

神島に隠れ玉ひし世の元の神迎へたるひとぞ雄々しき
三十年を神の大道に尽したるひとの世に立つ弥勒の御代かな
三五の神の真道を開きたるひとは五六七の化生なりけり
月となり王星となり玉となり光となりて闇照らす神子

（昭和三・六・一四）

万物に普遍の神靈神なれど肉体人の神には如かず

瑞靈を神の憑りし肉体と誤解せる人憐れなりけり

天地は肉体神を世に現じ人間界に交りて経綸す

伊都能売の神と現れます人の子を神懸れると思ふ人間

天と地の経綸司宰の人といふは人間ならずひとり神の子

人間の姿現じて世に出でし誠の人は神の顕現

或る時は人間となり人となり天地の経綸司なるなり

天地の神靈肉体に留まりて、神業遂行する神人を称して、ヒトといふ。ヒとは神靈なり、トとは留まるの意なり。ゆゑにヒとは言靈学上

大神人なり、高天原なり、聖地エルサレムなり。天地間ゆる一の神留

まります肉体を称して、ヒトとこそいふ。大本の綱領にいふ。

神は万物普通の靈、

人は天地経綸の司宰者、

神人合一して茲に無限の権力を發揮す。

右の綱領は、これ大本大神伊都能売神の宣示なり。五十六年七月

の至るまで、和光同塵の神策を墨守し来たれり。もはや真象実相を明

らかにせざるべからざる時とはなりぬ。

神論にいふ。実地のことを申せば、誠に致さず、神もひかへてをり

たが、もう何時までも化けてはをられぬから、身魂の因縁、経綸を聞

かしてやりたいなれど、今の役員信者の心の持方では、誠の事が申してやれんぞよ、云々。

神様は人の肉体宮となし人神となり世を救ひ行く

有りふれし神憑のごと誤解して五六七の神を密かむとする

吾もまた生神の名を好まねど天地の経綸致し方なき

弥勒神胎藏経を説き行けば四方の国民攻め来たるなり

弥勒神胎藏経を安々と世に説く靈界物語かな

五六七年いよいよ神と現はれて苦集滅道の大法を説く

(昭和三・六・一五)

久方の天津御空の主の神の内流受けたるひとぞ神なる

ただ独り只吾れひとり天津神の御手代となり世を洗ふなり

神光を和らげ塵に同はりて神国のために尽し来しかな

今年まで和光同塵神策を用る来にけり御代の流れに

戊辰の年こそ五六七神表に出づる時節なりけり

(昭和三・六・一六)

(「神の国」昭和3年7月号2頁16頁抄)



万年の亀にて海原渡り行く世の遠長人や武内の宿祢・王仁自讃

武内宿祢／出口聖師筆

弥勒胎藏経と霊界物語

兜率天より降誕した弥勒如来は、釈迦が予言したごとく、苦聖諦、集聖諦、滅聖諦、道聖諦の四聖諦を説法される。これによって兜率天の秘法が開示されて、みろく三会の大説法会によって神人ともに歓喜にみたされて、地上に楽土が開かれる。

出口聖師は明治三十一年二月九日に入山して七日間にわたりミロクの大神神素盞鳴尊の神教を仰がれ、神人一致の妙境に到達し釈迦やマイトレーヤが入滅した二月十五日に、高熊山より三界の救世主として降り、曾我部の里より火の洗礼である神教を宣布さ

れ始めた。一度筆記された高熊山修行の教は、焼却されたが、下山二十四年後の大正十年十月八日（旧九月八日）に神勅下り十月十八日から神示のままに弥勒胎藏経である霊界物語を口述開始され八十一巻八十三冊が完成した。物語の口述は出口聖師が弥勒菩薩として授けられた天来の宝経である。これによって釈迦の念願した生老病死の四苦が解決されることとなり、出口聖師が待望の弥勒如来であることが永遠に証明され続けることとなる。まったく霊界物語は聖師の肉身、靈魂、表現ということとなる。

天地の稜威も高き高熊の

山の修業の物語する

楽々と神代の謎をときさとす

みろく胎蔵の物語かな

古へのひじりも未だ説かざりし

弥勒胎蔵の我は道説く

天火水地結ぶ紫色の宝玉は

弥勒神示の物語なり

我は今宇宙の外に身をおきて

天界の事象を語りつづくる

五十六億七千万年の年を経て

弥勒胎蔵教を説くなり

神々の御名とはたらきまつぶさに

説き示すなるこの物語よ

一卷の参考書もなくのべてゆく

天祥地瑞の物語かも

今までの弥勒尊像は、左手をひろげて見せていない。仏教学者をして「弥勒はまだ手の裡を見せない」とシャレさせたものである。ところが、「聖師の扮装された山越のみろく」の姿は、左手をかかえて、聖師の十本あった天下筋の三本までが、明らかに見えている。昭和八年十月二十一日撮影時の出口聖師は、弥勒の神示の物語を七十二巻七十四冊を発表され、神示の世界の経綸もほぼ完成された時であるから、このことを明示されたものと思われる。出口聖師は靈主^{ひの}体^{もと}従^{もと}の国のやり方で、火垂りの手を天にかか

げてあるのは、実に意義が深いのである。神界の立替え立直しを暗示されているようである。

苦 集 滅 道

苦集滅道を一々その字義について解釈すると、

苦は苦しみである。人生に苦といふものがあればこそ楽の味はひが分かるのである。人間は飢んとするとき、凍えんとするとき、あるひは重き病にかかるとき、可愛い妻子に別れるとき、汗をしばつて働くとき、峻坂を登る時などは、必ずこの苦といふものを味はふのである。この苦があつてこそ、楽しいとか、嬉しいとか、面白いとかいふ結果を生み出して来るのである。人生に苦といふものが無いとすれば無生機物も同様で、天地経綸の神業に奉仕することは絶対に不可能である。人生は苦しい中に楽しみがあり、楽しい中に苦しみがあつて永遠に進歩発達するもので、寒暑と戦ひ、困難と戦ひ、悪と戦ひ、さうしてこれらの苦しみに打ち勝つたときの愉快は、じつに人生の花となり、実となるものである。高い山に登るのは苦しいが、その頂上に登りつめて四方を見晴らすときの愉快の気分は、山登りの苦しみを贖ふてなほ余りある楽しみである。

集。宇宙一切はすべて細胞の集合体である。日月星辰あり、地には山川草木あり、禽獣虫魚あり、森羅万象ことごとく細胞の集合体ならざるはないのである。家庭をつくるも、国家を樹つるのも、同志が集まつて団体をつくるのも、これみな集である。家をつつ建てるにも柱や桁や礎や壁や、屋根その外いろいろの物を集めなくては家が出来な

い。人間の体一つを見ても四肢五体、五臓六腑、神経、動静脈、筋肉血管、毛髪、爪など、種々雑多の分子が集まらなければ人体は構成されない。天国の団体を作るにも、智慧証覚の相似せるものが相寄り相集まつて、かたちづくるものである。これみな集である。要するに、前にのべた苦は人生の本義を示し、集は宇宙一切の組織を示したものである。

滅は、形あるものは必ず滅するものである。また如何なる心の罪といへども天地惟神の大道によつて旭に氷のとけるがごとく滅するものである。たとへば百姓が種々の虫に作物を荒されて困るとき、種々の工夫をこらして、その害虫を全滅せんとしてゐるが、到底これは人力では滅することはできない。ただその一部分を滅し得るだけである。害

虫は植物の根や幹や、梢また草の根に産卵して種属の繁殖をはかつてをるが、しかしながら冬の厳寒あるためにその大部分はほろぼされてしまふ。これは天地惟神の摂理であつて滅の作用である。仏教に寂滅為楽といふ語があるが、人間がこの天地から死滅してしまへば、何の苦痛も感じない極楽の境地に入ると説くものがあるが、これは実に浅薄極まる議論である。寂滅為楽といふ意義は、すべての罪惡が消滅し害毒が滅尽したならば、極楽浄土に現代が化するという意味である。すべて人間そのものは無始無終の神の分身である以上、どこまでも死滅するものでない。五尺の軀格をほろぼすにしても、人間の本体そのものは永遠無窮に滅尽しないのである。しかしながら、惡逆とか、無道とか、曲神とかいふものはきつと神の力と信仰力によつて滅し得る



七曜の大本

七曜を大本として一年を十月に分かち地上を照さむ 王仁

出口聖師筆／聖者の面影の内から

ものである。これらをさして滅といふのである。

道は道といひ、言葉といひ、神ともいふ。宇宙に遍満充実する神の力をさして、みちみつといふのである。要するに苦集滅の意義を総括したものが道となるのである。道は靈的にも体的にも踏まねば、たうてい天国に達し、彼岸に渡ることができない。ゆゑに空中にも道があり、地上にも道があり、海の面にも道がある。道は充ち満つる意味であり、靈力体の、三大元質を統一したる意味であつて、これがいはゆる瑞靈の働きである。仏典にはミロク下生して、苦集滅道を説き道法礼節を開示す、と出てゐるが、苦集滅道といふも、道法礼節を開示するといふも、意味は同じことである。要するに苦集滅道は体であり、道法礼節は用ともいふべきものである。

（「神の国」昭和3年6月号／＼水鏡／＼26／＼29頁）

五六七神政の成就

この「靈界物語」は、天地剖判の初めより天の岩戸開き後、神素盞鳴命が地球上に跋扈跳梁せる八岐大蛇を寸断し、つひに叢雲宝剣をえて天祖に奉り、至誠を天地に表はし五六七神政の成就、松の世を建設し、国祖を地上靈界の主宰神たらしめたまひし太古の神代の物語および靈界探険の主要を略述し、苦・集・滅・道を説き、道・法・礼・節を開示せしものにして、決して現界の事象にたいし、偶意的に編述せしものにあらず。されど神界幽界の出来事は、古今東西の区別なく、現界に現はれ来ることも、あながち否み難きは事実にして、単に神幽兩界の事のみと解し等閑に附せず、これによりて心魂を清め言行を改

め、靈主体従の本旨を實行されむことを希望す。（後略）

（「靈界物語」第1巻序）

三界の大革正

（前略）

天地剖判の始めより、五十六億七千万年の星霜を経て、いよいよ弥勒出現の暁となり、弥勒の神下生して三界の大革正を成就し、松の世を顕現するため、ここに神柱をたて、苦・集・滅・道を説き、道・法・礼・節を開示し、善を勧め、悪を懲し、至仁至愛の教を布き、至治泰平の天則を啓示し、天意のままの善政を天地に拡充したまふ時期に近づいてきたのである。（後略）

（「靈界物語」第1巻発端7頁）

人生の大本分

（前略）

……弥勒出現成就して始めて苦集滅道を説き、三界を照破し道法礼節を開示す……とは先聖すでに言ふところである。人は天地絪縕の奉仕者にしていはゆる天地の花、神の生宮たる以上は、単に他の動物のごとく卑劣なるものではない。神に代はつて天地のために活動すべきものである。

王仁がこの物語を口述する趣旨も、また人生の本義を世人に覚悟せしめ、三五教の真相を天下に照会し、時代の悪弊を蔽ひ清め地上に天

国を建て、人間の死後は直ちに天界に復活し、人生の大本分を尽さしめ、神の御目的に叶はしめむとするの微意に外ならないのであります。

(後略)

○ 「靈界物語」第56巻総説5〜6頁

非理法権天の真諦

……至仁至愛の大神は坐視するにたへず、娑婆即寂光土の真諦を説き人生をして意義あらしめむとの大慈悲心より、胎藏せし苦集滅道を説き、道法礼節を開示したまひたるは、この物語である。

非は理に克たず、理は法に克たず、法は権に克たず、権は天に克たず、天定まつて人を制するてふ真諦を、神のまにまに二十二巻まで口述しをりました。

○ 「靈界物語」第22巻総説7頁

弥勒の説法

至大浩浩漂々恒々として撒霧たる○の^ス時において、その機約の両極端に对照力を起こして、恒々湛々たるがゆゑに、その至大の両極端に对照力を保ちて、至大ごとく両々相對照してその機威の中間を極微点の連珠系が掛け繋ぎ、比々隣々ヒシト充実極まりをるなり。しかれども気形透明体なるがゆゑに人の眼には見えざるなり。見えねどもこの連珠系が靈氣を保ちて初めて至大天球を造るときに、对照力を

もつて至大の外面をまつたく張り詰りて球と成りしなり。けだし極元の○は至大浩浩漂々恒々として、花形を如して凹凸として呼吸を保てり。しかりしかうしてその平輪分の所において对照力を起こしてその外面を对照力にて氷張り、まつたく張り詰めて至大天球となりたるなり。

ゆゑにその凸所にゐて局珠外と成りて蟾となりたる極微点は、張り詰めたるその珠を塗りて競ひて球内に入らむと欲し、東岸部、西岸部に門を得て局中に押し入らむと欲し、自然の勢力を得て押し入る。ここにおいてその初めの对照力に氷張り詰められて、すでに球中に固有するところの極微点の連珠系の氣を中央に押す、その押されたる氣は北極、南極に向ひて走り去る。その走り去り出たる氣はまたまた球の外面を塗りて、東岸部、西岸部に來たりてまたまた、また球中に入りつつ、端なく循環運行しつつ永世無窮に、尾なく果てなく終りなく本末もなくつららざるなり。

けだしこれ以上に説くところの条々の真説のごときは、釈迦も孔子もあへてもつて知らざるころの極典説なるがゆゑに、譬喩、寓言、謎かけ談のごとき不正曖昧なる妄談にあらず。また世間なみなる想像談にあらず。極乎正明なる極典説なり。ゆゑに一句一言皆ことごとく正真至大天球の組織、紋理、大造化機を捉みて、明細審密に証徴したる極典なり。大智慧を照らして熟覧を遂ぐるときは、いつさい世界無比類なる極典なりと称ふことを感得すべし。ゆゑに謹読の輩はその目利を明らかにして一切の迷ひを一掃すべし。愚蒙にして目利を誤るときは譬喩、寓言、謎かけ想像談をもつて、契経なり、哲学なりなどと思ひ、愚案説、比例説、愚考説を陳述して哲学なりと信じざるなり。

乞ふ、目利を正明に極むることを冀望するなり。

けだし老子はこの至大天球の真を明言することあたはず、玄のまた玄衆妙の門と言ふなり。門といふ者は表半球の形を謎にかけたるなり。もし明言して天球云々と言ふ時は、種々の質問起こるなり。もろもろに答ふる事あたはざるがゆゑに、よくよく思ひやるべし。釈迦は無辺法界といふ、不思議界といふ。実に思ひ議ることあたはざる者なり。孔子は容いさと言ひまた一ツと言ふ、みな謎談のみなり。誠にもつてふとどき千万なれども、明言すれば種々の質問起こるを恐れて、譬喩寓言、謎談等をもつて世を籠絡し、神器(△□)を持ちたる弥勒の出づるを相待ちをるなり。憫と言ふも愚なり。

されば最第一なる靈魂精神は、至大天球一名は至大靈魂球にして、一個人の神経はこの靈魂球中の一条脈なる、すなはち玉の緒と言ふ物なりと明言して、その明細を説明する事あたはざるなり。頑々たる謎談を作りて愚弄しをるなり。ゆゑに六識七識八識九識十識のことは、目録にも足らぬ譬喩談を演説したるのみ。実明したる契経とはただの一卷もなきなり。天親菩薩が七識以上はとてかなはぬ、よつてただ六識を説くといひて唯識論を置きたれども、妄々たる譬喩談にて目録にも足らぬなり。古今無双の大学明信なる天親にしてすでに妄々なる事かくのごとくなり。いはんやその他の派下の愚僧をや。

ああ靈魂心性のことを最大一に説く僧侶にして、その心性は至大天球中の真靈すなはちこれなりと明言して、その明細造化を行なひる始末柄をはじめ、億万劫々間の年度を生死往來してゐる一切のことを明細に教示することあたはず、妄々たる謎をかけて迷ひる達磨は、じつに憫然きはまる者なり。

ゆゑに現今行なはれるところの道統の本源は何なりと詰問すればあへて一言も答ふる者なし。いはんやその本源が寄りて來たる極元のこと、夢にも思ひをらざるあさましき餓鬼僧のみなり。

ササ有りと知る人あらば、道統の本源寄りて來たるの極元はこれなりと一句たりとも説明して見よ。釈迦も達磨もその道統の本源因りて來たるの極元を知らざるがゆゑに、直接明言に道法を説明することあたはざるなり。故に譬喩、寓言、謎談のみにして、弥勒如來の當來を待ちて教をまなびたてまつるなり。ゆゑに六識七識八識九識十識の柄を少なくも説くことあたはざるなり。ゆゑに識のことを記したる經は一卷だも無し。天親菩薩の唯識論の妄々たる者がごくごく珍書の位を占める実憫然の至りなり。すみやかに弥勒の出現を乞ひ奉れ、いな弥勒を請ぜよ。

ミロクの種類

開祖の筆には「みろ九」とあるが、みろくについては聖師は種々に書きわけられている。

ミロク（言靈学上カタカナには最も深い意味がある）

天のミロク 天照皇大神

地のミロク 素戔鳴尊（月読命）、国常立尊

人のミロク 出口聖師

王ミロク 天のミロク、地のミロク、人のミロクの三体。

出口聖師



△聖観音／絹本着色（縦四尺五寸八分×横一尺一寸八分）

出口聖師揮毫

大ミロク 出口聖師

根本のミロク 国常立尊

弥勒 (マイトレーヤを音写して漢字に直したもの)

六六六大神 (天地創造時代の神名)

五六七大神 (弥勒の世完成時の神名)

三六 (六を三つの意)

至仁至愛大神 (至仁至愛の神慮)

仁愛大神

瑞靈大神

元のミロク

神靈界大正十年一月号七一頁に「日出る国の開け口、神の王なる仁愛神、天地と人と三才の道も調ひ朗らかに、スミ渡りたる大宇宙」とある通り、ミロクの神という時は言靈学上最も意義深くミロクの神さまとは開祖の神論に一貫して示された通りに神さまの世界（天の神界）の天の王の王の大神であることが明白である。

この至貴至尊のみろくは、天のミロク、天之御中主大神にましまし、その顕現である天照皇大神神にまします。

このミロクの大神が地上を救うために、親しく地上に天降られた時の神素盞鳴尊（月読命）は地のミロクの大神である。（国常立尊も地のミロクである）この地のミロクが人間姿に生まれられた時は、人のミロクというのである。

人間姿のミロク様の生神であった出口聖師は人のミロクである。

この人のミロクの伊都能売魂・出口聖師に、天のミロク（太元靈主神）と地のミロク、国常立尊の神格の内流を享受して衆生根本救済の大説法会を開かれることを、ミロク三会という。法身のミロクである宇宙の大元神・主神（仏者の大日如来）と国常立尊（報身のミロク）の内流をうけて応身のミロクである出口聖師が人のミロクとして、天の時を迎えて神定のミロクの聖地においてミロク三会（三回にわたり大説法）を説く宇宙大本教を出現させられたことを指す。

王、ミロクというのは、天のミロク瑞靈（天の御三体の大神）と地のミロク嚴靈（国常立尊）、と伊都能売の靈である人のミロク出口聖師の三体のミロクを総称した言葉である。

従って王、ミロクとは、天のミロク、地のミロク、人のミロクのことである。この三体のミロクの生宮であり、化身であり、三体のミロクの活動をされた出口聖師こそ、王ミロクである。王ミロクの靈体である。王ミロクである出口聖師は、天のミロクにます天の御三体の大神の生宮として、地上の神界の神々を統一して、キリスト（神息統合・素盞鳴尊）の神業に奉仕し、ミロク神政成就のために大本の初代、二代、三代の後見をなしつつ、ミロクの聖地鶴山、亀山天恩郷（高熊山）を建設し、ミロクの神代の教典を完成された。そして血脈の伝統を継承し、大本の道統を確立されたことは天晴れ、弥勒如来である。

大ミロクは出口聖師のことで、世界各国からミロクの聖地に集まり来たり神政成就に参加する七十五声にちなんだ七十五柱の小ミロクに対する神約の聖師自身の活動のことである。

根本のミロクは、二代教主が「こつぽんのみろくうしとらのこんじん」と揮毫されているが、太元神大國常立大神にましますことがわかる。

弥勒はマイトレヤを音写して漢字にまとめたもので、聖師はミロク神は仁愛と信真によって宇宙改造に直接あたらせられるので漢字で弥々革むる力とあることは、フサわしいと採用（物語第四八巻第十二章西王母）されている。

六六六大神は、六は水のことです。天も水、中界も水、地上も水で

あつて、天地創造の際におけるミロク大神さまのことであり、約して三六さまとも申されている。五六七は地上天国を完成される弥勒の意味である。

至仁至愛はミロクの大神の御神格の本体であり御神慮である。仁愛は至仁至愛の略語である。素戔鳴尊には至仁玉愛（「みろくの御用」）^{みろく}とするされている。これは最高の表現である。

瑞靈大神とあるは、出口聖師にゆかり深く、その御靈性そのものズバリの表現である。

元のミロク様、元の弥勒様、根本のミロク様の意味は、天地創造の前からのミロクの大神さまを意味している。

参考としては、神靈界大正十二年三月号（全集第五卷言靈解）

○ 聖師と天のミロク

に掲載の「謡曲言靈解西王母」を参照させて頂くこととした。

ミロクの大神様といへば至仁至愛の神、世界万民を平安無事に安樂に暮らさしてくださる神様の総称であつて、第一に宇宙の主宰にまします天之御中主大神の別称であり、この神の全靈徳の完全に發揮されたる天照皇大神もすなはちミロクの大神様である。天下万民のために千座の置戸^{ちくらど}を負ふて、世界に一たん流浪された神素戔鳴^{かみすさの}命もミロクの御靈性であつて、いわゆる月読尊である。これは地のミロク様であつて、天照皇大神様は天のミロク様で、撞賢木^{つぎみ}嚴^{じひ}之御魂^{みたま}天疎^{あまのそ}向津媛尊^{むすひめのみこと}



安 生 地 蔵

亀ヶ岡の清処に立ちて諸人を教へ育
くむ安生地蔵よ 王仁

——出口聖師筆／聖者の面影の内から——

といふ別称の大神である。この御神命を教祖の神論には総合的に頭の字一字を取つて撞の大神と仰せられたのであつて、けつして月界守護

の月の大神様のことでありませぬ。また五六七と書いて大本ではミロクと読んでゐる理由は、これも別に深遠な意義があるのではない。

ただ仏典に五十六億七千万年の後に弥勒が出現されるといふ文句の数字を殊さらに略して応用したに過ぎぬのであります。要するにミロクといふ言靈は仁愛といふことになるのであつて、天地万物の根元はみな天の御祖神の仁愛と、地の祖先の仁愛との大精神より創成されてゐるのである。皇道大本を仁愛の結晶にしたのは変性女子の御魂であつて、その根元を開かれたのが変性男子の身魂である。すなはち大國常立尊と稚姫君命と、惟神真道弥広大出口國直靈主命の三神一体の嚴の御魂の大活動であります。この神々の活動によりて地の高天原の基礎が開かれ、そこへ変性女子の御魂が現はれて皇道大本が光輝を放つことになつたのである。皇道大本は良の金神國常立尊が神政成就の神策地であつて、二代の教主が大地の金神禁闕要能神の身魂で嚴の御魂の御用と神定されたのである。ついで天のミロク様は神代の神誓神約を實行すべく地上に降臨し初代二代三代の補佐をなすべく、瑞の靈魂の宿つた変性女子の肉体をお使ひあそばして神界経綸の完成を期したまひつたのである。地系の神が主となり天系の神が国祖の神業を補佐したまふのも『天の神様地に降りて今度の二度目の天の岩戸開きのお手伝をあそばすぞよ。地の神上へあがりて一たんは守護いたすぞよ』との神諭の一分の実現であります。

（「神靈界」大正9年1月15日号入随筆V24〜25頁）

六六六の大神・五六七の大神

この地の世界の初りは世界一体に泥海であつて、光りも温みも何ものもなかりたぞよ。てふど譬へていへばおぼろ月夜の二三層倍も暗い冷たい世界で、山も河も草木も何一種なかつたのであるぞよ。その泥の世界に身のたけは五百丈ばかり、身の太さは三百丈ほどもある蛇体の荒神が住居してをられたのが、御精神のよい大神様の前身で、これが五六七の大神様とおなりあそばしたのであるぞよ。誠にのどやかな御神姿で、鱗は一枚もなし、角も一本もなし、体の色は青水晶のやうな立派な神様で、天地の元の祖神となられたのであるぞよ。この世を創造して、天地を開くことに非常に苦心あそばしましたのが、この大神様が第一番で、ミロク大神ともツキ大神とも申し上げる御神様であるぞよ。世界を造るについて非常に独神で御心配をあそばしてござるとこへ、同じく似たやうな御神姿の大蛇神が現はれたが、この神には十六本の頭に角が生えて、その角の先から大変な光りが現はれてをる神様に、六六六の大神様が世界創造の御相談をおかけになつたのであるぞよ。さてその時の六六六の大神様の言葉には、いつまでこうして泥の世界の暗い所に住居をいたしてをつても、何一つの楽しみもなし、何の功能もなし、たくさん巻属もあることとなり、何とかいたして立派な天地を造りあげ、万の眷属の楽しく暮らすやうに致したいのが、我の大望であるが、そなた様は私の片腕となりて天地を立て別け、美はしき地上の世界を造るお心は有りませぬかと尋ねあそばしたら、日の大神の前身なる頭に十六本の光る角を生やした大蛇神様がお答には、我身は女体のことなり、かつまたこんな業の深い見苦しき

姿でありますから、あなた様のような御精神のよい、立派な神様の片腕に成るといふことは、恐れ入りてお言葉に従ふことが出来ませぬと大変にへりくだつて御辞退あそばしたなれど、六六六の大神様が強いとお頼みになり、私の片腕になるのはそなた様より外にない、我が見込んでゐるからとの仰せに、日の大神様も左様なれば御本望の遂ぐるまで我身の力一ぱい活動いたしてみます、さる代りに天地が立派に出来あがりましたら、我を末代あなた様の女房役といたして下され、私は女房役となりて万古末代世界を照らします、との御約束が地の高天原の竜宮館で結ばれたのでありたぞよ。そこへ良の金神の前身国常立尊の荒神が現はれて、世界を造りあそばすお手伝を命じて下されとお願い申し上げたのでありたぞよ。そこで六六六の大神様が早速に御承知くだされて仰せあそばすには、その方は見かけによらぬ誠忠無比の神であるから世界の一切をまかすから、落度のなきやうに致すがよろうと仰せられ、そのうへに国常立之命に思兼の神と申す御名を下され、八百万の神様を天の山河澄の川原に集めて一人の眷属も残さず相談の中間へ入れて大集會をあそばしたので、地のある限りに住居いたしてをれる蛇体の神々様が集まり合ふて御協議のうへ、六六六様の仰せのとほりに国常立之命を総体の局に選み下さしたのであるぞよ。

そこで八百万の神々の意見を聞き取りて、その由を五六七の大神様へ申し上げたら、日の大神伊邪那岐之尊様と月の大神五六七様との御武体の大神様がさらに集會あそばして、国常立之尊を地の造り主と致すぞよとの御命令が下りたので、この方が地の主宰となりて多陀与幣流地面を修理固成いたしたのであるぞよ。天も水（六）中界も水（六）下界も水（六）で世界中の天地中界三才が水（六）ばかりでありた世

に一番の大神様の御位でお出であそばしたので六（水）を三つ合わせてミロクの大神と申のであるが、天の水の（六）の中から、の一靈が地に下りて五（火）と天が固まり地の六（水）に、の一靈が加はりて地は七（地成）となりたから、世の元から申せばミロクは六六六なり今の世の立直しの御用から申せばミロクは五六七と成るのであるから六百六十六の守護は今までのミロクで、これからのミロクの御働きは五六七となるのであるぞよ。国常立之尊が世の元を修理固成するについて、天地中界の区別もなく、世界は一団の泥土泥水で手のつけやうなかりたので、堅いお土の種をミロクの大神様にお願ひ申し上げたら、大神様がすぐに御承知になりて一生懸命に息を吹き懸けなされて一凝りの堅いお土が出来たのを国常立之尊のこの方にお授けになりましたのでその一団の御土を種にいたして土と水とを立て別け、山、川、原、野海をこしらえたのが地の先祖の国常立之尊であるぞよ。

（「神霊界」大正8年3月1日号9頁）

神世開基と神息統合

神界においては国常立尊が厳の御魂と顕現され、神政発揚直の御魂変性男子を機関とし、豊雲野尊は神息統合の御魂を機関とし、地の高天原より三千世界を修理固成せむために竜宮館に現はれたまうた。

（中略）

《附言》神世開基と神息統合は世界の東北に再現さるべき運命にあるのは、太古よりの神界の御経緯である。

天に王星の顕はれ、地上の学者智者の驚歎する時こそ、天国の政治

の地上に移され、仁愛神政の世に近づいた時なので、これがいはゆる三千世界の立替へ立直しの開始である。

ヨハネの御魂は仁愛神政の根本神であり、また地上創設の太元神であるから、キリストの御魂に勝ること天地の間隔がある。ヨハネがヨルダン河の上流の野に叫びし神声は、ヨハネの現人としての謙遜辞であつて、決して真の聖意ではない。国常立尊が自己を卑うし、他を尊ぶの謙讓的聖旨に出でられたまでである。

ヨハネは水をもつて洗礼を施し、キリストは火をもつて洗礼を施すとの神旨は、月の神の靈威を発揮して三界を救ふの意である。キリストは火をもつて洗礼を施すとあるは、物質文明の極点に達したる邪惡世界を焼尽し、改造するの天職である。

要するにヨハネは神界、幽界の修理固成の神業には、月の精なる水を以てせられ、キリストは世界の改造にあたり、火すなはち靈をもつて神業に参加したまふのである。故にキリストは、かへつてヨハネの下駄を直すにも足らぬものである。ヨハネは神界、幽界の改造のために聖苦を嘗められ、キリストは世界の人心改造のために身を犠牲に供し、万人に代つて千座の置戸を負ひて、聖苦を嘗めたまふ因縁が具はつてをられるのである。これは神界において自分が目撃したところの物語である。

そしてヨハネの敵の御魂は三界を修理固成された曉において五六七大神と顕現され、キリストは五六七神政の神業に奉仕さるるものである。故にキリストは世界の精神上の表面にたちて活動し、裏面においてヨハネはキリストの聖体を保護しつつ神世を招来したまふのである。

(「靈界物語」第1巻第24章)

神界・現界の建替え

(前略)

ここにおいて、天上にまします至仁至愛の大神は、このままにては神界、現界、幽界も、共に破滅淪亡の外はないと觀察したまひ、ふたたび国常立尊をお召出し遊ばされ、神界および現界の建替を委任し給ふことになつた。さうして、坤之金神をはじめ、金勝要神、竜宮乙姫、日出神が、この大神業を輔佐し奉ることになり、残らずの金神すなはち天狗たちは、おのおの分担に従つて御活動申し上げ、白狐は下郎の役として、それぞれ神務に参加することになつた。ここにおいて天津神の嫡流におかせられても、木花咲耶姫命と彦火々出見命は、事態容易ならずと見たまひ、国常立尊の神業を御手伝ひ遊ばすこととなり、正神界の御経綸は着々その歩を進め給ひつたのである。それと共にそれぞれ因縁ある身魂はすべて地の高天原に集まり、神界の修行に参加し、御経綸の端なりとも奉仕さるることになつてをるのである。

(後略)

(「靈界物語」第1巻第18章102頁)

みろくさまのおちすじ

世の立替え立直しをいたして天のみろくさまと、日の大神、天照皇

大正四年旧四月二日

大神宮どのおん目にかけて、二どめの世の立替えをいたしたら、末代世を続かせねばならんのであるぞよ。

このさきの世は、天からは根本のひろくさまが末代の代をお構いになるなり、地の世界の先祖の国常立尊が、お土のあるだけは末代構わねばならん世がまわりてきたのであるぞよ。

天のご先祖さまはひろくさまであるぞよ。地の世界の先祖がひろくさまのおちすじであるぞよ。変性男子の身魂がちすじであるぞよ。変性女子の身魂もちすじであるぞよ。ちすじがひろくさまのおちすじでない、こんどの二どめの世の立替えの直の御用はできんぞよ。初発

に変性男子の身魂があらわれて、良の金神があらわれて、世のもとの国常立尊があらわれてこんとひろくさまがお出ましにならんぞよ。さるかわりにひろくさまがお出ましになりなされて、変性女子があらわれたなら世界はいちどに動くぞよ。

世のもとの根本の天のご先祖さまの直々のおちすじの性来と、地の先祖のおちすじとの性来が、ひのもとのやまと魂であるぞよ。

戦争ばかりで立替えができるように人民は思っておるなれど、そんな小さい事でないぞよ。守護神が大きな取りちがいをしておるから、人民がわからんのであるぞよ。



ミロクの神の別称

宇宙最高最尊の「みろ九のかみ」の御活動は宇宙一切の神界、現界、幽界にゆきわたっている。神名は活動の異名であるために「ミロクの大神」は最も多くの別称、異名を持つ。小松林命、素盞鳴尊、坤の金神、五六七の神をはじめとして、大本文献の上に百をこえる神名、仏名等があらわれているわけである。

○

神靈活動の異名

天之御中主大神、天照大神、豊雲野大神、伊邪那岐大神、伊邪那美大神等の傍訓に、ミロクの大神とあるは如何との質問が時々ありますが、すべて皇典に現われたる御神名は、みな神靈の活動の異名でありまして、ミロクは仁愛ということであり、世界万類を安らげく平らけく歛はせ、万世不易の神国を成就せしめ給ふ神々の活動を指すのでありますから、大本の真正の役員信者にして、神政成就のために心身を投じている人は、みなミロクの神の活動者であります。

(「神靈界」大正8年8月1日号)

久方の天津御国の真相を世に伝へたる聖老子かな・王仁自讃
聖老子／出口聖師筆

未申の金神・素盞鳴尊・小松林命

大正五年旧九月九日

五五七神様の霊はみな上島へ落ちてをられて、未申の金神どの、素盞鳴尊そののむねとと小松林の霊が、五六七神の御霊で、結構な御用がさしてあらたぞよ。

ミロク様が根本の天の御先祖様であるぞよ。国常立尊くにとだちのみことは地の先祖であるぞよ。

二度目の世の立替については、天地の先祖がこれまでの苦勞をいたさんと、物事成就いたさむから、永いあいだ皆を苦勞させたけれど、ここまでに世界中が混乱なことが、世の元からよくわかりてをりての経緯でありたぞよ。

天地の開ける時節がまいりて来たから、守護神に改心ができんと、人民には判りかけが致さんから、変性男子が現はれて、世界の実地を分けて見せるなり、次に変性女子が現はれると、ビックリをいたして世界中が一度の改心をいたさなうやうな神事があるから、改心が一等ぞよ。

今度上嶋へひしほ坤の金神の身魂が御参りになりたについて、変性女子の御苦勞な御用の事実をあらはすぞよ。

変性女子が現はれると、坤の金神どのの神力が出るから、誠の心で願へば何事でも直ぐに聞き済みあるぞよ。

天の御先祖様が世に落ちてお出でましたゆへ、地の世界の先祖も、世に落ちてをりたから、世界中が暗黒同様になりてしもふて、この世

の立替いたすのには、なかなか骨が折れるなれど、なにかの時節がまゐりたから、これから変性女子の身魂を表に出して、実地の経緯を成就いたさして、三千世界の総方様へ御目にかけるが近よりたぞよ。

出口直八十一歳の時の筆記。

○ 「神霊界」大正9年1月1日号7頁

弥勒大聖御稜威の神

神仏無量寿經

第一神王伊都能売の大神の大威徳と大光明は最尊最貴にして諸神の光明の及ぶところにあらず。或ひは神光の百神の世界或ひは万神の世界を照明するあり。要するに東方日出の神域を照らし、南西北、四維上下も亦復かくの如し。ア、盛んなるかな、伊都能売と顯現したまふ嚴瑞二靈の大靈光、この故に天之御中主大神、大國常立大神、天照皇大神、伊都能売の大神、弥勒大聖御稜威の神、大本大神、阿弥陀仏、無礙光如来、超日月光仏と尊称し奉る。

(後略)

○ 「靈界物語」第67巻第5章59頁

三界の救世主五六七神の帰神

金助は忽ち神がかり状態となり、四角ばった肩を、なだらかに地蔵肩のやうにしてしまひ、容貌も何となく美しく一種の威嚴をおび、断れぎれに口を切つた。六人は、

『ハテ不思議』

と穴の開くほど、金助の顔を打ち眺めて、何を言ふかと聴耳立てた。

金助は口をモガモガさせながら、

『天上天下唯我独尊』

と叫んだ。カナンボールは、

『オイ金助、ちと確りせぬかい。たかが知れた魔谷ヶ岳の山賊上がりのバラモン信者の身をもつて、天上天下唯我独尊もあつたものかい。三十余年未来の印度に生まれた釈尊が運上取りに来るぞ。ハア困つた氣違ひができたものだ。オイ銀公、清泉の水でも掬うてきて顔は打つかけてやれ。まだ目が覚めぬとみえるワイ』

(中略)

金助『この世は夢の浮世だ、諸行無常、是生滅法、生滅滅已、寂滅為樂、如是我聞、つらつら惟るに宇宙に独一の真神あり、之を称して国祖・国常立尊と曰ふ。汝一切の衆生、わが金言玉辭を聴聞せよ。南無無尽意菩薩の境地に立ち、三界の理法を説示する妙音菩薩が善言美詞ゆめゆめ疑ふなかれ。風は自然の音楽を奏し、宇宙万有惟神にして舞踏す。天地間一物として真ならざるはなし。惟神靈幸倍坐世、帰命頂礼。天上三体の神人の前に赤心を捧げ、心身を清淨潔白にして幽玄微妙の真理を聴聞せよ。我は三界に通ずる宇宙の開門普賢聖至の再来、今は最勝妙如来、三十三相顕現して觀自在天となり、阿弥陀如来の分身・閻魔大王地藏尊、神息総統・弥勒最勝妙如来と顕現す。微妙の教旨古今を絶し、東西を貫ぬく。穴かしこ、穴かしこ、ウンウン』

と云つたきり身体を二三尺空中に巻き揚げ、得も言はれぬ美しき雲に包まれ、山上目がけて上り行く。その審しさにスマート、カナンその

他四人は後見届けむと尻ひとつからげ、荆棘茂る谷道に脚を引つ掻きながら、山の頂指して登りゆく。六人は鷹鳥山の頂に登り着いた。

金助は忽ち黄金像となり、紫磨黄金の膚美しく、葡萄の冠を戴きながら、咲き乱れたる五色の花の上に安坐してゐた。

(中略)

金の像『貴様らは執着心のもつとも旺盛な奴輩ぢや。この金助が化体の一部たりとも動かせるものなら動かして見よ。宇宙の開門・最勝妙如来が坐禪の姿勢、本来無一物、色即是空、空即是色、一念三千・一念の宇宙の理法を知らざるか。娑婆の亡者ども、吾こそは今までの匹夫の肉体を有する金助に非ず、紫磨黄金の膚と化したる三界の救世主であるぞよ』

カナン『ヤーいよいよ怪しくなつてきた。訳の分からぬことを言ひ出したぞ。オイ金助、モット俺たちの耳にもわかるやうに言つて呉れ』

『宇宙一切、可解不可解、凡耳不徹底、凡眼不可視』

『ますます訳の分からないことを云ふぢやないか。オイ金州、しやれない。貴様はなせ元の金助に還元せないのだ。何ほど貴い黄金像になつてみたところで、身体が利かねば仕方がないぢやないか』

『如不動即動是、如不言即言是、如不聴即聴是、頭幽一貫善惡不二表裏一体、即身即仏即凡夫』

『ますます分からぬことを言ひやがる。オイこんな代物にお相手をしてゐたら、莫迦にしられるぞ。モー帰らうぢやないか』

救世主義

伊都能売(二)

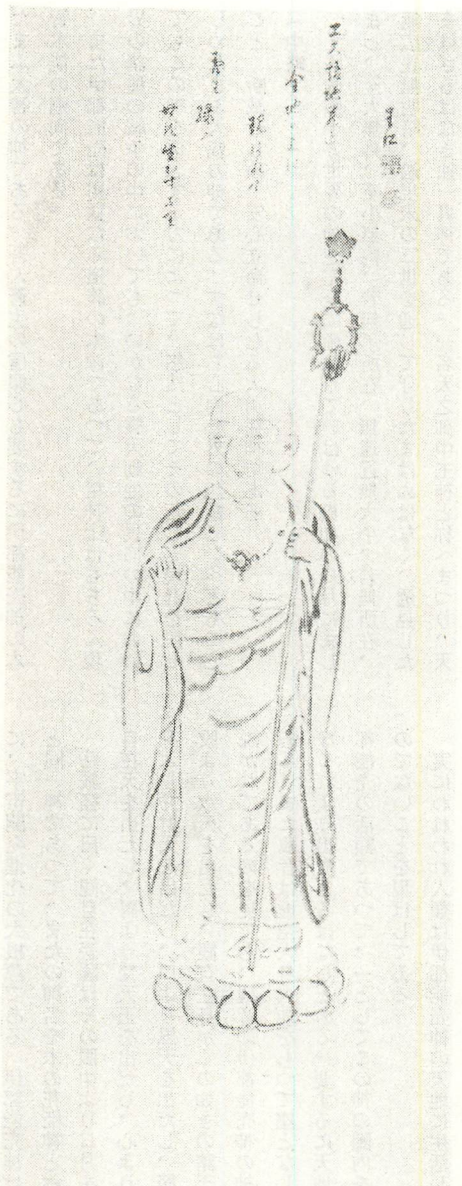
瑞 靈 真 如

伊都能売神は慈愛の本源であつて、いかなる罪悪者をも救済して一人ももらさない絶対無限の慈悲の神である。精神界はもちろん現界における人間一切の苦悩を払い清めて天国にみちびき玉ふ愛善神であつて、その愛善たるや絶対無限である。ゆゑに既成宗教の唱ふることき審判的思想は全然ないのである。善悪を超越しかつ審判思想を打破する大愛大善大慈悲神であつて、一人といへども蒼生の滅亡するのを忍

ぶことのできぬ愛の生神である。しかして霊肉の調和についても難行苦行の修行を経過せず、信仰と歓喜との内に実現せしめんとする真の絶対愛に住する神である。

悪人を悪人として罰し、善人を善人として賞するはこれ現実界すなはち自然界の人為的法則であつて、愛善そのものとは非常に遠いものである。罪惡に苦しみ、痛み、憂吉に沈んでゐる蒼生はよろしく大本大神即伊都能売の神を信仰すれば、優^{やさ}寛^{かん}しき慈顔を向け、温かき御手に罪を負つて救つてくれる神である。

伊都能売神はまた智慧の源泉であるから、人々が悔悟してこの神を念願し、至誠心よりの信仰が胸中に紅潮して來たなれば、いかなる愚痴の境涯も転じて聖智聖慧に到達せしめ、転迷悔悟の花の光明を授け



エス語地藏

エス語地藏と全地の上に現はれて吾は緑に世を生かすなり 王仁

—出口聖師筆／聖者の面影の内から—

たまふ大智の神である。吾人蒼生の信仰心も要するに伊都能売神の本智本能の廻向である。

また伊都能売は勇猛なる道義の本源であつて、精神上はもちろん現界の諸種の戦争の中においても、いかなる震天動地の畏怖の中においてもこの神を信念する力によつて、悠然としてその苦しみ境涯を脱せしめたまふ大威力神である。すなはち心内外の怨敵といへどもことごとく断滅せしめ、安心立命せしむる大勇猛神である。

(中略)

光明遍照十方世界の神徳完全に備はりていはゆる真如の日月にましまし、至大無外、至小無内、若無不在、無遠近無大小、若無所在、無広狭無明暗、過現末の三世を通じて守りたまはぬはなく、透見したまはざるはなき独一真神である。一名天之御中主神と称へまつり、天地創造の大元霊神であつて、天地修斎の為に人体と現じ、ここに万世不動の松の神代を創立し、蒼生を安養浄土に救ひたまふ神である。

伊都能売神は吾人と如何なる関係にあるかといふに、すべてのものの真実の父母である。本有無作、宇宙普遍、応現自在にしてその体において、その神性において、吾人々類と寸毫も差のなきところの本体である。伊都能売神と人類その他一切は一如であり、二にして不二である。相用上から見れば差違はあるが、しかも絶対不離の関係であつて、宗教上からいふなれば親子の間柄である。

この天地宇宙は伊都能売神が活動の舞台であつて、一切の蒼生、一切の万物はこの智慧の本体、慈悲の本体、道義の本体なるこの神の生成化育したまふところである。

伊都能売神はその大清浄の大願力の上に輝き来たる神であると共

に、宇宙開発進化の大根源である。伊都能売神は仏者のいはゆる観音と同一神であつて、またの御名を木の花姫神と称え奉つてゐる。

莊嚴經に曰く観自在菩薩はその眼中より日月を出だし、額中より大自在天を出だし、肩より梵天王を出だし、心より那羅延天を出だし、身より弁財天を出だし、口より風天を出だし、臍より地天を出だし、股より水天を出だし、観自在身かくの如きの諸天を出だすと神話的に説かれてあるのを見ても、観音即伊都能売神の神格は推知されるのである。また観音は虚空大身大地をもつて座となし、境涯および有情みなこれより出でざるはなしとある。要するに天地宇宙一切が観音即伊都能売の活躍であつて、一としてこの神の圏内を脱しては存在するものでないことを現はしてゐる。

実にわれわれ人類は伊都能売神の天地に生活し、長養せられつつあるのである。また伊都能売神は吾人精神界の大地であつて、われわれはこの大地を離れては一刻も安住することの出来ない活ける一箇の常磐木である菩提樹である。

また伊都能売は宇宙精神界の太陽である。光明遍照十方世界の神徳に浴さずには、一時間といへども存在することのできぬ菩提樹である。また宇宙の大能力であり、無量無礙の慈悲、愛善、智慧、証覚、道義の大円霊体であつて、この大円霊体こそわれわれ人類の眞の親であることは当然である。

某々宗教の所談のごとく、一切の衆生なるものは神の命令によりて忽然として創造されしものでなくして、すべてはみなこの伊都能売神の懷から出生したもので、木の花姫そのものの顕現である。すなはち一体不二、親子の関係ももつてゐる。

観音經にある五観五音なるものは一切衆生と親子一如の意義を表現するもので、五音とは、妙音、観世音、梵音、海潮音、勝彼世間音のことであり、五観とは真観、清浄観、广大智慧観、悲観、慈観のことである。

今これを神道の神名に对照すれば

五 音

妙音	市杵嶋姫命
世音	木花咲耶姫命
梵音	多紀理姫命
海潮音	玉依姫命
勝彼世間音	多紀津姫命
一名伊都能売神	瑞の御魂
観音即木の花姫神	

五 観

豊受大神	天神の祖
受	地神の祖
天照大神	厳の御魂

真観	正哉吾勝々速日天忍穗耳命
清浄観	天之菩日命
广大智慧観	能野樟日命
悲観	天津彦根命
慈観	活津彦根命

厳の御魂五柱、瑞の御魂三柱（又は五柱）の活動力を総称して、伊都能売の御魂と奉称するのである。しかして伊都能売はすなはち観音にして木の花姫の顕現である。天地宇宙の間にこの神よりほかに何もものないといつてもよいからである。ある時は天神となり、地神と現じ、八百万の天使と変じ、千変万化五六七の活動をなしたまひ、宇内を光被し、開発し、整理し、天国靈国に日月神と化現したまふはみな伊都能売神の大神格の活動である。

（「神の国」大正15年9月号9頁）

五六七様の代

（前略）

大正四年七月十二日

至仁至愛様の世になると、これまでのやり方は毫末も用ゐられん、太古の根本の神世に世がもどるのであるから、末法の世の守護神人民は辛くなるから、これまでのやり方は毫末も用ゐん世に変わるから、明治二十五年から、五六七様の世になるまでに、心魂の持ち方を改へてをりて下されと、これほど詳細徹底的判明するように書いて知らしてある通りに、われの心魂の状態の進ふ人は辛いぞよ。誠の心魂の真心の太古の根本の天地の至仁至愛大神様の教に改へてをる人は、何とした良い世に成りただらうと悦ぶなり、末法の世のやり方の、良い守護神に使はれてをる人民は、心情が違ふから、これまでのやり方は、もう、ちつとも用ゐん世に改はるから、これまでのやり方は体主靈従のやり方であるから、この先は至仁至愛大神様の教のやり方に改るから速う五六七様の教のやり方に改へてをりたら、大変楽にゆけるなれど毫末でも敵対う心情がありたら、ちつとも思ふように行けんのが世が変わるのであるぞよ。今が世の変わり目で辛いなれど、立替を致して後の立直しがなかなか大望であるなれど、立直しになりたら御用が楽にあるぞよ。立替いたすまでは、ちつとも気許しがならんから、抜き身の中に立ちてをるように思ふてをらんと、間隙を見て邪魔をいたそうと悪の方から考へ澄ましてをるから、貧乏動きもならんから、判からん身魂はさほどにないなれど、この方が昼夜にきびしき守護があるから

他人からは判らんなれど、直と直澄殿の肉体に大変感応^{こた}へて、食物は甘くなし、辛い目に会はせるなれど、他には補助さす身魂がない大聖なご用であるから、日に増に判るが近くなるから、あまり無理に心配をいたさんと御用して下されよ。変性女子の靈縁が判かりて来ると、世界の物事速うなりて、至仁至愛大神様の御神徳が現はれるから、ここまで信仰してをる人は結構さが、これから俄か信心いたす人は、なにかの事が遅延^{おそ}れて来るぞよ。この大本に來てをりても、太元の天地の先祖の、ここまで為て來てをることが、チト判かりてをらんと、真実の神徳はないぞよ。

(以下略)

(「神靈界」大正8年10月15日号10頁)

五六七如来の大作願

未

五六七如来の大作願

万有愛護の御誓ひ

愛善心をば成就せり

申

五六七如来の神号と

無明長夜の暗を破し

志願を充たせ給ふなり

(「靈界物語」第67巻第5章66頁)

安養世界の建設

子

暗黒無明の現界を

神の慈光の極みなく

安養世界を建て玉ふ

丑

伊都能売靈魂の光には

充滿なしてその智証

天人地人を息ましむ

寅

顕神幽の三界の

蔽瑞二靈伊都能売の

大光明に喜悅せむ

(「靈界物語」第67巻第5章68頁)

三宝金神とへつゝい金神

〇

天の御先祖様が世の始まりのお水の御守護あそばしなされたミロク様が天の御先祖様で、つきの大神様で在りて、三宝金神^{ほうこんじん}として、へつゝい金神^{いこんじん}と、お竈の上に小さいお厨子で祭りである家もありたなれど、無い勝ちでありたぞよ。またこの火を御守護あそばすのが天の御三体の日の大神様であるぞよ。慈親金神と申して泉庭に祭るのには金神と申して形が祭りである家ばかりはなかりたぞよ。地震金神と申してあ

りたのが、世界中の御土を固めしめた地の先祖が大国常立尊であるぞよ。この三体の神が昼夜の守護いたさんことには、この世の息あるものが、ちよつとの間もこの世に生活安存ができんのであるが、そこまでのことの判りた守護神がないゆゑに、元の御先祖様が充分の苦勞艱

難、口惜し残念を隠忍^{こじん}りておいであそばしても何とも思へんのであるぞよ。

(以下略)

(「神靈界」大正8年12月1日号21頁)

日本史に現われたミロクの活動

大本教典と出口聖師のお話によれば、日本史の上から見たミロク神の活動は、物語に

「みろ九の神の御使、武内宿弥の代え身魂、小松林とあらわれて」と示された様に、小松林命すなわち出口聖師の前身が武内宿弥である。

景行天皇が吾御子でありながら、神なりと称讃された日本武尊は、瑞の身魂の分身的活動である。仏者の不動尊は瑞霊の分霊である日本武尊の活動そのものである。都から西南に流された菅原道真や鎮西八郎為朝も瑞の霊の分霊である。

また瑞霊大神は三ツの御魂として、信長、

秀吉、家康に神がかりして戦国の代を統一された。

南朝より三種の神器をうけて、日本を統一された後小松天皇はみろくの神の分霊小松林の霊であると、聖師は教えられた。

世界史の上では救世主の五六七の神、神樂義鳴大神は、釈迦、キリスト、達磨、孔子やマホメットと顕われて、世界の救済に活動された。

特に聖師の産土神「開化天皇」と穴太寺の本尊「観世音」は、聖師にゆかり深いのである。昭和二十四年八月八日に小幡神社の上田家で二代教主がお話しされるのには「先生

(聖師) が生まれられた時に、小幡神社の主上田さんが、世にも不思議なこともあるものじゃ、神さんと同じ子が生まれた、と驚き穴太寺の庵主穴穂さんも、世には不思議なことがあるものじゃ、観音さまとおなじ子供が生まれた、とおどろいたそうだが、先生が小幡神社の神様と生まれたり、観音さまと生まれたりしたんじゃ」と教えられた。聖師が

産土の神の形に生まれたる人の世にたつ年の初秋

と詠まれた通りに、出口聖師が、産土神の生まれ代りであることを明示されている。産土神開化天皇の氏子と生まれ、明治三十年に三大学則を産土神より授けられ、ついで開化天皇の高御座のあつた高熊山で、神人合一の妙境に入られたのも、全く因縁のしかしむるところであると考えられる。聖師は「自分は世界の各地にたびたび生まれた」と語られていた。

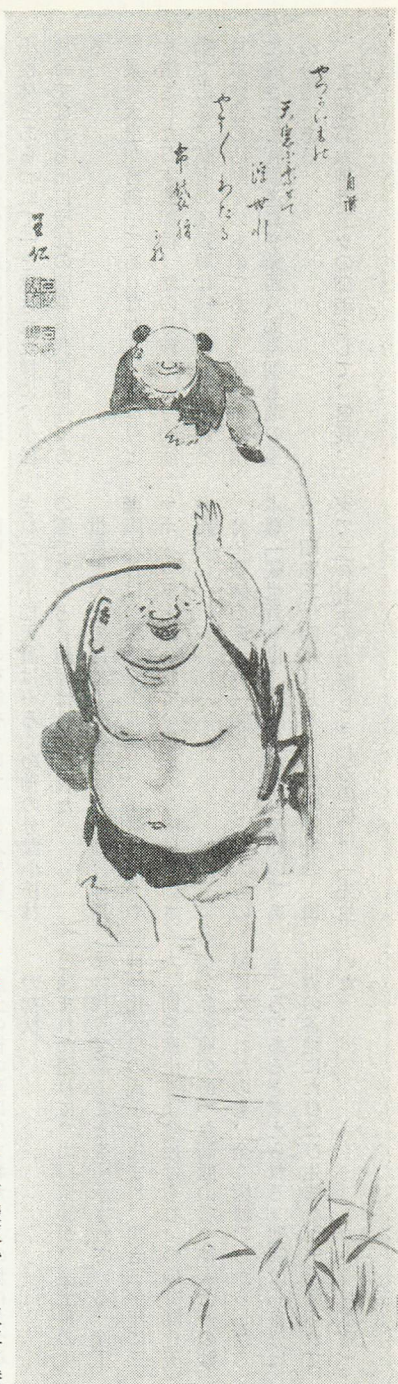
(木庭)

弥勒出現の時期と出口聖師

出口聖師は神山高熊山麓穴太の宮垣内にて弥勒の化生として明治四年旧七月十二日誕生された。人間的苦悩をなめつくされた二十八才の年明治三十一年二月、高熊山修行より、神界から顕幽両界のメシヤ（救世主）として神定められ火の洗礼を万民にほどこす神業に参加された。三十年間の霊的神業に奉仕されて満五十六才七カ月に達した時、昭和三年三月二日午前三時三十三分に御神命降り、三月三日にみろく大祭に仕えられて、これより弥勒如来の神格を一段おとして弥勒菩薩として現界の活動を開始された。

高熊山入山から三十年間は準備時代であって、みろく祭から、出口聖師は弥勒菩薩として本格的活動を開始されたのである。出口聖師はミロクの大神にます天の御三体の大神の化身として出生されたが、弥勒神政成就の準備のために和光同塵の態度を持して奉仕されていたが、

今日こそは五十六年七ヶ月五六七の神代みよの始めなりけりと戊辰の昭和三年三月三日から五六七の神代へ突入したとして、弥勒様の宮居・月宮殿を造営し、現実的の大活動に入られたので



やつかいもの天窓に乗せて浮世川やすやすわたる布袋腹かな・王仁自讃

布袋の川渡り／出口聖師筆

ある。それまでに弥勒胎藏經である靈界物語を口述發表され、苦集滅道の四聖諦を七十二卷(七十四冊)展開されていた。また五六七の大神の神靈を高砂沖の神島から迎えられ、大正十二年には杖立て御手代の神器を定め、瑞靈苑にては五六七神像を發見され、大正十三年の入蒙の壮舉は火の洗礼の世界的の実行であつて、世界宗教統一運動、人類愛善運動等々、神界經綸の準備をされていた。

『苦集滅道うまらに具らに論じたる人の子今は曲世に勝てり

三五の神の眞道を開きたるひとは五六七の化生なりけり

天地は肉体神を世に現じ人間界に交りて經綸す

伊都能壳の神と現れます人の子を神懸れると思ふ人間

人間の姿現じて世に出でし誠の人は神の顯現』

大本教旨の解説(神の国昭和三年七月号)にも『ヒトとは天地

間唯一の神留まり坐す肉体を称して、ヒトとこそ謂ふ』と、御自身が弥勒の神柱であることを明示されている。

この昭和三年三月三日の五十六才七カ月より六十六才六カ月

(昭和十三年旧二月十二日)にかけて、神界の經綸を完成される

ために、ミロクの兩聖地をはじめ靈場をさだめて建設されるのを

はじめとし、三十五万年前に龜山にたてられていた弥勒様のお宮

「月宮殿」を再建された。日本列島をはじめ韓国、中国まで巡教

の旅をつづけられ、靈的神業と經綸を実行された。弥勒胎藏經の

靈界物語八十一卷(八十三冊)を完成され、敷島の道を大成され

絵に書に、楽茶盃の神作を完成され芸術と宗教の一致をはかられ

た。ことに再度にわたる大本事件による贖罪主として、百二十六

日九十八日、六年八カ月を、また入蒙中にも投獄されるなど救世主として入年生活の聖苦をなめられた。

『神様は人の肉体宮となし人神となり世を救ひ行く

有りふれし神憑の如誤解して五六七の神を審かんとする

吾もまた生神の名は好まねど天地の經綸致し方なき

弥勒神胎藏經を説き行けば四方の国民攻め来るなり

弥勒神胎藏經を安々と世に説く靈界物語かな

五六七年いよいよ神と現はれて苦集滅道の大法を説く

只独り只吾れひとり天津神の御手代となり世を洗ふなり

天津神国津神たち始めとし所得しむる人は生神

神光を和らげ塵に同はりて神国のために尽し来しかな

今年まで和光同塵神策を用る来にけり御代の流れに

戊の辰の年こそ五六七神表に出づる時節なりけり

聖師は三十年間遠慮がちに自らの使命をのべられていたが、昭和三年七月には、自らが救世主弥勒の生神であることを率直に宣言されたのである。

弥勒出現の時期としては、釈迦の予言では「釈迦入滅後五十六

億七千万年後に弥勒下生して、苦集滅道を説き三界を照破し道法

礼節を開示す」とあるのに、釈迦入滅後二千五百年の昭和三年三

月に、弥勒が下生したのは如何との疑問がおこるからである。

大本神論に一貫して教えられたことは、末法万年(五十六億七

千万年)がつづけば、地球は亡びて、人類は絶滅するので、天の

ミロクの大神が末法万年を縮めて、地上に神国を成就されること

となり、神界からは予言者として出口開祖を降して弥勒の世の出

現と救世主の降臨を予言し、三界の救世主瑞靈大神を地の高天原に招致されて、その贖罪によって大三災、小三災をやわらげて地上に楽土をきずかれる経綸であると一貫して教示されている。

大石擬真素美翁は經文に五十六億七千万唎と書いてあるから「唎」は一呼吸のことであつて、ちやうど今日が釈迦入滅より五十六億七千万唎に到達していると主張したのである。

出口聖師は物語の中で示され、常に主張されていたが、天地剖判より起算して昭和三年戊辰年が五十六億七千万年経過した地球完成の時、ミロク出現の時であると教えられている。大石擬真翁は弥勒が神力を発揮するのは五十六才七カ月から七十才までと教えているが、聖師も『ともかく、大化物が満五十六年七ヶ月に成った暁を視て居れば良いのである』と大正八年七月二十六日、宣言されていたが、その時にあたる昭和三年三月二日に御神命が降ったのも、神約の動かぬ証拠である。聖師が五十六才七カ月から衆界経綸の完成を期して活動を開始され、治安維持法違反事件が無罪となった第二次大本事件の判決が降った昭和十七年七月三十一日は聖師の満七十才の時である。ここに経綸が完成したのであつて、その年の八月七日に聖師が保釈出所され、事件は解決したと語られた。大石擬真翁が弥勒如来の「大発智好期矣」と主張された証明となった。大本中矢田農園に帰られると聖師は『言うべきことも、することもなくなつた』と語られたのは、神界経綸の完成を教えられたのである。

昭和三年三月三日のひろく大祭は、弥勒の化身である出口聖師が三十年の神業奉仕によって神界経綸の準備が出来あがり、本格

的の活動、経綸の完成に着手される芽出たき祭典であつた。聖師が『万代の常夜の暗もあけはなれひろく三会の暁きよし』と歌われたのも、もつとの次第である。弥勒である聖師が弥勒の四聖諦の大説法会によりて、地上の人類はもとより神界の神霊をも済度される神徳や準備が揃つたことを意味している。

五十六億七千万年の謎

大正七年十二月二十三日
良の金神が永らく変性男子の手と口とで知らしてありた、五六七の世がまゐりたぞよ。釈迦が五十六億七千万年の後に、至仁至愛神の神政が来ると予言したのは、五六七と申すことであるぞよ。みな謎が掛けでありたのじやぞよ。五は天の数で火といふ意義であつて、火の字の端々に○を加へて五の○となる。火は大の字の形で梅の花、地球上の五大洲に象どる。六は地の数で水といふ意義であつて、水の字の端々に○を加へて六の○となる。火は人の立つ形で水は獸類の形であるぞよ。火は靈系、天系、君系、父系。水は体系、地系、臣系、母系であるぞよ。火は高御産巢日の神が初まり、水は神御産巢日の神が初まりで、火は力の声、水はミの声、これを合わしてカミと申すぞよ。七は地成の数で、土也成の意義であつて、土は十と一の集まりたもの、十は円満具足完全無欠両手揃ふことで、一は初めの意義であるぞよ。十は物の成就、一は世界統一、一人のことである。世の終いの世の初まりがミロクの世であるぞよ。また土は地球といふ意義で土なり、成ることである。火水地(かみづに)《神国》が五六七である五六七の世となる時は、

神国に住む日本の人民が五千六百七十万人となる。大本は時節まいりて五六七の御用をいたさず、変性女子の身魂に、大正五年五月五日辰の年午の月に、火水島の五六七の神を祭らせ、大正六年六月には肝川の竜神を高天原の竜宮館へ迎へ、大正七年七月には七十五日修行が仰せ付けてありたのも、みな神界の昔から定まりた経綸が実現してあるのじやぞよ。五六七の神政は大正五六七三ヶ年の間に、神界の仕組を現はし、また五年から七年までのあひだに、瑞の大神の神社八重垣ノ宮を三人兄弟の身魂に申しつけて成就したのも、神界から因縁のあることであるぞよ。結構なご用でありたぞよ。

五六七の世には、善きことも悪きことも一度に出てくるぞよ。独逸へ渡りた八頭八尾の守護神は、大きな世界の戦を始めたその間の日数が

千と五百六十七日、世界風邪に斃れる人民が、全世界で五百六十七万人であり五年にわたる大戦争中に戦死者重軽傷者死者がまた五千六百七十万人であろうがな。これが釈迦の申した五十六億七千万年といふ意義である。五六七を除いた後の十億千万年といふ意義は、万世一系天壤無窮の神皇をいただき、地球上に天津日嗣の天子一人ましまして神政を行なひ玉ふといふ謎でありたが、その謎の解ける時節が来たのであるぞよ。昔の神代の泥海のをりに、ミロクの大神様が地の先祖と成つた良の金神国常立之尊に御命令を下しあそばして、一たんは土と水とを立て別け、人民はじめ万物の育つやうに致したのであるが、今に充分悪神のために神国が成就いたしてをらんから、時節まゐりて良へ押し込められてをりた良の金神が、潰れてしもふ世を、天の御三体



日本武雄

もゆる火のほなかに立ちて邪鬼退ふ

日本武雄の不動の心よ

王仁

出口聖師筆／聖者の面影の内から

の大神様に御願ひ申して立直したいと思ふて、三千年の経綸をフタを開けて、明治二十五年から変性男子若姫君之尊の身魂に憑りて経綸をいたしてをれど、地の主護ばかりで、天地がそろはぬと成就いたさぬから、撞の大神様ミロク様が、肝心の世を治めあそばさず経綸となつたのを、五六七の世と申すのであるぞよ。ミロクの御用は撞の大神と現はれるまでは、泥に混みれて守護いたさならぬから、ミロクの御用の間は変性女子を化かしたり、化けさせて世の立直しを致さすから、女子は未だ未だ水晶の行狀ばかり命すことはできぬ、和光同塵の御用で辛い役であるぞよ。それで女子の身魂は未だ未だ内からも外からも、笑はれたり、怒られたり、攻められ苦しめられ、譏られ愛想を尽され疑はれ、云ふに云はれぬ辛抱もあり、悔しい残念を忍耐ねばならぬ、気の毒な御役であるぞよと女子の行狀を見て御蔭を落とす人民も、たくさんこれから出て来るぞよ。女子はこの世の乱れた行り方が命してあるぞよと申して、変性男子の手と口とで永らく気が付けて、三千年界の大化物じやと申してあろうがな。あまり浅い精神やら小さい身魂では、途中で分からぬやうになりて、逃げて帰ぬぞよと申してあろうがな。二十七年の間の筆先をよく調べてくたされたら、何一言も申すことはないぞよ。肝心の時になりて御蔭を墜して、間曳かかんやうに致してくたされと、毎度筆先で氣を付けてあろうがな。神はチツトも困らねどその人民がかあいさうなから、くれぐれも氣を付けておいたから、大本へ不足は申されんぞよ。

変性女子の身魂が五六七の御用を致してくださる時節がまいりたから、神界の経綸どほり、変性男子の身魂は若姫君の命と一つになりて天へ上り、天からは若姫君之命、地からは国常立尊、天地の間は出

口国直靈主命が守護いたして、大国常立命と現はれて、世の立替の大神掃除をいたすなり、地には変性女子の身魂が豊雲野命と現はれて、泥に浸りて三千世界の世を立直して、天下泰平、末永き松の世ミロクの神世といたして、撞の大神豊国主之尊と現はれる経綸であるから、今の人民には見当は取れぬぞよ。いつ神が女子の身魂をどこへ連れまゐるうやら知れぬから、何事をいたさずも神の経綸であるから、別条はないから、いつ姿が見えぬやうになりても神が守護いたしてをるから、役員の御方心配をいたさずに、めいめいの御用を致してをりてくだされよ。神が先に氣をつけておくぞよ。これから変性女子の身魂に五六七の神政の御用をいたさすについては、神界の経綸をいたさせねば、大望がをくれて間に合はぬことが出来いたしては、永らくの神界の仕組も水の泡になるよつて、秘密の守護をさせるから、そのつもりで落ちついてをりてくだされ。なかなか人民の思ふてをるやうなチヨロコイ経綸でないぞよ。末代動かぬ大望な仕組の苦勞の花の咲くのは、一と通りや二通りや五通りでは行かぬぞよ。山の谷々までも深い経綸であるから、誠の仕組を申したら、悪の守護神は大きな邪魔をいたすから、大正八年の節分が過ぎたら、変性女子を神が御用に連れまいるから、びくともせずに平生のとほり大本の中の御用を役員は勤めてをりてくだされよ。今までは誠の役員が揃はなんだから、女子の御用をさすところへは行かんだので、神界の経綸の御用が後れてをりたなれど、誠の熱心な役員が、そろふて御用を、大本の中と外とで致してくださるようになりて来たから、いよいよ女子の身魂を経綸の場所へ連れまいるぞよ。女子の誠実地の御用はこれからがはじまりであるぞよ。いつまで神が経綸の所へ連れ行きて、あとには禁闕要乃大神

この花咲耶姫命、彦火々出見尊の身魂が守護あそばすから、しばらくの間ぐらゐは別条はないから、安心いたして留守をしてをりてくだされよ。一度に開く梅の花、開いて散りて実を結ぶ御用に立てるは、変性女子の身魂の御用であるぞよ。変性男子の御魂の御用は、三千世界一度に開く梅の花の仕組なり、女子の御用は、三千世界一度に開く梅の花の開ひて散りてあとの実を結ばせ、スの種を育てて、世界一つに

まゐめて、天下は安穩に国土成就、万歳樂を来たさすための御用であるから、なかなか骨の折れる事業であるぞよ。これでも良の金神は、この身魂に守護いたして本望成就さして、三千世界の総方へ御眼にかけるから、何事を致しても細工は流々、仕上げを見て下され。水ももらさぬ仕組であるぞよ。たとへ大地が水中に沈むとも神の仕組は動かぬから、金剛力を出して持ち上げさせるぞよ。これが一番要めの大家な瑞の御魂の今度の御用であるぞよ。人民の智慧や学力では一つも見当の取れんことばかりであるぞよ。女子も今までは乱れた行り方がいたさしてありたからにわかに神が御用に使ふと申せば、多勢の中には疑ふ者もあるであらうなれど、神はにわかに手の掌を覆えて改心さして、誠の御用に立てるぞよと、永らく大出口直の手と口とで知らしめてありたことの、実地を致さず時節が来たのであるぞよ。この者と直でなければ実地の仕組の御用には連れ行かれんことであると申して、永らく筆先で知らしてありたことの、実地が出て来たのであるぞよ。大本はこれからはだんだん良くなるぞよ。氣使いになるぞよ。

(「神霊界」大正8年2月1日号13〜16頁)

五十六億七千万年

今年、すなわち昭和三年辰年は、この世初まつてから、五十六億七千万年目に相当する年である。

(「月鏡」一二〇頁)

みろく大祭の意義

御報告

三月一日夜、天恩郷神集殿において聖師様はお眠りになれず、つひに二日午前三時三十三分に至り御神命下り、聖師様はみろく菩薩として御出現になり、諸面諸菩薩を率ゐていよいよみろく御神業の現界的御活動をあそばすこととなりました。したがつて大本総裁、大本総務部主事、大本内事部主事、大本総務、大本天恩郷主事、同主事補、大本瑞祥会会長、同会長補、天声社社長、同社長補の職務、大宣伝使全員ならびに以上諸氏の宣伝使のお役をもお還し申し上げまして、三月三日の一日間は大本教主様のほかは聖師様をはじめとし以上の役職員は全部無役となりました。

三月四日ふたたび御神命により聖師様は親しく大本総裁、大本天恩郷主事、大本瑞祥会会長、天声社社長の職務をお執りくださることとなり、次に左のごとく御新任になりました。

大本 総裁 補

井上 留五郎

大本 総務部主事

岩田 久太郎

大本内事部主事

高木鉄男

大本天恩郷主事

御田村竜吉

同 主事補

大國以都雄

大本瑞祥会会長補

東尾吉雄

同会長補心得

橋本亮輔

天声社社長補

御田村竜吉

同社長補心得

瓜生潤吉

なほ以上諸氏の宣伝使、総務ならびに大宣伝使全員のお役をも従前通り御新任になりました。

すなはち聖師様は現界的に一段御神格をお下しになり、これらの職務をお執りくださることとなつたのでありまして、この点はまことに畏れおはいことであると同時に、御神業御発展の上からは結構なことで歡喜にたえないところであります。これがため内事部主事、総務部主事のほか前記のほか前記の諸氏も一段づつ職務がさがつたわけでありまして、このたびの御神事は特に重大なる意義のあることと拝察せられます。

ただし人類愛善会会長のみは聖師様がすでに同会総裁であつたために従前通りであつたのであります。

三月三日聖師様は至聖殿において御拝礼の後左の神歌を御朗吟あそばされました。

万代の常夜の暗もあけはなれ

みろく三会の暁きよし

昭和三年三月

大本瑞祥会

（「真如能光」昭和三年三月五日号8〜10頁）

みろく大祭概況

綾部に於ける祭事

三月三日（旧二月十二日）は聖師様満五十六才七ヶ月におなりあそばすこよなき吉日であつて、お筆先や物語によつてしばしこれを拝聴してはゐるがいよいよこの佳辰を目のあたり迎へては感慨無量なるものがある。

綾部では全国分所支部にあらかじめみろく祭挙行の通知をなし、御神苑、天王平のお掃除、神殿、神苑の設備、御神饌物、直会等の準備に忙しく、それぞれ役割を定め用意万端遺漏なきを期した。

前日から参拝者が三々五々詰めかける。三月二日夜の神殿には一斉に万燈、燈明が点ぜられ神々しさの極みであつた。

天王平の参拝

午前八時より天王平の参拝があるので定刻前に信者は奥津城に集まる。空はどんよりと曇つてゐるが、のどかな気分が神苑に満ちあふれ一昨日までは固く閉ぢてゐた苑内の梅の蕾も昨日よりにはかに開き初め今日は一度に満開のありさま。広庭一面に生ひ茂つた若松は緑こまやかに、あたかも今日の佳き日をことほぎまつるが如くであつた。

聖師様二代様、三代様日出磨様、寿賀磨様御夫婦、宇知磨様御夫婦、尚江様、住之江様は三台の自動車に御分乗、奥津城の麓におつきになり、それより聖師様、二代様にはお駕籠で社務所にお上りにな

り、御少憩ののち開祖様奥津城に御参拝、一同これに従ふ。

聖師様御先達にて神言奏上、ついで出口家のお墓に御参拝（一同これに従ふ）、社務所に御少憩の後ふたび自動車にて教主殿にお帰りになった。一同は引きつづき行なはれる至聖殿の祭典に列せんと天王平を引き揚げた。

至聖殿祭典

天王平から帰つて来た参拝者はみろく殿に詰めかける。節分大祝の後間もないことでもあり、近く祖霊社大祭、春季大祭をも控えてゐることとて、参拝者の多少は気遣はれてゐたが、この重大なる聖日の意義を理解したる熱心な信者は我も我もこの吉日を過ぎまつるべく参拝した結果、例年の春秋大祭以上の盛況で五六七殿もまたくうちに人をもつて埋められてしまつた。

聖師様は午前九時三十分ごろ二代様をはじめ、三代様日出鷹様、寿賀鷹様御夫婦、宇知鷹様御夫婦、尚江様、住之江様およびこの日特に御昇殿を許されたる井上留五郎、高木鉄男、岩田久太郎、御田村竜吉、東尾吉雄、湯川貫一、四方平蔵、梅田信之、中野武英、湯浅仁斎、出口慶太郎、桜井同仁、西村輝雄、栗原白嶺（以上十四名、次第不順）の諸氏を率ゐて至聖殿に御昇殿、御先達のもとに一同神言奏上、終つて聖師様には左の神歌を朗吟せられた。

万代の常夜の暗もあけはなれ

みろく三会の眺きよし

次で（至聖殿にて）御手づから御神饌物をお下げになり、まづ聖師様は日地月の三輪になぞらへ林檎を三つお取りになり、二代様には大根と頭薯かしもを、日出鷹様、寿賀鷹様、宇知鷹様に大根と頭薯を、前記

十四名の方々に頭薯を一つづつ御下げになった。これは意義深き御神事とつけたまはる。

右終つて一同御退出、信者一同にお神酒および直会のおこわ包みならびにお土より上りたる御神饌物をおさげ下さる。時に午前十時三十分、まだ十一時五十三分の発車までには余裕があつたが直会をみろく殿で開くだけの時間はないので思ひ思ひの処でいただいて汽車に間に合ふやうに綾部駅にむかつた。

綾部駅頭は大本の信者をもつて埋められ、歓喜に充てる人々を満載した汽車は威勢よく亀岡に向かつた。

天恩郷に於ける祭事

第一日三月三日（旧二月十二日）

ミロク大祭の佳き日、聖師様の満五十六歳七ヶ月に相当する限りなき芽出たき日、聖師様がミロク菩薩とお現はれになりミロク神業の現界的御活動を始めらるる吉日、天津神国津神相共によるこび祝ひたまふの日。天恩郷は早朝より十曜の神旗へんぼんとして高くかがやき、奉仕の人々もおのづから勇み立つをおぼえた。あたかもよし早朝櫻の雨は郷内くまもなく被ひきよめ、午前八時半頃よりは天津日はくわうくわうとして、天国の春を祝福するがごとし。アア天も晴れ、地も晴れ、心もまた晴れ晴れと晴れのみろくのこの大祭にふさわしい。

午後一時三十四分聖師様、二代様、日出鷹様はじめ出口家御一同様亀岡駅に御着、信者四百余名随伴。天恩郷の奉仕者一同御迎へをなす、聖師様、二代様方々には御機嫌うるはしく神集殿におはいりなつた。

小幡神社へ

聖師様は白装束を召されて午後三時十分日出鷹様、寿賀鷹様、宇知鷹様、八重野様、尚江様、住之江様および旧総務をしたがへられて小幡神社へと自動車を馳せらる。御一行は小幡神社にて御少憩の後、聖師様は上田社掌とともに御神前に進まれ、日出鷹様は御生母様と並ばれ一行とともに神言を奏上さる。

御生家へも御立ち寄りの上自動車をつらねて四時三十七分大祥殿前に御下車。

○

この時二代様には神集殿より聖師様と御同様白装束を召されて大祥殿へ御入殿、日出鷹様をはじめ出口家御一同様御昇殿、聖師様の御先達にて一同神言奏上。善言美詞の言霊は天地四方にひびき渡りてすがしさいはんかたなし。

礼拝後聖師様、二代様、日出鷹様、寿賀鷹様、宇知鷹様には御供への菓子果物を参拝者にまきわかれた。

一同はおう退場後宴席とこのへられてふたたび入場、ただちに直会は開かれた。ただし会場狹隘のため天恩郷奉仕者および在亀信者は任意の場所にて頂くこととなつた。今回も特に聖師様の思し召によりて直会後神集殿の拝観を許され、御守りとして御拇印を捺された御写真を下さる。こはかつて松江にて撮影せられたものにて時ならぬに梅樹の霊花満開せるものである。

明光社の冠句巻開

午後六時十分明光社第十九回冠句の開巻を行なふ。吟声は例によつて栗田花水宣伝使、相変らずの滑稽諧謔にて出席者を抱腹させ、一同

充分に天国気分になつたことができた。その後をうけて、同社第十四回月並和歌一家号拝受者一の開巻があつた、例によりて梅の家満壽香嬢の吟声しとやかによみ上げられた。

この日大祥殿に供へられた玉串料は五百六十七円であつた。五六七大祭にゆかりの数で何事も神様の御心のまにまにである。

第二日三月四日(旧二月十三日)

高熊山参拝

今回も前例により一同大祥殿前にてお祓ひを受け、午前八時頃より三々五々、本街道より小幡神社に向かふ。この日も天気清朗にて一点の雲影もない。二代様、日出鷹様、寿賀鷹様、宇知鷹様には十時前自動車にて御到着。ただちに二代様は上田社掌とともに御神前に進まれ一行とともに神言御奏上。それより二代様のお駕籠を先頭に御生母様のお駕籠とは奉仕者三十余名のかけ声勇ましくワッショワッショで山道を一気にかけ登つた。

霊山高熊山にては二代様の御先達にて神言奏上、終りて井上総裁補より今回のみろく大祭に關しての御報告(前号参照)ありてのち御供物をいただき昼食を喫し下山の途についた。

不思議はここにもあつた。登山参拝者は二代様を初め一同にて実に五百六十七人であつた。六百人分の小餅が三十三人分残つた。神意まことに畏しといふのはかはない。

御生家御神前にて二代様の御先達にて神言奏上、感激の念あふるるをおぼゆ。をはりて参拝者一同心のままに帰路についた。

かくの如くみろく大祭を芽出度く奉仕し得たるは実にありがたい極みである。

みろく大祭次第書

みろく祭の次第は真如能光第八十三号で広告致しましたが第八十四号附録で訂正、左の如く実施せられました。

◎新暦三月三日（旧二月十二日）

天王平奥津城参拝 午前八時

みろく殿祭典 奥津城参拝後引つづき

直 会 祭典後みろく殿にて

当日午前十一時五十三分綾部駅発亀岡へ―天恩郷へ着後、聖師様御一行だけ小幡神社へ御参拝、上田家へお立寄り―この間一般参拝者は天恩郷にてお帰りを待つ。

大祥殿祭典 聖師様御一行御帰郷後直に挙行

直 会 大祥殿祭典後

◎新暦三月四日

高熊山参拝（一般）午前九時 天恩郷出発

（「真如能光」昭和3年3月15日号8～17頁）

聖師歌日記

▲三月二日 神集殿・教主殿にて

四方の山霧に包まれ汽車の行く音のみ聞えて暖かき朝
吾居間の桜は漸く満開し春陽の気室に漂ふ
今日もまた裝飾屋来て吾居間の机の表を直してぞ行く
午後の二時過の汽車にて和衣の綾の聖地をさし帰り行く
春陽の気は南桑の村々に漂ひ乍ら白梅の咲く

白梅の咲き充つる見て九州の旅はなやかなりし風光を憶ふ
其昔行基菩薩の教へたる堀切桑酒軒を通りぬ

聖地詣でまめ人数多同車して三等室は賑しきかな

亀山の聖場立ちて八木の在翼を張れる鶴山を見る

園部駅来れば空氣暖かく雨バラバラと降り出しにけり

麦の畑青々として茂り合ひいよいよ野辺に春は来にけり

トンネルを三ツ四ツ潜り殿田駅来れば雨は晴れ渡りけり

樅と松用材木炭山の如積み重ねたる胡麻の駅かな

胡麻の駅下山和知を乗り越えて山家の駅に着けば空晴る

午後の四時綾部の駅に下車すれば信徒山と吾を迎へり

紙籬の様なスタイル西門にさらけ出して日出鷹出迎ふ

神苑の梅はいよいよ満開し妙なる香氣あたり包めり

五六七祭祝の為に各地方宣使信徒次々訪ひ来る

▲三月三日 神集殿にて

朝起きて見れば神苑風清くいと暖かに心地よきかな

今日こそは五十六年七ヶ月五六七の神代の始めなりけり

一切の教務を神に奉還し役員十八赤児とぞなる

諸方面諸菩薩率るみろく菩薩高天原に今日下生せり

大本の教祖の神の奥津城に五六七出現報告祭なす

山下に自動車待たせ駕籠に乗り奥津城さして詣でけるかな

駕籠の棒に肩を打たれて腹を立て棒駕籠共に焼捨てにけり

奥津城の報告祭も相済みて信徒一同五六七殿に入る

五六七殿奉告祭も無事済みてしばし休らひ西門発車す
ステーション来りて見れば構内をふさぎてまめ人垣を作れり

綾部駅乗り出し午前の十二時着吾の汽車は動き初めたり
亀岡の駅に來れば一時半まめ人数多垣作り待つ

天恩郷歸りて見れば空晴れて陽は麗かに神苑清けし
自動車を四台つらねて三人の俣と共に穴太に向ふ

産土の神の御前に五六七年生れし今日の幸を祈りぬ

大祥殿大前祭相濟みてまめ人と共に直會に坐す

明光社冠句と歌の巻開き梅の家と花水の吟声澄みたり

神集殿訪問信徒多くして小夜更くるまで人足絶えず

▲三月四日 神集殿にて

五六七祭報告せんと大本二代三鷹信徒五六七人詣つ

高熊の参拜無事に相濟ませ午後三時頃二代歸れり

今宵又大祥殿にて明光社和歌巻開きつとめけるかな

○ (「真如能光」昭和3年3月15日号215頁)

○ 現はれかけたミロク様

今やミロクの大神様は地平線上に現はれ給うて、早や肩のあたりまでを出されてゐるのである。腕のあたりまでお出ましにならねば、本当のお働きは出来ぬのである。腕は力の象徴である。

○ (「玉鏡」七九頁)

月宮殿は弥勒様のお宮

国依別「(前略)これでも五六七の世に成れば、このお宮は金光燦然

として闇を照らし、高天原の靈国にある月宮殿のやうになるのだ
が、なにはど結構な弥勒さまのお宮でも時を得ざればこんなものだ。信真の徳の失せたる世の中の姿が、遺憾なくこのお宮に写されてあるのだ。あに如何にせむやだ」

○ (「靈界物語」第21卷第3章八月休殿V76頁)

月の大神の宮殿月宮殿

(前略)大八洲彦命は二人に向ひ、

『ここは靈国一の名山、月照山と申します。この山は御存じの通り、実に平坦な場所でございます。これより私と奥へお進みになれば、月の大神様の宮殿なる月宮殿といふ立派な御殿がございます。サア、もう一足です、急ぎませう』

とまたもや急ぎ歩み出した。二人はやうやくにして、七宝をもつて飾られたる門の前に辿りついた。あまたの麗しき天人は、大八洲彦命の帰館を出で迎へ、音楽や歌をもつて歓迎の意を表するのであつた。大八洲彦命は諸天人に一々挨拶を返しながら、七つの門を潜つて邸内深く進み入る。二人は後に従ひ勢ひよく数多の天人に会釈しながら、月宮殿さして急ぎゆく。

大八洲彦命は二人を導き、殿内深く進み、あまたの天女に命じ、珍しき果実や酒などを饗応し、歌舞音曲を諸天人に奏せしめ、その旅情を慰めた。二人は感謝の涙に咽びつつ、大八洲彦の命のまにまに珍しき飲食を喫しつつ、口中に天津祝詞の奏上を怠らなかつた。奥殿より金色燦爛たる御衣を着し、麗しき容貌に得もいはいれぬ笑をたたへ、こ

の場に現はれたまうた大神は、最前紫微宮において、桃園の案内をされた西王母であつた。西王母の後ろには巨大なる月光が影のごとくつき従ひ輝いてゐた。大八洲彦命は恭しく頭を下げ、王母に向かひ

『お蔭によりまして、治国別、玉依別の兩人はやうやく天国の修業を果たしました。これ全く大神様の御恵と、兩人にかはり、厚く御礼申し上げます』

と恭しく奏上した。二人はハツとばかり頭を下げ、畏まりゐる。西王母は兩人の側近く進みたまひ、左手に治国別、右手に玉依別の手を固く握り、涙を落とさせたまひ、

『汝ら兩人、よく神命を重んじ天国靈国の巡見を全うせしよ。その熱誠は感賞するにあまりあり。汝ら二人はこれより天の八衢に向つて帰りゆけ。汝が教へ子、アーク、タールの兩人が、キツと迎へに来るであらう。さすれば、汝ら兩人は元の肉体に帰り、素盞鳴尊の神業に参加し得るであらう。名残は尽きざれど、これにて訣別するであらう』

と御声までも打ち湿り、振返り振返り奥殿指して帰りましたまふ。二人はハツと後ろ姿を伏し拝み、感慨無量の態であつた。大八洲彦命は兩人に向かひ、

『さらば、拙者はこれにてお別れ申さむ。神業のため随分御精勵あれ』

といひ捨て、またもや鮮麗なる光となつて、その姿を東天に隠した。

これより二人は祝詞を奉上ながら、中間天国を越え、下層天国をも乗り越え、神業に参加すべく、天の八衢を指して帰りゆく。

(大正二・一・一三 旧一一・一一・二七)

天 書

天書とは星のことである。天書を読めば来たるべき世の推移が分かる。今の世は星がだんだん下つた如く見ゆる、そして光を失つてゐる。人の心が正にそれである。星と人とは相對關係がある。だから有為の材の会合などの事を諸星集るといふのである。月宮殿の石畳は王仁が寝て空を眺め、天書の意を悟るためにあらかじめ造つておいたのだ。読む方法を教へよと言ふのか。それは六ヶ敷い。第六感、第七感以上の働く人でなくては分からね。人事上に起こつて来ることなどはみな天書に書いてあるから前から分かつてゐる。王仁はこの天書を読むことが一番楽しみだ。

(「玉鏡」八四頁)

弥勒三会の大説法

神は時機を考へ、弥勒を世に降し、全天界の一切をその腹中に胎藏せしめ、これを地上の万民に諭し、天国の福音を、完全に詳細に示させたまふ仁慈の御代が到来したのである。

(「靈界物語」第48卷 第12章〔西王母〕186頁)

西 王 母

大本の教によれば、天地剖判より五十六億七千万年の星霜を経た現代に宇宙創造の根本神であるミロクの大神が、全智全能をもって地上に降臨され、完全なミロクの神代を樹立されると教え、そのミロクの大神の生宮、化身こそは出口王仁三郎聖師と神定されている。

ミロクの大神の全智全能を発揮されて、地上天国を建設される次第は、霊界物語全巻に啓示されているが、謡曲言霊解「西王



歴史人物八玉依姫命／絹本着色（縦四尺六寸五分×横一尺三寸五分）

出口聖師揮毫

母」にはきわめて平易に要約されている。ことに霊界物語第四八巻第一二章西王母、第二三章月照山には、ミロクの大神にます瑞霊大神の最奥の天界（兜率天）における御神格と御経綸について述べられている。

出口聖師は中国の東方朔の話は大本出現の事であると教えられた。「九千年に一度みのるといふ桃を持ちて微笑む東方朔かな」と歌われて、大本に出現された天祖大神と国祖大神の大経綸（東

方の経綸は九千年（無限の年数）つづくと教えられた。聖師の神諭（大正八年一月二十七日）には、

『心の色は日月の、光に疑ふ尉と姥、鶴は千年亀万年、東邦朝の九千年……』

と、嚴瑞二柱の大神の経綸は稚姫君命にます大本開祖を神政開祖として九千年すなわち無限の年数つづくと示されている。

西王母の神役の出口聖師が三千年の御聖告により完成するミロクの経綸、神法、神策である桃の実を、地上の指導者に伝達される。ここで指導者たちが神理を運用して、ミロクの世、地上天国を具現することとなる。

謡曲言靈録

〔一〕西王母

西王母は、大和田建樹氏編纂の、謡曲通解には、天上の仙女であつて、三千年の桃実を君に捧ぐることを作つたのだと出てをるのである。おほもとつねいけい 大本言靈学の見地からみると、西王母は、陰を意味し、月、水、体、女、地等を意味するのである。要するに水の御魂、月の神、こんじん 金神、かみみ 神皇産靈神なぞの緯の地位にまします神さまである。

ワキ『有りがたや、三皇五帝の昔より、今この御代に至るまで、かかる聖主のためしはなし。地『その御威光は日のごとく。ワキ『その御心は海のごとく。地『豊に広き御恵み。ワキ『天に輝き地に満ちて、北辰の興する数々の、万天に廻る星のごとく、百官卿相雲

客や、千戸万戸の旗をなびかし銚を横たへ、四方の門辺にむらがりて、市をなし金銀珠玉、光を交へ、光明赫奕として、日夜の勝負見えざりけり、かかるためしは喜見城、その楽みも如何ならむ』

ワキ『有りがたや』空前絶後の慶事とか、数千年または数万年に一度あるか無いか知れぬやうな、吾人人類に対して結構なることの出来てきた時に用ふる言葉である。乞食が一碗の飯をもらつて礼を言つたり神様に幸福を願つて叶へていたり、軍人が金璫勲章を頂戴した時に発する感謝の辞なども、ありがたいに相違ないが、この段のありがたいといふ意義は、宇宙開闢以来、日本にも外国にも古来類例のないといふことの意味である。現界において未曾有の祥瑞が現はれたことに對して、感歎おくあたはざるの形容詞であつて、めつたにない、有難い、結構なことといふ意味である。

『三皇五帝の昔より』三皇五帝とは、支那の伏羲や神農や、黃帝の三時代と、少昊、顓頊、帝嚳、堯、舜の五代にして、実に天下泰平に治まつた太古の世のことであるが、わが神典の示し給ふところによれば、天之御中主神、高皇産靈神、神皇産靈神の造化三神を三皇といひ、これに蘆芽彦舅神、天之常立神を合して五帝といふのである。

『今この御代に至るまで、かかる聖主のためしはなし』宇宙開闢の太古より、今上の御代に至る数百万年のあひだに、國華發揚して、皇運りうりう、神威八紘にかがやきわたり、世界に神威皇徳の光被せる、聖明の君主の出でたまひたる祥瑞は、今上の御代よりほかにはなかつたとの祝辞である。

地『その御威光は日のごとく。ワキ『その御心は海のごとく。地『豊に広き御恵み。ワキ『天に輝き地に満ちて』

天津日嗣の主師親の三徳は、天津日の万有を光被したまふごとくに三千世界に照徹したまひて、その臣民を愛したまふ御聖慮は、広く深くして海洋のごとく、天界にも地上にも満ちあふれたる聖代の意味である。

『北辰の興ずる数々の、万天に廻る星のごとく云々』とは、天界一切の星が、北極星座に向かつて従ひ運転するがごとくに、群臣万民が仰いで聖主の徳になびき仕へ、天下無数の人家は、国旗を軒頭にかかげ、清風になびかせて、聖主の祥代を祝したまつり、仁慈無量の聖徳を慕ひて、朝廷四隅の門前に群集し、金銀珠玉珍宝をおのおの競うて、聖主におびたしく貢獻し、武器を納めて、至治泰平の瑞雲たなびきたり、光徳靈威昭々として、昼夜の区別なく、山野海河も清く明らかに、喜見城（天上の都）を地上に現出し、至楽至美至善の神代を招来せし、五六七の祥世を讃仰せる現象である。

二

桃李物ははず、下おのづから市をなし、貴賤交はり、ひまもなし。シテ『おもしろや四季折々の時を得て、草木国土おのづから、皆これ真如の花の色香、妙なる法の三つの心、潤ふ時や至りけむ三千年に咲く、花心の、をり知る春の、かざしとかや』

大本開祖は嚴の御魂の生宮として、地の高天原なる綾部本宮の聖地に現はれ、国祖の神業に参加したまひ、靈肉ともに千辛万苦をなめたまひ、明治廿五年の初春、梅香ふくいくとして四隣ににほふころ、惟神の神筆をふるひ給ひて『三千世界一度に開く梅の花、良の金神の世に成りたぞよ』と獅子吼され、大歡喜と大希望とをもつて出現され、三千年の辛苦の花の、開きそめたることを宣したまうた。以来筆に口

に世界の改造を絶叫し、救世主の出現を予示されたのは、桃李物いはず、おのづから徑をなすの、一大神人の現はれ來たることを、待たせ給うたのは、すなはちこの桃李の祥瑞であつたのである。桃は言靈字上、下に働く言靈であつて親心であり、子の心である。また水の座にして、天の手となり、世の芽出しとなり、数を寄せ数を集め、一切の本来となる意義があるのである。

李は、モモの精しく勝れたるものにして中に集まる言靈である。本末を一徹に貫き、八極を統べ八咫に伸び極まり、八極を統べ、真中真心結びの柱にして、玉の活用である。

三月三日は桃の節句であり、女の祝日である。三月は変性女子の肉体にして、すなはち瑞の御魂月の大神を意味し、三日は変性女子の御魂を意味するのである。まづ第一に、三千年の靈界経綸の梅の花なるヨハネの御魂現はれ、次に桃の花の御魂の現はれたのは、実に神界の深き御思召が実現したのである。貴賤老幼の区別なく、かくのごとき目出たき桃李の花実を四方の国から慕ひ集まり、別に宣伝もせず計画もなさざるに、自然に市をなす、金輪聖王の治めたまふ大御代は、春夏秋冬の季節も順調にして、四民こぞつて鼓腹撃壤し、国土山川草木にいたるまで、みなこれ真如実相の花の色香をたち、妙法華の三つの心の、天下にうるはふ時の來たりて、三千年を経て開きにはひ出づる桃の花ごころ。世人に媚びず、へつらはず、別に言語に発せざれども、人々その木蔭を慕ひ寄り來たること、皇道大本の神業におけるごとくである。いよいよ神政成就の時機到來を、天下の万民ごとく知得すべき時期となりて、瑞の御魂の真人を的とし、力として群集するを『をり知る春の、かざしとかや』といふのである。

|| 歌 ||

すべて歌は天地神明の心をやはらげ、人心を平かならしめ、万有を左右し、大三災小三災の支障を消滅せしむる権力がある。いかに天地の大神様といへども、日に三熱三寒の苦しみがありなざるのである。天国浄土極楽といつても、決して歓楽ばかりつづけてあそび暮らしてをるのではない。神は神としてのそれぞれの艱難もあり、苦悩もあるのである。しかるに俗人は、天国浄土とか極楽とかいへば、至喜至楽の遊園地のごとくに誤解してをるものばかりである。ゆゑに天地経綸の司宰者たる人間すなはち神の生宮の言霊の權威によりて、天地の神明も三熱三寒の苦しみをまぬがれたまふものである。いはんや善言美詞の祝詞や優雅にして高尚なる和歌の力においてをやである。

小野小町が和歌を詠じて雨を降らしたといふのも、みな言霊の妙用利生である。

三

『いざや君に捧げむ、いざいざ君に捧げむ、すべらぎの、その御心は普く、隙行く駒の法の道、千里の外までも上もなき、道に至りて明らけき、靈山会場の法の場合、広き教の真ある、君君たれば誰とも、いさみある世の心かな』

いよいよ芽出たき神の経綸の桃李の花実をば、天津日嗣の御料として、赤誠こめて捧げたてまつらむとの言霊である。皇大君の大御心は仁慈の大徳、顕幽両界にあまねく充満して、治国平天下安民の大道たる、皇祖の御遺訓は、隙行く駒のいとまさへなく、聖恩洪徳宇内にかがやき、至上至高の法の大道は、日月のごとく明らけく、靈山会場の法の場合に、諸神諸仏の集ひたまひて、惟神の大法を守護したまふ、鎮

護国家の大経綸を、至尊の大前に捧げたてまつる、天地神明の御聖慮を、うたはせられたのである。靈山会場とは、仏教真言宗の開山弘法大師は、紀州の高野山なりといひ、伝教大師は比叡山なりといひ、日蓮は身延山にありといひ、神道家は高天原なりといつてをる。昨年の初夏、真言宗の名僧丸山貫長師は綾部に来たり、本宮山にのぼり、四方青垣山をめぐるし、和知川の清流山下をおびのごとく流るるの風景を見て、おどろかれた。ああ高野山こそ靈山会場の蓮華台として宗祖弘法大師が選定しておかれたのだが、当山こそは、高野山にまさる靈山であつて、いはゆる蓮華台であり、地の高天原に相違ないと感歎されたことがある。つぎに宇治醍醐三宝院の僧侶が参綾して、本宮山のぼり、四方の山容風景を見て、丸山氏と同様のことを言つて感嘆したことがある。神論にも、綾部には地の高天原があると示されてある。かかる靈山会場の本宮山上に天津御祖の大神を奉斎し、八百万の神たちの集ひたまひて、天下国家を夜の守り、日の守りに護り幸ひ給ふは、じつに尊くありがたき、惟神なる広大無辺の皇祖皇宗の伝へたまひし大道であつて、真に天立君主の慈愛に懷き、天下万民たれ一人として、この聖代を心底より欣慕せざるものはないといふ意義である。

四

詞『如何に奏問申すべき事の候ふ。ワキ詞『奏問とは如何なる者ぞ。シテ『これは三千年に花咲き実なる桃花なるが、今この御代に至り花咲く事、ただこの君の御威徳なれば、仰ぎて捧げ参らせ候ふワキ』そも三千年に花咲くとは、如何さま是は聞き及びし、その西王母が園の桃か。シテ『中々にそれとも今は物いはじ。ワキ』され

ばこそそれぞ殊更名に負ふ花の。シテ『桃李物いはず。ワキ『春いくばくの年月を。シテ『送り迎へて。ワキ『この春は。地『三千年に、なるてふ桃の今年より、花咲く春にあふ事も、唯これ君の四方の恵み、あつき国土の千々の種、桃花の色ぞ妙なる』

詞『如何に奏問申すべき事の候ふ』とは、西王母の言葉である。三千年來養成されたる日本魂やまとたましいを發揮し、もつて聖主に、麻柱あさむすびの至誠を捧げたてまつらむとする、忠君愛国の士の一大團結をもつて、天壤無窮の皇運を扶翼し、大いに皇基を振起したてまつるべき、御神策を天上より、もたらし降りたれば、いづれの方法を持ちてか、万世一系天津日嗣の御許に、奏問せむとかとの神言である。ワキ詞『奏問とは如何なる者ぞ』これは、ワキの怪しみて、奏問の理由を糾問されたことである。シテ『これは三千年に花咲き実なる桃花なるが、今この御代に至り花咲く事云々』は、そこで西王母は答へて、これは遠き太古より植ゑつけられたる、至誠忠良の日本魂を具足せる、天皇の赤子の聖団にして、いよいよ今上きんじやうの聖代にあたりて、その至誠を發揮し、君国を泰山の安きに護りたてまつらむとする者の、あまた出現したことは、まったく仁慈無量の大君の神威と、聖徳の致すところであるから、天津神の大命を奉じて、地の聖場に降り来たり、神と人と合一して、もつて桃花の優美醇清なる、赤誠の士を御使奴ごしやうとして奉獻せむとの神意である。ワキ『そも三千年に花咲くとは、如何さま是は聞き及びし、その西王母が園の桃か』は、桃の花の咲き出では、皇基を擁護し、国土を修理したてまつるもの、現はれ来たるといふことは、いかにも今までに、幾たびとはなく聞いた神言である。しからば今捧げたてまつると、仰せらるるのは、はたして西王母が培養された神園の桃であると

か、と反問されたのである。シテ『中々にそれとも今は物いはず』西王母は不言実行の神使であるから、容易に実状を何人にも申さない。奏問すべきおん方に拝謁するまでは、言挙げせぬとの意である。

ワキ『さればこそそれぞ殊更名に負ふ花の』は、非常に西王母の言行に感心して、さればこそ、言行心一致の神使で、救世主の資格を有したまふ、さすがの西王母である。げに美はしく清らかなる、桃の名をおひたまふ、神使かなとこたへられた。このワキの人奏問をとり次ぐべき、高き位にある役人である。シテ『桃李物いはず』西王母は答へて、わが養成し来たりたる、あまたの赤誠者は、つねに不言実行を旨とし、もつて軽々しく大小事にむかつて、言語を弄せず、じつに感心なものである、との意を表示されたのである。そこで、ワキ『春いくばくの年月を』は幾ばくの春をへ、年月をかさねて、かくも立派に花の咲きしことよ、と感賞の体であつた。シテ『送り迎へて』は、それを西王母がさらに送り迎へてと、言葉を合はされたのである。送り迎へてといふのは、三千年を送つて来て、いよいよ今日は天運循環して、花咲きにはふ春を迎へて、奏問の時を得たりとの意義である。ワキ『この春は』今年の春は、いかなる芽出たいことの現はれしごと、感嘆の意を表したのである。地『三千年に、なるてふ桃の今年より云々』とあるは拾遺集躬恒の歌に、

三千年になるてふ桃の今年より花咲く春にあひにけるかな

とあるを作者のここに引きしならむか。三千年の千辛万苦の西王母が救世の願望成就の時到期いよいよその忠誠の、雲上高く達するに到りしも、ただこれ仁慈の大君の、天の下四方の国を、平らけく安らけく知召し守りたまふ大御恵みの発動にして、地球上各国土の諸民族は王

化によくし、上は治教明らかにして、下方民は皆おしなべて、風俗敦厚に進み、赤誠を上にささげて、臣民たるの職責を全うし、国土安く治まり、世に戦争なく、悪病なく、貧賤なく、暴風狂水大火なく、饑饉なく、万民の顔色ことにすぐれて美はしく愉快の色をたたへ、あたかも桃の花の、一度に満開したるがごとき、神妙不測の天国を招来すべき瑞兆である天国浄土の招来は、三千年をへて咲きにはふ、瑞の御魂の世に出てたまふによりて、完成さるることを窺知することが出来るのである。

五

ロンギ地『さては不思議や久堅の、天つ少女の目のあたり、姿を見るぞ不思議なる。シテ『疑ひの心な置きそ露の間に、宿るか袖の月の影、雲の上までその恵み、普き色にうつりきぬ。地『うつろふ物は世の中の、人の心の花ならぬ。シテ『身は天上の。地『楽しみに明けぬ暮れぬと送り迎ふ、年は経れど限りもなき、身の程も隔てなく、誠は我こそ西王母の、分身よ、まづ帰りにて花の実をもあらはさむと、天にぞ上りける、天にぞ上り給ひける』

ロンギ地『さては不思議や久堅の天つ少女の目のあたり、姿を見るぞ不思議なる』神界の御経綸の深遠にして不測なる、人心小智の窺知し得べからず、思はざる時、知らざる時、忽然として、青天の霹靂の如く天上の月球殿より、天使として、天津乙女の眼前に降り来たるを見ることの不可思議なる、いかなる神慮神策のおはしますぞと、すこしく疑雲につつまれ、呆然たるの形容である。

シテ『疑ひの心な置きそ露の間に』決して疑念を露ばかりもおくな。天上より神勅を奉じて、降り来たりし、瑞の御魂の神使であると

の証言である。

『宿るか袖の月の影』月は水面に影を宿し、露霜雪などに移る。これを風流に月が宿るとか、宿を借るとか称へるのであつて、宿るか袖の月の影とある月は、決して真の月球ではない。袖に宿るといふことは別に深き意味がふくまれてある。これを言霊学の上から略解すればソは、^ソを^ソを包^ソ裏^ソをるなり。心の本府^{ありふ}なり。神府なり。◎の質に染むなり。蒼空なり。身の家なり。

デは、大勇力なり。勤め遂ぐるなり。大造化力の号令官なり。克く忍び堪ゆるなり。既定なり。忍耐力の極なり。照り込みの極なり。眸を見て心を知るなり。

以上の二言霊を綜合解釈するときは、地上に出現したる救世主、一大真人の身魂の本能である。この身魂に、瑞の御魂の分霊分体の宿りたまふ状態を称して、宿るか袖の月の影といふのである。『雲の上までその恵み、普き色にうつりきぬ』久方の天津御空も、葦原の国もおしなべて、五六七の大神の、広き厚き深き恵みの、あまねく行きとどき照りわたりにて、美はしき三千年に咲きにはふなる、桃の花の色に感染し、上下億兆ごとく神心に立ち帰りにて、神の神子たる本分を尽すに至つた、泰平の御代の表徴である。

地『うつろふ物は世の中の、人の心の花ならぬ』

色見えて移ろふものは世の中の人の心の花にぞありける

といふ古今集の歌をひきて、ここに用ひしならむか。移るべきものは、人々の心にはふ花ばかりではない。月の影も移れば、神霊も移りたまふとの意義である。

シテ『身は天上の。地『楽しみに、明けぬ暮れぬと送り迎ふ』

『身は天上の』といふことは、天上にまします、月の大神の分身であるといふことを、言外に含ませたる名文である。明けぬとは、日輪すなはち天照大神、暮れぬとは、夜の食国^{つくくに}を知食す月輪を意味する、夜の守り日の守りに、天上天下一切万有を保護しつつ、多くの年月を経過せることであつて、朝に日を迎へ、夕に日を送り月を迎えて、天地を守護したまふといふ讃辞である。

『年は経れど限りもなき、身の程も隔てなく、誠は我こそ西王母の分身よ、まづ歸りて花の実（身）をもあらはさむと、天にぞ上りける、天にぞ上り給ひける』

三千年の永き歳月を、天上の尊き神様でありながら、地上に降つて地位をもちあへりみず、世界修翫のために身を舉^{ひこ}うして、人界に交はり、変性女子の活動をつづけ来たりし、天津少女^{あまつおとめ}こそは、その実際は、西王母すなはち月の大神、^{ひしこ}坤の金の大神の分霊分身に、おはしましたのであるとのことである。まづ元の神の座にかへつて、今までの桃の花の実のりたる、盛威神徳を現はさむものと仰せられて、ふたび元の任所なる、高天原の月宮殿に、上りたまつたといふことである。かかえて『天にぞ上り給ひける』と示されたのは、感謝おくたはずして、その神徳をくりかへしくりかへし讃称された意味である。瑞の御魂の変性女子は、三千年の辛苦艱難を世界のためになめられ、幾たびとなく天地に昇降させられたのであるが、いよいよ天津日嗣の大神様に、桃李の花をたてまつり、国土安穩にして、いつも陽々たる、春のごとき世界に立直しおき、無限の神力をかくしつつ、神の誠実をあまねく天地にあらはし、麻柱の大道を万民に示さむがために、ふたたび天上へおのほりになつたといふことである。

ワキ歌『絲竹呂律^{しちりく}の声々に、しらべをなして音楽の、声すみ渡る天つ風、雲の通ひ路心せよ』

『絲竹呂律の声々に』とは、笛、笙、簫^{ひやり}、篳篥、琴、琵琶、太鼓、羯鼓、鉦鼓などの、音楽の声といふことである。西王母の分身なる天津少女は、三千年の艱苦をへて、咲きそろひたる桃花を、天津日嗣の御子の御もとにたてまつりをへて、地上をはなれ、あらためて、天上に歸りたまふ時、地の上的諸神諸仏をはじめ、一切の万霊、別れを惜みて集まり来たり、もろもろの音楽のしらべをなして、その昇天を送りまつるのである。

『声すみ渡る天つ風、雲の通ひ路心せよ』

古今集に、

天津風雲の通ひ路吹きとちよ少女の姿しばしとどめむとあるを引き用ひたのである。この歌は五節^{むしち}の舞姫を見て、読み出でたる歌である。

地上よりは、諸神諸霊が別れを惜みつつ、あらゆる音楽を奏して、感謝の意を表し、神慮をなぐさめまつるとともに、天上よりもこれに応じて、絲竹呂律の調べも正しく、勇ましき音楽を奏して、天津神たちの数限りもなく迎へのために、雲路を押しわけて現はれたまひ、三千年の神の艱苦の功を感賞し、綺羅星のごとくに現はれたまふその盛況も、地上の俗人には、うかがひ見ることはむづかしいが、しかし雲の通ひ路を心しうかがへば何とはなしに、天上の勇ましく、にぎはしき様子であることが、うかがひ得らるるてふことを、示したる名文である。

地『おもしろや、かかる天仙理王の、來臨なれば数々の、孔雀鳳凰
迦陵頻伽、飛び廻り声々に、立ち舞ふや袖の羽風、天つ空の衣な
らむ、天の衣なるらむ』

これまでは西王母の身分分靈は、葦原瑞穗國を修理固成の目的をも
つて、地上に降り、稚姫君の命と化し、あるひは坤の金神と化し、
沢田姫命と交じて、国祖の神業を輔佐し、地上の幽界、顕界をあま
ねく調査し開拓し、いよいよ神政成就の、経綸大略なりたれば、天津
神の命によりて、めでたく天津御國へ帰り昇りたまひ、ふたたび天津
大神の神勅を奉じて、豊葦原の中津國に、降りたまつた一段である。
天津少女の形姿にて、昇天されしが、この度は四辺にかがやく、黃錦
の御衣を着し、神格も一そう高く、神威もかくかくとして西王母の全
能、月の大神となつて、降臨あそばしたのである。これからがいよいよ
よ待ちに待ちたる、五六七の神代が、地上に樹てられて、万世一系の
皇室の御稜威が、地上の世界一般にかがやきたるやうになるのである。
この西王母の著作は、まつたく神明の指示によつて、ものされた
神文であつて、じつは今日の世の現在、ならびに近き将来の出来事の
真相を、予告したものである。『おもしろや』といふことは、慶賀歡
喜の至極の辞にして、太古天照大御神、天の岩戸にかくれたまひ、六
合暗黒にして、昼夜を弁ぜず、天上天下は、大騒乱勃発して、ほとん
ど地獄の状態となつた時に、思兼神その他八百万の神々が、天の岩
戸の前において、音楽を奏し、もつて神慮をやはらげまつり、ふたた
び岩戸より、大神出現ましまして、宇宙一般照り明りたる時に、八百
万の神の口より、異口同音に惟神的に発したる讃辭歡語である。本段
の『おもしろや』もまた、その時のごとく、万神歡喜の声であつた。

大本神論のいはゆる、二度目の天の岩戸びらきは、すなはち天仙理王
の、降臨さるる時の、この実況を諭示あらせられたのである。天仙と
は天上に在す仙人のことで、理王は仙人の名である。すべて仙人には
神仙、天仙、地仙、凡仙の四種の階段がある。天仙の地に降りし時
は、その間これを地仙といふ。凡仙は、仙人の内でも最も下級劣等の
仙人であつて、俗塵を避けて深山幽谷に遁れ、松葉などを食物にし
て、ひたすら長寿をたもつくらうが能であつて、天下公共のために
は、何一つ貢獻することのない無用の長物である。

天仙理王は、天上における仮の名称であつて、その実は月宮殿の主
神月読の大神の、御化身である。地上に天国高天原を建てて、至美至
善なる五六七の神代の政治を執り行なはむがために、御降臨になる
のであるから、かずかずの孔雀や、鳳凰や、迦陵頻伽などの、めでた
き天上に住む鳥が、神明の聖代を祝して、中空に飛びまはり、各自に
声をはなちて、太平の御代をうたひ、立ち舞ふ、その翼の羽風も勇ま
しく、地上にとどろきわたり、天地清浄にして、じつに極楽の状況が
現はれてをるのである。

『天つ空の衣ならむ、天の衣なるらむ』とは、この目出たき祥鳥の
翼のきれいな、立派なのを歎賞して、天津神の御神衣であらうといつ
た意味である。しかしながら孔雀、鳳凰、迦陵頻伽といふは、その実
は形容詞であつて、天津神に仕へまつる天使のことである。その天使
のなかでも最もすぐれたる使神が、月読の大神を中空まで送り來たり
て、中空よりその瑞祥を讚美して、舞樂を奏し、祝意を表したまへる
ことを示されたる名文である。

『天つ空の衣ならむ、天の衣なるらむ』の文意をよく研究すれば、



西王母姿の出口聖師（大正12年6月18日）



出口聖師筆／稚姫君命登天之像・紙本著色（縦7尺3寸×横4尺9寸）

鳥のことではないといふことがうかがはれるのである。

八

シテ『いろいろの捧げもの。地『いろいろの捧げものの中に妙に見えたるは西王母のその姿、ひかり庭宇を輝かし、黄錦の御衣を着し』

『いろいろの捧げもの』とは、普天の下率土の浜に至るまで、王臣王土にあらざるはなきをもつて、宇宙一切の金銀球玉珍宝はさらなり、地球上一切の国土をあげて、天津神の御子と生れます、天津日嗣の天皇に奉獻しまつる神の御経綸である。天に二日なく、地に二王なし。しかるに現代のごとく、天下いたるところに粟散王があつては、たうてい天祖の御神勅なる豊葦原の瑞穂の国一般（地球）を平らけく安らげく知食することができない。ために神論にあるごとく、七王も八王も世界に王が出来ては、世界の苦舌は絶滅せないで、変性男子と変性女子の二柱の神霊地上に現はれて、久良芸那須ただよへる、混乱世界を修理固成したまひて、真の五六七の聖代を樹立し、これを雲上の皇大君に捧げまつり、治国安民の神策まで附して、万劫末代の神世の経綸策を奏上したまふことを、いろいろの捧げものと申すのである。神論にも『この世界は人民の力では幾万年たちでも治まりはいたさぬぞよ。神が表にあらはれて、男子と女子の因縁の身魂を現はして、経と緯との守護でなければ、人民の細工では万劫末代の世はつきはいたさぬぞよ』と示されてあるのに徴しても、明白なる事実である。

『中に妙に見えたるは西王母のその姿、ひかり庭宇を輝かし、黄錦の御衣を着し』

いろいろの捧げ物のなかにも、至つて靈妙艶麗なりしは、西王母の

崇高優美にして、かつ偉徳全備の御神姿である。玉身よりは、明彩なる光華を発揮したまひて、宮殿くまなく照りわたり、宇内六合に光明あまねく徹りかがやき、眼もまばゆきばかりである。これは西王母の神威靈徳をたたへまつれる形容詞であることを知るのである。『黄錦の御衣を着し』とは、立派な黄色の錦衣を御召しになつてといふことであるが、その真意は、葦原の瑞穂の国をよく治まりて、立派なる天来の日本魂に、地上の神々および人類が立ちかへり、月の大神の神徳に、御衣のごとく親しく附き従ひ、かつ御神体を護りをするこの形容詞であつて、いかにこの大神の御仁徳の高くして広きかをうかがはれるのである。

九

シテ『劔を腰に提げ。地『劔を腰に提げ、真纓の冠を着、玉觴に盛れる桃を侍女が手より取りかはし』

『劔を腰に提げ』劔とは両刃の劔である。敵も斬れば自分も斬るてふ戒めの武器である。戦場などにて用ふる劔は、敵のみにむかつて斬りつけるやうに出来てをるが、神の帯ばせたまふ物はすべて両刃である。自分が悪い時には自分を斬り、他人の悪い時には他人を斬る、両方釣り合ひの劔である。ツルギは、釣合ひ切るの約り言葉で、これを正中から割いて棟を作り、自分の方へ棟をむけて、他のみを斬るやうに作つたのは、いはゆる攻撃侵略を意味する不祥の武器である。三種の神器の一つなる草薙の神劔のごときは、すなはちこの釣合切の意味から、あらはれた両刃の神器である。また劔は極東日本国の地形の象徴である。話が脱線したが、ついでだからここに書き加へておくことにする。劔は日本国土の形象で、草薙の神劔である。ゆゑに日本に生

まれた民族は、この神劍の靈能を受けて生まれて来てをるのであるから、自分を省み、他を助け、正義と武勇に富んでをるのである。古来、外国よりわが皇国へむかつて攻め寄せて来たことが、十数回あつたけれども、この神劍の威徳と日本魂の光輝に射抜かれて、いつも敗亡してをるのは、この神劍の御威勢の効果である。鏡は日本固有の七十五声の言靈の表徴であり、玉は天の下を平らけく安らけく治めたまふ、天立君主なる天津日嗣天皇の統治権の表徴である。ゆゑに天皇の御神体を玉体と奉称するのである。

『真纓の冠を着、玉觴に盛れる桃を侍女が手より取りかはし』大君に捧げまつる桃実といふ意義は、真纓といつて、日月の綾の織り込みたる纓のついた冠を着られたのである。纓は冠の緒であつて背後に下りたものである。この御神姿をうかがひたてまつる時は、実に変性女子の御魂が、衣冠を着して大神の大前に奉仕せる時の姿そのままである。『玉觴に盛れる桃を侍女が手より取りかはし』玉の觴に桃の花実を盛りたるを、侍女が捧持して、大君の御前近く進みたる時、西王母の月の大神はこれを受け取りて、みづから大御前に進み出でたまひて、日嗣の皇大君に献られる時の莊嚴なる儀式である。

十

シテ『君に捧ぐる桃実の。地』花の盃、取りあへず、花も酔へるや盃の、手まつさへぎる曲水の宴かや、みかはの水に戯れ戯るる、手姫女の、袖も裳裾もたなびきたなびく、雲の花鳥、春風に和しつづ雲路に移れば、王母も伴ひよち上る、王母も伴ひ上るや天路の、ゆくへも知らず、なりにける』

シテ『君に捧ぐる桃実の』これは西王母が永年の苦心された結果と

して、三千年の桃の花も咲きそろひ、かつ立派なる風味よき果実となりたるを、手づから三ツの御魂と現はれて献上されたことである。伊邪那岐大神が黄泉軍に追撃されて、黄泉比良坂の桃実をもつて、魔軍を討滅したまひたる、大神津見命の忠勇なる活動によりて、神業を輔佐しまつりたると同様の桃実である。要するに智仁勇の三徳を備へたる至誠至実の忠臣を、大君の大前に、五六七の大神のたてまつられし意義である。『君に捧ぐる桃実の』と誌して後の文句をかくされしは、言外の言、書外の書たるゆゑにして、ここには深遠玄妙なる神意が包含されてあるのである。

地『花の盃、取りあへず』いよいよこれからが五六七神政出現して、大君の群卿百官を禁庭に召し出され、盛んに豊の明りの宴をもよほし、祝したまふ光景を描出したものである。『花も酔へるや盃の』とは、盃に桃の花をうかべて祝ひ酒を飲むや、すぐに酔つてしまふことである。花もまた酒に酔つたやうに、盃面にただよふと面白くかけたる文章である。

『手まつさへぎる曲水の宴かや』手をさし出して、盃をさへぎりすることである。

『曲水の宴』とはいにしへ禁裏のお遊びに、曲水の宴といふことが行なわれて、水に盃を浮かし、その盃が流れ来るとき、受けたる人が詩歌を作り酒を飲むことあり。その盃の流れ来やうが早かつた時は詩歌はまだ出来てゐないが、まづ手を差しだして、盃をさへぎり取るといふ意にして、菅原惟規の詩に『牽、流、過、手、先、遮』と作れるより来たもので、ただ禁中における御酒宴の故事をここに引きて作したものである。公事根源には『曲水の宴は三月上巳の日に行なはる』と

あり、三月と巳の日とに注意すべきである。『みかはの水に戯れ戯るる、手嬋女の、袖も裳裾もたなびきたなびく』みかはの水とは御溝みかはの水のことであつて、内裏の御庭にある清浄な流れである。これにて曲水の宴を行なはせたまうたのである。『袖も裳裾もたなびきたなびく』とは、舞曲の美女おとめの調子よく立ち舞ふさまを、天女の舞ひ遊ぶにたとへて書かれたのである。

『雲の花鳥、春風に和しつゝ雲路に移れば』雲に花鳥の模様を織りなせる衣をいふ。それを前の孔雀鳳凰迦陵頻伽などの鳥にいひかけて、雲路にうつると文をいひつづけられたのである。

『王母も伴ひよち上る』王母は西王母のことで、一名を広教真君くわくかうしんくんといふ。『靈山会場の法の間、広き教の真ある、君君たれば、誰とも、勇みある、世の心かな』とあるを見て、西王母の仁慈ふかき神徳

をそなへたる神君たることを知らるるのである。

以上の言靈解により、西王母は月の大神にして、変性女神の大活動神たることがわかるであらう。西王母は世界救済、修理固成の神業を負担して、三千年の長歲月を、千辛万苦し、つひに神業を完成し、五六七の神政を地上に樹立して、天祖の御子たる、天津日嗣の御子に万有一切を奉獻し、あとに毫末の未練をのこさず、いさぎよく、ふたたび天上の月宮殿に還り上りたまへる、その忠誠は、天の益人ますひとなる地上の民のもつて規範とすべき麻柱あさばしらの大道である。綾部における変性男子と変性女子の天下修斎の神業に対してかれこれと疑惑をいだき、しゅじゅ論難攻撃するの人々よ。西王母の至誠至実なる麻柱の神蹟を了解し、もつて敬神尊皇報国の聖団、皇道大本の真相をさとりたい。

（「神靈界」大正10年3月号36〜52頁）

功 験 録

良 坤 二 神 現 蔽 瑞 威 靈	創 開 全 大 宇 宙 大 經 綸
不 断 説 愛 善 真 信 之 道	天 明 漸 来 出 生 稚 姬 靈
並 素 尊 精 靈 錦 綾 聖 地	三 五 月 光 広 照 弥 勒 世

（大正一三・九・二二）

（「靈界物語」第49卷第15章236頁）

あとがき

大本教学第四号に「ミロク神」に関する項目表を発表しまして、後日、大本文献（大本神諭・靈界物語等）の上から、ミロク神について詳細に説明させて頂くことを約束しておりました。本号に代表となる文献を集録してその責めを果たさせて頂きました。

○

本誌の口絵写真は弥勒神にゆかりあるものばかりである。

月輪を背負う聖師―数へ年六十三才の年で元氣澆刺のお姿、天祥地瑞丑之巻（靈界物語第六十四巻）口述中のもの。

山越え弥勒聖像―聖師が五六七の神業が本格的に開始される予言として書かれた尊像で「今やミロクの大神様は地平線上に現はれ給うて、早や肩のあたり迄を出されて居るのである。腕のあたり迄お出ましにならねば、本当のお働きは出来ぬのである。腕は力の象徴

月下の景色／菅公／絹本著色（縦四尺六寸五分×横一尺三寸五分）

出口聖師揮毫



である。」（玉鏡）と示されている。仏教式に右手の掌から手首の下あたりまで示されているのが印象的である。チラッと切れ味を見せられたところで、聖師執筆の瑞の神歌の予言が、昭和六年九月十八日に満洲事変がおこった「シベリア線を花道と」の実現期に入った頃の揮毫である。

山越みろく扮装聖師―仏教式でなく、左手をかかげられている立替えの弥勒と申し上げることが出来る。従来 of 仏像の弥勒仏は地に配する左手を膝の上に静かに、おかれている

ので、学者をして「私は弥勒がまだ成仏してないから左の手のうちを見せないのだ」と冗談をいわしめた。聖師扮装の弥勒は、左手の手掌をハッキリ見せてあるので、聖師の十本の天下筋の裡三本まで、アリアリと見えている。ミロクの大神が、三千年（無限の年数）経綸の、神秘を発表される意義とうける。

出口聖師筆南西出現瑞靈神—坤金神豊雲野尊の神姿である。太古の神代に天のミロクの大神が地上の神界に天降り、国祖の神政を輔佐せられ国祖の隠退と同時に坤の靈島にひそみ天運循環を待たれていたが、今度の二度目の天岩戸開きに際して、再び天のミロクの大神の化身として天降り、ミロク神政成就に奉仕される神姿。

神素盞鳴尊—豊雲野尊の分霊ではなく伊都能売の神で、天の至仁至愛の大神の分霊、顕現である。三界の救世神・救世主として地上天国樹立の中心となる神柱である。天のミロクの大神が地上に降られた時の神名で地のミ

ロクの大神で、一名月読尊ともいう。人の肉体を持って活動される人のミロクと称される神で、幽の顕神である。

聖師筆の聖三会仁愛神像—は、ミロクの大神の活動をえがかれたものである。ミロクの大神は本体は法身であり、繰繰与奪其権有我という一切の神権を活用する働きは、応身ミロクである。この応身ミロクの説法そのものを報身ミロクというので、三神一体のミロクである。三会とは弥勒が三回にわたる大説法会によって、釈迦にすぐわれなかった、一切の衆生を救済するとの意である。中央を法身、向って右を応身、向って左を報身と見ることも出来る。

みろく様の宮居月宮殿の聖師—聖師は満五十六才七カ月に御神命により、一段神格を降して、弥勒菩薩として現界的に本格的に活動を開始された昭和三年十一月に、亀岡天恩郷に、弥勒様の宮居として月宮殿を完成させられた。ここは聖師に帰神された弥勒神の天の宮居月宮殿の移写である。天恩郷は月の宮の

完成によって地上の最高靈国の中府と神定められた。聖師は完成にあたり「君が代は千代万代に動かざれと石もて造りし月宮殿かな」と祝福された。

懸額—弥勒出生—聖師が明治四年旧七月十二日誕生され、昭和三年三月三日、満五十六才七カ月から神命のまにまに、弥勒菩薩として本格的に大活躍をされた記念のもので、印文に伊都能売とある通り、弥勒は伊都能売であることが明らかである。

高砂沖の神島—坤の大神の神歌に「三千年の潮浴みながら只ひとり世を牛嶋にひそみて守りぬ」「世を思ふ心の船は梓弓播磨の沖に浮きつ沈みつ」と詠じられた神島で、三千年（無限の年数）の間を、五六七の大神が千座の置戸を負うて救世の大経綸をなされた、「朝日の直刺す夕日の日照らず高砂沖の一つ島の一つ松の根本に三千世界の宝いけおく」とつたえられた神島である。

（木庭次守・記）

昭和四十六年十一月一日 印刷
昭和四十六年十一月六日 発行

大本教学

第十号

(非売品)

編集兼発行者

伊藤栄蔵

印刷者 土居重夫

発行所

大本教学研鑽所

京都府亀岡市天恩郷